
恐竜探索殺人事件 オーストラリア編

香川景全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐竜探索殺人事件 オーストラリア編

【Nコード】

N0898C

【作者名】

香川景全

【あらすじ】

丸の内署を退職した小野原勉はオーストラリアに定住し毎週の日課となっている河川底恐竜探索に出掛けた。ある日恐竜の化石ではなく人間の白骨死体を発見する事から、大先輩の香山博士と共に、殺人事件に深くかかわり解決して行く。

第一章 河川底恐竜化石探索

恐竜探索殺人事件

オーストラリア編

作者 香川景全

主な登場人物

小野原勉 主人公：丸の内署を退職。

香山影治 古生物学者：オーストラリアで恐竜探索に余生を傾けている。

熊谷征次 早川浩一の息子：馬鹿。大学を親父の金で卒業。弁護士になる。

亀井靖之 大船碇禎治の息子：大学受験に失敗しゴールドコーストへ流れ 大学在学中

に不動産で儲ける。熊谷

征次と出会い。

熊谷初恵 早川浩一の2号：気が強く

早川浩一 早川建設社長。

大船碇禎治 大船碇組組長：

ジェイソン課長 ダルビー警察署の殺人課刑事

目次

第一章	河川底恐竜化石探索
第二章	1995年6月
第三章	1993年8月
第四章	恐竜との出会い
第五章	川底探索
第六章	1994年2月
第七章	1995年7月
第八章	新事業
第九章	恐竜展
第十章	2004年12月
第十一章	密談
第十二章	弱気
第十三章	早川浩一逃避計画
第十四章	大陸一周旅行
第十五章	大船碇禎治
第十六章	身代わり
第十七章	崩壊
第十八章	弁護士事務所の崩壊
第十九章	ダルビー警察署
第二十章	大船碇禎治逃避計画
第二十一章	密謀
第二十二章	逃避
第二十三章	酒場

第二十四章	逃避行
第二十五章	実行
第二十六章	毛髪
第二十七章	プロローグ

第一章 河川底恐竜化石探索

小野原勉は毎週の日課となっている河川底恐竜探索に出掛けた。2006年の今年は例年になく雨量が少ない。雨期にも雨らしい雨が降らなかった。だから川底と言っても時たま水たまりがある程度なのでハイキング気分で行ける。

オーストラリアに定住を決めて以来、取り憑かれた恐竜の探索だった。基地を定めたクイーンズランド州のダルビーという町を中心として色々な場所を探索する内に、一年前から体力維持と、気分転換を求めて河川底の探索を加えたのだった。

そもそも小野原勉が住むダルビーの土地自体が110myaと言う古い表層部を持つ土地である。myaと言うのはミリオン・イヤーズ・アゴの略称で、100万年前の意味だ。いわゆる小野原勉は1億1000万年前の地上に住んでいる訳だ。河川底は更に表層部から10メートルも下だ。

化石を一つ見つけクイーンズランド博物館で調べて貰ったら130myaと判断されたことがある。いわゆる毎週の日課として歩く

土地は1億3000万年前のジュラ紀に近い白亜紀のものだ。

河川底探索も、毎日だと飽きるし、変化の無い暮らしの一週間に
はじめをつける意味で日曜日とした。朝目覚めるとトーストを焼き
ながら昼飯用のサンドイッチを作る。今日は天気も良いし風もない。
「今日は、新しいコースを歩いてみようか」

と、気持ちも新たに、作るサンドイッチにも趣向を凝らし、コー
ヒーには牛乳をふんだんに入れ、そして大きめのジャーに氷をたく
さん詰めて入れた。

出掛ける前に地図を丹念に確認し、ウイルキー・クリーク（川）
の今回探索する予定未踏査部分にしるしを入れ愛車の4WDを走ら
せた。ウイルソンス通りと表示されている道に来た。勿論舗装など
されていない。たぶんこの道から入り込んだ所が今日の起点になる
だろう。ただ道路名からして個人の専用道路では無いかとふと思っ
たが、何か言われれば引き返せばいいと左折しクリークまで車を走
らせた。クリークまではほんの2キロ程の距離だった。道は一旦川
底まで降り小さな潜水橋を経て対岸へと続いている。

小野原は対岸へと車を走らせた。しかし道は潜水橋を渡り対岸へ
と登り切った段階で行き止まりとなり、農地の入り口柵があるだけ
だった。空地に車をUターンさせて停め、恐竜探査七つ道具を用意
している最中、地元の老夫婦が追いかけてくるように車を走らせて
来た。どこへ行くのかと聞かれた。車に貼った恐竜のステッカーを
指さし、今から恐竜を探しに川底を歩くのだと説明した。小野原が
歩き出すと、彼等は

「天気もいいし頑張ってね」

といい、車をUターンさせて元来た方角へと走り去った。やはり
個人がつけた専用道路だったのだろう。文句を言われなかったので
予定どおりクリークの底面を北上した。

一言でクリークと言っても川幅は広い所で50メートルもあり、

深い所では地表まで10メートル程もある。今日は始めてのコースなので北上は1時間と決めた。

オーストラリアという所は不思議な所だ、川の中の至る所で有刺鉄線によつてせき止められている。ここから入つてはいけないといふのかと最初の頃は、その有刺鉄線までで引き返して探索をうち切つたものだった。一度思い切つて、近くの農家の人に片言の英語で聞いた。それは人の進入を妨げるものでは無く、周辺牧場の牛がよそ様の土地へと移動しない為の柵だと言うことだった。それ以後は有刺鉄線にシャツを引き裂かれながらも予定どおりのコースを消化して来た。

始めてのコースは必ず道に迷う。それは河川が幾つも合流してメインのクリークを形成しているからだ。このクリークの場合北行は川の流れに沿つて下流への遡行である。しかし、帰路は川の流れに逆らう事になる。いわゆる主流を歩いているつもりがいつの間にか支流を歩いている事が度々ある。一旦支流に迷い込むと気がつくまで1キロも2キロも余分に歩かなければならない。

雨が降らないので河床は完全に乾燥して大半が砂地になっている。それでも生乾きの所もたまにあり、粘土質の場合は表面が亀の甲状態にクラックが入っている。たまにその状態で石化しているものもあり一瞬亀の化石かと思間違う。いわゆる擬似化石と呼ばれる物だ。大木が数カ所倒れ川をせき止めている箇所がある。日本で言うなら注連縄を廻した御神木と言われるほどの大木もあった。

川底と言つても谷あり山ありで、更に恐竜の探索という崇高な目的があるので眼に景色は映らず、足下と壁面ばかりに眼を走らせる。その所為で今回も帰路に2度も支流へと足を踏み入れてしまった。明らかに本流より川幅が広く、100パーセントの確信の元に選んだコースだったが500メートル程進んだ段階で間違いに気づいた。

約2時間半の踏査だったが普通の道を歩くのに比べ、遙かに疲労

の度合いは異なる。しかも成果が無ければ更に疲労度は加わる。今日も成果無しだった。

第二章 1995年6月

「おい征次。おめえは毎日毎日何をやっているんだ。大学行く気がないんなら予備校なんか止めちまえ。仕事をしろ。馬鹿やろ。起きろ。」

部屋のとびらを蹴飛ばすようにして入ってきた浩一が、ベッドにゴロゴロしている征次を見つけて言った。

「うるせえなあ。親父かよ、寝るときぐらいゆっくり寝させるよなあ。」

征次が寝返りを打って顔を壁の方向に向け替えた。

「馬鹿やろ。何時だと思っっているんだ。もう昼だぞ。とっとと予備校へ行け。」

浩一がベッドの足を蹴った。

「うるせえって言ってるだろう。なんで今更てめえが親父面するんだ。ふん、犬か猫みたいにメスに子供だけ産ませておいて、いまさらバカヤロウはねえだろう。ほっといてくれ。」

征次は言って布団を頭からかぶった。

「てっ、てめえは何て言いぐさをするんだ。もう今日という今日は勘弁ならねえ。とっとと起きやがれ。」

浩一が、言うと同時に蒲団をまくり上げ、征次の肩に手をかけた。「ほっ、どう勘弁ならねえんだよ。」

征次は親父の手を振りほどきベッドから飛び起きた。既に手は浩一のネクタイをつかんでいる。征次の体格はずんぐりむっくりで、背丈は既に親父より頭一つ分大きく、浩一の細目と違って大きな目

でしかも生まれつきそれぞれの眼球が少し違った方向を向くひが目だ。それがこうやって凄んだ時の征次は既にやくざのちんぴらだった。

「めったと顔を見せねえてめえが、いっばしの親父面するんじゃない。」

ひるんだ浩一の一瞬について、征次は部屋から出ていった。

「おい征次はどこへ行った。」

二階から降りてきた浩一が、応接セットに座ったままの初恵を見下ろして言った。

「知らないわよ。あんな子供、いつまでも監視なんか出来る訳ないでしょう。あんな子供がわたしのお腹から出てきたかと思うだけでイヤになるわ。あんな子はどこへでも行きゃいいのよ。」

初恵がヒステリックに叫んだ。

「あいつは、俺の会社にまで金をせびりに来たらしいんだ。お前はどんな育て方をしているんだ。」

浩一が初恵の前に座りながら言った。

「何言ってるのよ。一緒に暮らしているわたしの身にもなってよ。」
初恵が髪を振り乱しながら立ち上がって叫んだ。

「わかったわかった。いいから座りなさい。」

浩一が初恵の肩に手を伸ばして押さえ込むようにして座らせ、初恵の気持ち収まるのを待った。浩一は考えた。どうしてこんな女とこうなったのだろうか。昔は色気もあつたし、優しさもあつたように思う。今はどうだろう。この夜叉みたいに髪を振り乱している女はいつたい俺にとって何なのだ。うまく放り出す方法は無いものだろうか。

「征次が学校も行かないのなら、俺の会社で作業員からでも仕込んでみようと考えたのだが、それも難しそうだな、、、」

初恵の気持ちが少し収まった様子を見て浩一が言葉を漏らした。
初恵がため息をついている。

「このまえ、あの子がちょっと落ち着いている時に話をしたの。そうしたらあの子、オーストラリアへ行きたいなんて言うのよ。」

「オーストラリアへ行って何をするんだ。」

浩一がビククリして聞いた。

「ううん、別に何をするっていう訳じゃないの。ただ行って住みたいただけのようよ。」

初恵も征次の気持ち判らないと言う感じで返事を返した。

浩一はしばらくの間、眼をつぶって考えてみた。どうだ、これはいい機会じゃないか。いつそ初恵も一緒にオーストラリアへと放り出すか。遠い国だからそんなに度々帰って来るわけにもいくまい。

これは一石二鳥って言う事じゃあないか。よし。

「そうか、征次がやりたいことなら、いつそやらせてやった方がいいかも知れないぞ。今は会社も景気がいいから、金は出してやれる。この前ゴールドコーストって町に行つて来たんだが、あそこはいい町だ。いつそそこで日本料理店でも開くか。お前だつて小料理屋をやっていたんだから、向こうでやっても同じ事だろう。征次が手伝うならそれもいいし、学校へ行きたいなら向こうの学校と言う手もあるし。どうだ一度一緒に行ってみるか。」

浩一の言葉を聞いて、初恵が眼を輝かせた。初恵には気のおけない友人が一人いる。その彼女が昨年、オーストラリアのゴールドコーストへと移住していったのだ。何でも向こうに住んでいる日本人と結婚したそうだった。彼女からゴールドコーストの素晴らしさは耳がタコになるほど聞かされていた。本当は初恵が征次をオーストラリアへと誘ったのだ。でも浩一にはそんな事は言えない。

「でもオーストラリアって遠いんでしょう。わたし心配だわ。」

「何を時代遅れの話をしているんだ。この家から成田まで40分くらいで行くし、成田からブリスベンまで8時間くらいだぜ。しかも夜中に飛んで行くから飛行機に乗ったとたんに寝てしまえば朝起きたときにはもう着いているんだ。俺なんか運転手に乗せられた車の

中で居眠りをして、飛行機の中でぐっすり寝て、目覚めたらオーストラリアだったから、まさか自分が外国にいるなんて気にもならなかったぐらいだ。」

浩一は初恵がその気になると、気を引くように力を入れて言った。

「そうね、わかったわ。征次ともゆっくり話してみるわね。」

「征次どうする。お父さんがオーストラリアへ行っても良いって言ったよ。」

それから数日後、夜中まで征次の帰宅を待ち、初恵が征次を応接セツトに座らせて言った。

「なあんだ、また説教を聞かされるのかと思った。そっか、オーストラリアへ行けっか。やっぱり俺なんかいらぬ子供なんだな。」

征次が僻んで、タバコに火を付けながらつぶやいた。

「違うわよ。お父さんはゴールドコーストに日本食のレストランを造るからわたしに行けっかと言っのよ。だからあなたが手伝っか学校に行くか考えろっか言っのよ。」

初恵が慌てて征次の考えを否定した。

「どうせ親父の考えることだよ。俺達厄介者は遠くへ島流しにした方が気楽なんだ。」

「馬鹿、何を言っのよ。馬鹿。」

初恵が征次の顔を叩いた。

「なにするんだ。お前だっつてそう言っただじやないか。」

征次がほつぺたを押さえて息巻いて言った。

「まあ、何でもいいじゃない。せっかくお父さんがその気になっただし。お金を貰っつて遠くに住むだけでも気楽だからね。あんだっつて毎回毎回うるさく言われるのはイヤでしょう。」

「どうでもいいけどね。だけどオーストラリアっ言葉はどうするんだ。英語だぜ。あんたはABCすら知らないんだろ。俺だっつて英語が出来れば予備校なんて行かないで大学に入っつていたんだから。」

「馬鹿だねえ、お金が有つたら通訳だつて雇えるじゃない。そんなことはどうにでもなるわよ。」

「外国つて言つたらビザだつていゝんだぜ。まして仕事をするなんて言つたら大変だろつよ。」

「そんなことは全部お父さんにやらせれば良いんだから。あんたは一緒に行くかどうかだけを決めれば良いの。いい。」

イライラしながら初恵が言う。これ以上話をすると又々ヒステリックになると征次は思った。

「わかつたよ。俺だつてここに居てもする事も無いし、親父から少しでも離れられるなら一緒に行くよ。いつから行くんだい。」

「あゝよかつた。お父さんが来週にでもゴールドコーストへ行つて店を探して来いなんて言うから。あたし一人じゃ心細かつたのよ。」

月曜日の飛行機にするわね。」

「おいおい、何考えているんだ。外国ならパスポートもいるし、ビザだつていゝんだぜ。俺はパスポートなんて持つてないし、そんなに早く出来る筈がないだろつ。」

全く何も知らないお袋だと征次は思った。

「うづん、それは全部お父さんがこの前来たときに作つておいてくれるつて言つてたから大丈夫よ。とりあえず旅行の用意だけしておいてね。」

話はこれで終わりのようだ。初恵が立ち上がった。

「わかつたよ。じゃあ10万円くれるか。旅行するのにカバンを買つたりしなければな。」

慌てて征次が言った。

「いいわよ。じゃあここに10万円あるから、あなたにあげる。でも無駄遣いしちゃ駄目よ。」

征次は札束を無造作にポケットに押し込み二階の自分の部屋へと急いだ。

第一章 河川底恐竜化石探索（後書き）

（作者より）

勿論小説ですので全てフィクションです。しかるに登場人物、事象
に関しては現存される人々とは全く関係はございません。

第三章 1993年8月

第三章 1993年8月

亀井靖之は小さな中古車店で程度の良いベンツ190Eを買った。勿論、おやじにねだって金を送ってもらった。

車を購入するについてもそれなりの交渉事もあるし、何分にも店員が説明してくれている事柄も半分以下しか聞き取れない。靖之は自分自身の英語力に疑問を持った。同時に英会話学校で習っている英語が全く用をなさない事もわかった。

靖之はワーキングホリデービザを持ってオーストラリアへと来ているのだから一年間は滞在することが出来るし、働く事もできる。それなのに英語学校へ入るときにスチューデントビザの申請をするかと聞かれた。

無駄なことだ。

無駄なことと言えば、オーストラリアへ来る事にしてもそうだ。別に来たくも無かったのだが、受けた大学のことごとくから拒絶され、少しノイローゼぎみになって、何事にも母親へ当てつけていたのを父親が新聞広告でワーキングホリデーサポートと言うのがあることを見て、勝手に申し込んだ。靖之も目的があるものでもなく一年ぐらい外国へ行くのもいいかなと単純に手続きをした。

ゴールドコーストへ着いてからサポート会社が、パンフレットに書かれているとおりのサポートをしてくれないのに大きな不満を持った。だがインターネットが無料で使えるだけに毎日その事務所へと通った。それもコンピュータの台数に限りがあり、なかなか順番が回ってこない。サポーターが居る窓口カウンターへ行っても

少し前に自分と同じようにして来た若者がたつた1、2ヶ月先にゴールドコーストに着いたと言うだけで、一人前の顔をしてサポートとして働いている。だから、ちよつとした事を聞いてもすぐには答えが返ってこない。廻りは総て日本人ばかりで勿論会話は日本語こんなことなら千葉で住んでいても同じ事だ。

ある日同じ時期に同じ会社のサポートで渡豪して知り合いになった可愛い女の子からゴールドコーストにある大学の英語学校へ通っていると言うのを聞いた。早速一緒に行き入学申し込みをした。

「おやじいるかい」

靖之は久し振りに千葉の家に電話をすると若衆に言った。

「あつ、若ですか。山です。お久しぶりですねえ、えっオーストラリアからですか、ちよつと待つてください」

若衆は電話機を握ったまま走り出した様子で、家の中を走り回りおやじを捜している。その言葉が逐一電話機から流れてくるのを靖之は苦笑しながら待った。

「おう、靖之か、どうだそつちは寒くないか。」

久し振りに聞くおやじの声だが何故か親近感は持てない。

「うん、まあ冬だからね。それよりこつちの大学へ通うことにしたよ。そして大学の近くにアパートを借りる事にしたからさ、金を送って欲しいんだ。」

「なに、大学へ入った。そりゃ本当か」

親父がびつくりしたように聞き直した。

「うん、本当だよ。でも最初は語学だけだけど、一年ぐらいしたら本コースへ移れるそうなんだ。だからこつちで経済でも勉強しようと思ってる。」

靖之は中学も高等学校も英語は大の苦手科目だったが、可愛い女の子と一緒に居れるだけで決めた後ろ暗さがあつたが親にはそれと知られないように虚勢を張って言った。何しろ金だけを送ってくればいいのだから。

「そうかそうか、おい母さん、靖之がオーストラリアの大学に入っ
たそうだ。」

うしろに居るのか母親に話し掛けている親父の声が聞こえる。

「ところで、大学の入学金や学費で年間2万ドルぐらいと、アパー
トの敷金や権利金で1万ドルぐらいいるんだ。それに学校まで結構
遠いから車も買いたいからちよつとまとめて送って欲しいんだ。」

「そうかそうか、よしよし、明日にでも銀行から振り込んでやるよ。
ちよつと待て、幾ら振り込んだらいいんだ。」

やはり親父は金銭感覚が無いらしい。

「うん、車も買うから500万ぐらい送ってよ。」

「どうしてそんなにいるんだ。」

「何言ってるんだい、大学の費用で200万だろう、アパートの費
用が100万だろう、それに車を買うから500万円。判った？」

靖之がうるさそうに言った。

「よし判った。でもちゃんと勉強はするんだろうな。」

うるさい親父だ。

「判ったよ、心配するなって、じゃあな電話代が高いので切るよ。」

靖之は親父からの返事も聞かないで電話を切ってしまった。

第四章 恐竜との出会い

第四章 恐竜との出会い

日本は夏真っ盛りと言った頃だろう。

こちらは真冬だ。真冬と言ってもこの暖かさはどうだ。久し振りに恐竜の探索を休み、掘り出してきた少しの化石を洗ったり、香山さんから借りてきた本で調べたりして、20平方メートルもあるテラスに釣ったハンモックに揺られながら小野原勉はゆっくりと休日気分を味わっていた。本当に気持ちのいい日だ。

小野原勉には子供も無く、時間の不規則な仕事の所為で、一度見合いで貰った妻にも1年程で見切りをつけられ、ある日帰宅してみると家具一切総てを持って逃げられていた。以後一切の欲望を断ち切り、捜査一筋に警察官人生を過ごしたのだった。

刑事魂云々がもてはやされた時代に生き抜いてきた小野原だが、機動力と科学力をフルに活用したチームワークを重視する現代の捜査には異端者扱いを感ぜずにはいられなかった。

小野原勉には親が残した家があり、妻も子供も無く、仕事一筋で貰う給与の大半が手つかずで預金通帳に単なる数字として残り、恩給や退職金を加えると、余生を働く必要も無かった。しかし、退職してから家に一人で引きこもっている訳にも行かず、毎日それまでに身に付いた癖で外を出歩くしか時間のつぶし方が無かった。

小野原勉は定年を迎えてふと人生を振り返ってみた。職業柄女に金を使った事も無く、競輪競馬は元より博打一切やったことがなか

った。友人が身体に良いからと薦めるので興味も無かったが暇つぶしにと温泉めぐりをしてみた。湯に浸かって無心になろうとしても一緒に湯に浸かっている人々が容疑者や犯人、犯罪者に見える。食事時に給仕をしてくれる仲居まで女を売り物にしているのではないかと疑いの目で見える。人を見れば犯罪者と思えと言う根性は抜けきらないものだ。

そんなある日、東京駅で列車を降りると幕張メッセで開催されている恐竜展のチケットを販売しているのが目に入った。広告を眺めている内に、終戦後子供時分に親父に連れられて恐竜博覧会へ行った時の事を思い出した。駅員の熱心なセールストークに耳を傾けている内に一枚のチケットを購入してしまった。

「まあ、暇人だからちよつとみてくるか」

幕張メッセは家族連れ、恋人同士、グループなどで思ったより盛況だった。小野原は退職してから以後、出来るだけ人混みから遠ざかってきた。それまで散々に人混みをかき分けるようにして生きてきた人生を清算する意味でもあった。久し振りの人混みにまみれ、しかも子供達の多さに多少辟易しながら、出来るだけ人気のあるアトラクションなどを避けて歩いた。昔、親父と行った恐竜博覧会は野外に恐竜の模型を展示した程度のものばかりだった記憶があるが、今日のは随分と趣向も凝らされ大人でも結構楽しめるものだった。展示された恐竜の骨格や写真にはすべて詳細な説明板があり、小野原のうしろで子供達が恐竜に関するうんちくを話す声を聞き、今時の子供達は何でもよく知っているなど感心させられながら、ゆっくりと総てを読んで行った。

自分も少しは勉強でもしてみるか。

会場の隅に即売場があり、恐竜の小さな模型からTシャツ、おもちゃ、本などが売られていた。その中から小野原は3種類の本と会場のパンフレット、それにコーヒーマグカップを一つ買い求めた。

余韻を残しながら帰宅する家族連れなどの雑踏に紛れて駅まで来た際、目に入ったお好み焼きの看板に釣られて自動ドアをくぐった。店は恐竜展の会場と大差の無いほど混雑していたが一人分の席を見つけ生ビールといか玉焼きを注文した。

「さすが千葉だけあって、このいかはうまいね」

と、店員に愛想を使ってみると

「いえ、これは輸入物です」

忙しいのにまったくくだらないことを言うと言った感じで笑顔も見せず店員は応え、すぐ違う客に呼ばれて行った。

仕方なく小野原は生ビールに舌鼓を打ちながら、買ってきた恐竜の本を開けてみた。ふと気づくと廻りの人々も自分と同じく恐竜展からの帰路に立ち寄った者達らしく、話題が恐竜にあった。本を読むとも無しに眺めながら、周辺の言葉に耳をかした。

「ふむふむ、これはいい。結構耳学問になる。やはりどんな勉強でもその地へ行ってするものだ。暇なのだから一度中国のゴビ砂漠でも行ってみるか。あれっ、ゴビ砂漠はモンゴルだったかな。」

小野原はつぶやきながら勘定を終え、帰宅の途に着いた。

長年の癖や習慣は抜けきれるものではない。つい足が古巣であった丸の内署の前に小野原を運んでいた。見上げると懐かしい窓に煌々とした灯りが目に入る。

「ちよつと寄ってみるか。」

衝動にかられてドアを押した。

「ありやいや、めずらしい人だ。どうした風の吹き回しだい。」

「お久しぶりです」

「お元氣そうで、なによりです」

旧の仲間達や上司が懐かしそうに声をかけてくれた。それにしてもまだ退職してから数ヶ月しか経ていないのに、言葉は長年会っていない人を迎えたようだ。

「いやあ、千葉まで行った帰りに、つい懐かしくて来てしまったん

だ。別に用があつて来た訳じゃないから顔を見ただけで失礼するよ。

「あれ、小野原さん、恐竜展に行ってきたんですか。」

最後まで小野原とコンビを組んでいた若い山本が、小野原の提げている、表に恐竜の絵を描いたビニール袋を見て聞いた。

「ああ、これね。退職してからする事が無いものだから、駅で買わされたチケットが勿体ないので覗きに行ってきたんだ。」

「どうでした、行った値打ちはありましたか」

「うん、ああ、まあ結構楽しめたよ。でも夏休みの子供達が大半で少しうんざりしたことも確かだけどね。どうしたんだ君も興味があるのか。」

「いやいや、僕じゃなくて子供が連れて行けつてうるさく言うからなんです、一人2500円はちよつときついんで、考えているところなんですよ。」

山本が頭をかきながら言った。

「ああ、信坊か。山本くん。子供が興味のある事はかなえてやった方がいいよ。今日は廻りの子供達が話している事を聞きながら僕も結構勉強になったからなあ。世の中に出て知らないことを子供達から教わるなんて事は、今日まで考えた事が無かったから、結構力ルチャーシヨックが強かったよ。だから衝動買いたいだけどころやって本を買い込んで少しは勉強してみようかなって気になったんだ。」

小野原は買って来たビニール袋を持ち上げて言った。

「でもねえ、小野原さんはそう言うけれど最近うちじゃ子供の方が僕の小遣いより多いんですよ。なんたってコンピューターを買わされてインターネットをやりだしてから電話代からその接続料から本代まで大変なんですから。」

山本が言った横から

「えっ、山さんとこもインターネットを始めたのかい。」

川上刑事が口をはさんだ。

「そうなんですよ、もう一年ぐらい前からですけど、最近では学校から帰って来るとカバンを放り出してすぐパソコンのスイッチを入れるんです。勉強しているんだか、遊んでいるんだか判りやしないけど、話を聞くと結構物知りになって、最近じゃ、お父さんそんなことも知らないのって言われて教えられる始末ですよ。」

「ほう、そうなんだ、うちもパソコンを買ってこれって毎日うるさいから、昨日も女房と一緒に見に行ってこいってどなったんだ。」

「川上さんところは何年生になったのかな。」

「うちは中学一年生だよ。」

「あれっ、じゃ、うちのぼうずと同じなんですな。それなら買ってやったら良い年頃ですよ。最近じゃ大学の教授なんかともメールで話をしているようで、この前もその教授から来ていたメールを読ませてくれたんです。何とか言う名前恐竜の難しい話をいろいろと書いていましたよ。あれじゃ我々が話題について行けなくなる筈ですわ。」

「へえ、インターネットってそんなことまで出来るのかい。」

横で聞いていた小野原にも俄然興味が湧いてきた。

「ええ本当ですよ。聞くとその人のホームページとかやらへアクセスして、色々と質問を書いて送るそうです。そうしたら早ければすぐ返事をくれるそうで、まったく勉強に年齢なんか関係なくなってきたみたいですよ。」

小野原は山本の言葉の中にカタカナ用語が入りだしたのを聞いて、こいつも結構それにはまり込んでいるなと思った。

しばらく雑談を交わして署を出た小野原は

「いつそ秋葉原へ寄ってみるか」と、駅に向かって歩き出した。

「最近、どうも衝動買いが多くて駄目だなあ。」

小野原勉は、先日何気なく買ってしまったパソコンを前にスイッチを入れようか入れまいかで悩みながらつぶやいた。買ってきたものの全く使い方が判らない。使用説明書を読んでもちんぷんかんぷ

んで頭が痛くなる。パソコンの御陰で飲みたくもない頭痛薬なんかも買った。やっぱり自分にはこんな物は性分に合わないのだろうか。と悩む。でも買って来た恐竜の本やパソコンの説明書を毎日、喫茶店に行っても食事に行っても片時も離さず読んでいたので随分と時間つぶしにはなっている。

パソコンのスイッチを入れる前に扇風機のスイッチを入れた。立ち上がったついでにコーヒーでもいれるかと、パーコレーターの用意をした。小野原は退職してからコーヒーもインスタントは止めてこの本格的な香りの高い方のコーヒーに替えた。近所にうまいコーヒーを出す喫茶店が最近オープンして、その店で挽きたてのコーヒーが入手できるようになったからだ。小野原はブルーマウンテンの細引きが好みだ。パーコレーターから何とも言えない良い香りが漂ってきた。小野原にはこのひとときが至福に感じられる。

「それにしても恐竜の名前はなかなか覚えられないし、パソコンの説明書なんかカタカナばかりで何がなんだか判りもしない。どうしてもっと判りやすく書いてくれないのだろうか。」

コーヒーカップに両手を当てて温もりと香りを楽しみながら小野原はつぶやいた。

「誰かに教わればいいんだ。」

しかし、廻りに思い浮かぶ人物が無い。

「あつ、山本君の子供がいた。そうだ。」

叫ぶが早いのか、すぐさま電話機に飛びついた。閃きと共に行動に移るのは身体に染みついたものである。

「1課の山本君は出掛けましたか、あつ、すみません小野原です。」
「ちょっと待ってください。聞いてみます。・・・今、捜査会議の最中ですからこちらからかけ直すように言っときますね。電話番号は判っていますか。」

電話を受け付けた人間が言った。

「ええ、山本君は判っていますからお願ひします。」

それから2杯目のコーヒを飲み終えた頃、山本から電話がかかってきた。

「小野原さん、何か事件ですか。」

「あつ、山さん、忙しいのにすまないねえ。実は事件なんだよ。買ってきたパソコンの動かしか方が判らないんだ。」

「ははは、」

電話の向こうで山本が笑っている。

「山さん、そんなに笑わないでくれよ。本当に困っているんだ。頼みがあるんだ。」

「ははは、いいですよ。小野原さんの頼みなら何でも聞きましょう。ただし金を貸してと言うのは無しですよ、と言っても小野原さんの方が僕より遙かに金持ちだもんなあ。」

「いや、山さん冗談はともかく、あんたんとこの信坊を一日貸してもらえんだろうか。夏休みだからいつもいるだろう。」

「ああ、それはお安いことですよ。帰ったら聞いておきます。」

「その替わりと言っちゃなんだけれど、彼が行きたがっている恐竜展に僕が連れて行くよ。頼んだよ。」

「それは助かるなあ。僕は時間は無いし、お金も無いしで悩んでいるところですから絶対に行かせますよ。」

そう言つて山本は電話を切った。

「よしよし、これで一つは片づいた。」

もう一杯コーヒを入れようかと考えたが、買ってきた恐竜の本は読み終えたし、本屋へでも行つてみるかと出掛ける用意を始めた。

「小野原さん、うちのかみさんが小野原さんは神様のような人だと言つて拜んでいましたよ。」

翌日、突然山本刑事の訪問を受けた小野原は、山本の挨拶とも思えない言葉にどぎまぎした。

「どうしたんだよ。朝からびっくりするような事を言わないでくれ

よ。」

「いや、実は夏休みじゅう毎日どこかへ連れて行けとか、暑いとか、何か買ってくれとかうるさくてしょうがないと、かみさんがこぼしているところへ、小野原さんの声がかかった事を言うのと飛び上がるようにして喜んだのがかみさんなんですよ。だから何日間でも良いからイヤになるまでこき使ってくれと言っていました。」

「ははは、なあんだ。そうなのか。じゃあ渡りに船と言ったところだったんだね。でも神様はおおげさだよ。まだまだこの世にたくさん未練を残しているから死ねないからね。それより信ちゃん本人はどう言ってるんだい。」

「それこそ、恐竜展に連れて行ってくれて言うだけで舞い上がっていますよ。で、早速連れて来ているんです。」

と言つて山本は車を見た。

「や、山ちゃんあれ覆面パトじゃないか。私用で使うとまずいよ。」

「まあ、そう固いことは抜きにして、あれは参考人ですよ。ちよつとここまで拉致して来ましたから受け取って貰えますか。」

と言いながら山本は車に向かって手招きした。

「おじさん、こんにちは。」

車から降りてきた信太郎がびよこんとお辞儀をして正確な日本語で挨拶をした。背は中くらいでも結構足が長い。顔は親父にて丸顔で化粧をしているみたいにはっぺが赤い。眼は細いが、鼻が異常に高い。全体的に賢そうな雰囲気だ。

「信太郎君、無理を言つてすまないね。おじさん馬鹿だから本当に何も判らないんだ。だからコンピューターの事はABCから教えてくれるかい。」

小野原が信太郎の頭をなでながら言った。

「はい、でも僕もあまり難しい事はわかりませんよ。ホームページぐらいは作れます。」

横から山本が口をはさんだ。

「それじゃ、小野原さんよろしくお願いします。僕はもう行きますから。」

「あつ、山ちゃん、悪かったねタクシー屋さんまでやらせちゃつて。今度なんかで埋め合わせをするから。」

「いやいや、気にしないでください。じゃ、信太郎。ちゃんと教えてあげるんだぞ。」

言葉を残すやいなや、二人の返事も聞かないで山本は車へと乗り込んだ。

「じゃ、信ちゃん、あがつて、あがつて。」

「はい、失礼します。」

ぬいだ靴を後ろ向きに揃えている信太郎を小野原は眺めて、この子は本当に山本の子供だろうかと疑った。山本のロッカーなどゴミ箱かと思うものだし、机の引き出しなど捜し物に―苦勞するほどゴミのような物が詰まっている。勿論、机の上など表面が見えない程の乱雑さだ。

「そつだ、信ちゃんコーヒー飲むかい。おじさんところのは美味しいんだぞ。」

「はい、いただきます。」

「じゃ、そこに座つて。」

小野原は食卓のイスを指さして言い、早速、パーコレーターの用意に取り掛かった。

「僕もこのまえからコーヒーを飲むようになったんです。でもうちは貧乏だからこんな本格的なコーヒーは飲んだことがありません。」

信太郎が小野原の後ろ姿に声をかけた。

「ははは、まあ警察官の給料じゃ、どこかで節約しないと生活が出来ないからねえ。あつと、コーヒーが出来上がるまでそのパソコンをこつちのテーブルに移してくれるかい。」

「はい、あつ、これですね。」

信太郎が応接間から小野原のノートパソコンと充電器を外して台所へと運んで来て言った。

「これ、僕の欲しかった機種ですよ。高かったでしょう。」

「そう、少し高いと思ったけれど、店員がホームページを立ち上げ

たり、動画を再生したり、海外で使うならこれぐらいの物が必要だと言っているので思い切って買ったんだよ。でもね、おじさんぐらいの歳になるとスイッチがこんなにたくさん有ると最初からイヤになっちゃって、まだ電気も通していないんだ。こら、笑っちゃいかん。」

小野原の話を聞いて苦笑している信太郎だ。

「じゃ、おじさん僕が最初にスイッチをいれるの。」

「いや、待って待って、最初のスイッチはおじさんにやらせる。とりあえずコーヒーを飲んでから。」

信太郎の前にマグカップに入れたコーヒーを置いた。

「あれえ、このカップ、おじさんどこで買ったの。」

恐竜の写真が印刷されたカップを見て信太郎が素っ頓狂な声を出した。

「ああ、これねこの前恐竜展に行った時に面白そうだから買ってきたんだ。今度一緒に行くときに君の分も買ってあげるよ。」

「ありがとうございます。いいなあ、これ。」

カップをぐるぐる廻しながら眺めている信太郎を見つめた小野原は、女房はいらないがこのぐらいの子供は持ちたかったなあと少し悔やんだ。

「よし、とりあえず電源をいれてみよう。あれ、コンセント、コンセント。」

電源コードを延ばし、延長コードを繋いで、コンセントに差し込んだ。

「さて、行くぞ。スイッチオン。」

「なんか、おおげさですね。」

信太郎が苦笑しながら言った。

「ははは、まあそう言うなって。おじさんぐらいになるとこのぐらい勢いを付けなけりゃ、始めての事には挑戦出来ないんだよ。さて、これからどうするんだい。」

小野原は大仕事をしたような感じでコーヒーカップに手を伸ばした。

「とりあえずABCからでしたな。じゃ、ここをこうして、ここをマウスでクリック、そうしたら違う画面が出てくるので、ここをこうクリック。こうして、ああして、、、」

「ちょ、ちょっと、ちょっと、信ちゃん待ってくれ。そのマウスとかクリックって何だよ。」

早速、小野原は参った。カタカナが多すぎる。

「え、そんなことも知らないでパソコン買ってきたの、説明書読んだんでしょ。」

信太郎が呆れて言った。言葉も最初と違ってぞんざいになっている。

「そう言うなって。本当に何も判らないんだから。おじさんのことを幼稚園の子供だと思って教えてくれないかい。判るだろう。」

小野原も本当に自信を失いつつあるのをグツと堪えた。

「わかりました。じゃこれがマウスでこうする事をクリック。いいですか。」

信太郎がマウスを持ち上げ、小野原の目の前で人差し指でマウスの左上をカチャカチャと押した。

「はい、先生、判りました。」

「よしよし、わかればよろしい。ぷっ。」

小野原がふざけて言った言葉に信太郎が吹き出した。

それから二時間が過ぎた。小野原の頭の中はグチャグチャだ。見ると書いたメモ用紙の集団がテーブルの上を占領している。

「どう、おじさんわかった。」

ぐったりしている小野原の顔を見ながら信太郎がそつと聞いた。

「うん、まだ生きてる。でも頭の中がパンク寸前だよ。丁度お昼だから気分転換にどこかへ食べに行こう。そうだ行こう、行こう。」

小野原は早く中断したいので信太郎をせかせかせた。

こじんまりしたレストランが歩いて数分のところにある。二人は並んで扉を入った。

「あつ、いらつしやい。小野原さん、どうしたんです。小野原さんて息子さんいましたっけ。」

店主が馴染みの小野原を見て営業用の笑顔で迎えた。

「いやいや、この子は僕の前の同僚の子供なんだ。でも今日は僕の先生。」

小野原が頭をかきながら笑顔を返して言った。

「へっ、小野原さんがこんな子供から何を習うんですか。」

店主も奇妙に思ったのか普段より言葉数が多い。

「うん、パソコンの動かし方を教わっているんだよ。」

「へえ、世の中も変わってきましたねえ。そうですね、こんな子供が先生ねえ。」

店主は自慢の顎髭をしごきながら口の中でもごもごと言いながら奥へと引き込んだ。

「さあ、信ちゃん。何が食べたい。何でも好きな物注文していいから。」

信太郎に視線を戻し、小野原が言った。

「撲、何でもいいです。」

信太郎も先生なんて言われたから恥ずかしいのか、下を向いてもごもごと言った。

「何でもいいという返事は、主体性が無い。好きな物をいいなさい。」

小野原は優しく信太郎をいたわりながら言った。

「じゃ、天井。」

子供らしく信太郎が顔を上げて、元気よく言った。

「よし、じゃあ天井の上を二つに、あとでアイスクリームも二つね。」

テーブルに飲み水の入ったコップを置き、横に立っているウェイトレスに小野原が伝えた。

「信ちゃん、ところで君は恐竜の事を本で勉強したのかい。」

と小野原が話題を振った。

「いえ、本は高いのでインターネットで勉強しました。でもたまに図書館へ行つて読んだりします。学校でも恐竜の好きな友達がいる。結構情報交換なんかもやりますからだいたい事は覚えてしまっています。図書館もそんなに恐竜の本は多く有りませんからね。」

「へえ、そうなのかい。図書館にもそんなに本が無いってことはどういう事なのかなあ。」

「インターネットで見たのですけれど、僕が生まれるちょっと前までは日本には恐竜が居なかったって偉い先生が言っていたそうなんです。だから本なんか無いんじゃないですか。」

「ふ〜ん。そうなんだ。恐竜の事もつと勉強しなくっちゃいけないなあ。パソコンが終わったら信ちゃんに恐竜の先生になって貰おうかな。」

小野原が本気になって信太郎に言ったところに注文した天井が来た。た。

「うわ〜、こんな天井。撲、食べたことがない。」

信太郎が嬉しそうに箸をとった。

「でもね、おじさん。恐竜はインターネットをやり始めたら世界中の人達と話が出るから、撲なんかから教わらなくてもたくさん先生が出来ますよ。昼からはインターネットに繋いでみましょうよ。」

信太郎が口の中で大エビをほおばりながらもぐもぐと言った。

「えっ、もうインターネットが出来るのかい。」

まだまだ先の話と置いていた小野原はびっくりして聞いた。

「だって、もうおじさんはパソコンでワープロ打ちは出来るようになったでしょ。日本語が打てれば手紙も書けるし、インターネットでメールも出来ますよ。まあチャットは早くキーが打てなければ相手の話についていけないかも知れないけど。」

「そうかい、じゃ、今日からでもインターネットが出来るんだね。」

でも何だいそのチャットって。」

「チャットってリアルタイムに手紙の交換が出来るシステムなんです。例えば恐竜好きの仲間が集まって短い手紙を送り合いをするこ

となんです。僕なんかこのチャットで大学の先生や凄く偉い学者さんなんかとも知り合いになったんです。でも顔は見たことありませんけど。」

「へえ、そんな事まで出来るのか。便利な世の中になってきたなあ。」

小野原が感心したように言ったので、信太郎も気をよくして、

「カメラやマイクなんかも取り付けければテレビ電話見たいに使えますよ。」

と付け加えた。

「へえ、テレビ電話なんてテレビドラマだけかと思っていたよ。」

警察でもコンピューターを扱う奴はみんな若い連中ばかりだったから、そんな時代になっていたとは知らなかった。これはちょっと気持ちを引き締め直さなければいけないなあ。」

小野原は言葉の最後の方を自分に言い聞かせるようにモゴモゴと言った。

「おじさんところはプリンターを買ってませんでしたよね。」

急に信太郎が聞いた。

「うん、まだどうなるか判らないから買わなかったんだ。どうして。」

「だって、もうおじさんはワープロ式に打てるようになったから。」

プリンターが有ったら手紙だって書けるし、書類を書くにもすぐ印刷出来たら便利がいいでしょう。」

「ああそうか、信ちゃんところは持つてるの。」

「ううん、プリンターって安いのなら5000円ぐらいで売ってるのに、お母さんが高いって買ってくれないんです。でもお父さんは欲しいって言うてるんです。」

「そうそう、お父さんもパソコンやっているのかい。」

「うん、本当はお父さんの方が僕よりか欲しがったんです。でもお母さんには言えないから僕が欲しがっているって事にして買ったんです。だからお父さんは僕より凄いですよ。作業記録が見えるの。」

でお父さんのいないときにチェックするんです。そうしたらイギリスやアメリカの警察なんかのホームページに入って色々やっけますよ。」

「へえ、そりゃ知らなかったなあ。でもイギリスやアメリカって言えば英語だろう、お父さんって英語ができるのかい。」

小野原は知らないところで同僚にまで引き離されていた事を知り、愕然とした。

「うん、お父さんは英語ペラペラだよ。だって大学へ入る前にオーストラリア一周の旅を一人で一年間かけてしたんだって、全部英語で生活したから結局はただで英会話を覚えられたっていつも僕に自慢しているもの。」

そうか、そう言えば高層ホテルでの殺人事件の時、俺に隠れて外人とやりとりしていたのを小野原は今になって思い出した。あの時は片言の英語でも通じるものだど奴は言っていた。よし俺も英語をマスターしよう。山ちゃん方式がいい。

信太郎はアイスクリームの皿をスプーンでこそげ落とすようにして食べ終わって満足そうに言った、

「あ〜うまかった。おじさんごちそうさまでした。じゃあ、昼からはインターネットに繋がましよう。」

「でも少し早いんじゃないかい。」

小野原はまだ自信が無い。

「だって、もう使い方は全部説明したし、あとはおじさんが練習したらいいだけだから。」

信太郎も初めて他人に教えるものだから、相手の技量や知識を考慮する余裕が無い。一方的に知識を投げつけるだけである。小野原もその様に思った。

「よし、じゃあ、帰ってやってみるか。」

二人は又々台所のテーブルに並んで座った。

「ところでおじさんの知っているプロバイダーはありますか。」

信太郎が電源を入れながら聞いた。

「えっ、なんだいそのプロ何とか言うのは。」

早速、小野原の頭が混乱した。

「インターネットの基地局みたいなものですよ。世界中に張り巡らされたウェブっていうケーブルに繋ぐ前に、その基地局とこのコンピュータを繋がないといけないんです。」

信太郎が判りやすく教えてくれた。

「そうか、でもそんなところは全然知らないよ。信ちゃんが繋いでいるところと一緒にでもいいんだろう。」

「うん、そりゃあいいけど。でもプロバイダーによって色々と値段が違うし、サービスも違うから、もし知っているところがあったらそっちがいいかなって思ったんだ。」

「そりゃあ、信ちゃんみたいに使い慣れてきたら色々と考えられるだろうけれど、おじさんの場合、初めてだからね。どこでもいいんだ。」

「わかりました。じゃあ、僕と同じプロバイダーに接続しますね。」

「そうだね、任せるよ。」

「電話のソケットはどこですか。」

「えっ、電話があるのかい。」

「そうですね、電話線を使ってプロバイダーに繋ぐんですから。」

信太郎が大げさに肩をすくめるように言った。

「電話なら玄関のところだから、届かないな。よしテーブルごと移動しよう。信ちゃんそっちを持って。いいかい。」

二人は玄関横の廊下までテーブルとイスを運んだ。

その後、信太郎は1、2回どこかへ電話をかけ、小野原勉には訳の判らない言葉をふんだんに使って話をし、ケーブルをコンピュータへと繋いだ。カチャカチャとキーボードを叩き、独り言をブツブツいいながら画面を凝視している。その姿を小野原は奇異な動物でも見るように眺めていた。

「出来ましたよ。ここをこうクリックして、この画面を出すんです。そうしてここに言葉を打ち込むと色々なホームページの一覧表が出てきます。例えば恐竜って打ち込みますと、、、はい、このように出てきます。この画面の右側のここをクリックすると画面が上の方に上がっていきますから全部のページが見られます。そして、例えばこのホームページをこうやってクリックしたら、はい、この人のホームページが出てきました。簡単でしょ。」

信太郎が小野原を見て言った。なるほど見ていると簡単そうだ。

「よし、じゃあおじさんと替わってみよう。」

そう言っつて小野原は信太郎とイスを替わろうと立ち上がった。

「ちよつと待つてください。ついでにおじさんのメールアドレスも作くちやいますから。」

それから信太郎は又々、キーボードを叩き始めた。

「はい、これがおじさんのメールアドレスです。ここをクリックしたら届いたメールが見れますから、じゃあ、とりあえず接続から練習しますから、一応切っちゃいますね。」

信太郎が小野原の返事を聞くまでもなく、マウスを握り画面のどこかをクリックして消してしまった。

「え〜最初からやるのかい。」

小野原が慌てて言った。

「そうですね。だってこれが出来なかつたらインターネットに繋がらなびに僕が来なくっちゃならないでしょう。」

「そうか、それもそうだ。よし、やってみよう。最初はここだったね。あれっ。」

小野原は横で見えていて簡単そうに思っていたので、つい、メモを見ないで記憶だけでクリックの位置を決めて押してしまった。とたんに記憶していた画面と全く違う画面が出て戸惑って言葉に漏らした。

「おじさん、違うよ。最初はここをダブルクリックだったでしょう。」

「

信太郎が口を尖らせて言った。

「そうか、そうか。最初から間違えるなんて馬鹿だねえ。じゃ、ここをダブルクリックと。」

小野原勉は恥も外聞も無く、中学一年生の信太郎に謝りながら、作業を続けた。

「やった。出来たじゃない。おじさん。」

信太郎が思わず手を叩いて拍手で誉めた。

「やってみたら簡単だねえ。これなら出来そうだよ。信太郎君の御陰だよ。ありがとう。」

小野原も何か偉業を成し遂げた気分だ。

「じゃあ、さっきの恐竜のページに行つて見ましようよ。」

信太郎が言うので、ちよつと休憩しようかなと考えていた小野原だが、言われたとおり恐竜のホームページ集へ入った。

「そうそう、この人のホームページが面白いんです。なんか素人くさくて。でも本当にオーストラリアで土地を買って自分で掘り続けている人のページなんです。こんな人はいませんから日記なんか読んでいます。でも最近あんまり更新されてないから、ホームページより掘る方に力を入れているのかなあ。ちよつとクリックしてみてください。」

信太郎に言われてそのページの見出しの上をクリックした。とたんに画面から小さな恐竜達が大きなき竜に追いかけられている画像が眼に飛び込んできた。

「へへ、こんな事も出来るんだ。これは楽しそうなホームページだねえ。」

小野原が興味を膨らませて、信太郎に向かって言った。

「この人はもう何年もオーストラリアに住んでいて、オーストラリアを一周したんだって。たぶん英語もペラペラだと思いますよ。」

「信太郎君はどうしてそんなことを知っているの。」

「だって、この人とは何度もメールで話したものだ。」

信太郎が自慢そうに言った。

「そう、幾つぐらいの人かな。知ってる。」

「知らない。でも自分でお爺さんって言ってるから、お年寄りですよ。」

「そうなのか。じゃ、後でゆっくりそのホームページを読ませて貰うことにしよう。あっ、もうこんな時間だ。信太郎君今から君の家まで送って行くよ。ついでに秋葉原へ寄ってプリンターを買っていい。」

小野原が時計を見て立ち上がりながら信太郎に言った。

「はい、」

信太郎が返事をして立ち上がりながら言葉を繋いだ。

「おじさん、いつ恐竜展に連れて行ってくれるんですか。」

「そうそう、いつでも君の好きな時でいいよ。」

「恐竜展は来週一杯で終わるそうなんです。」

「えっ、そうなのかい。じゃあ早い方が良いねえ。明日、そう明日行こうか。」

「本当に連れて行ってくれますか。じゃあ僕、お父さんとお母さんに言っときます。」

信太郎が嬉しそうに言った。

「よし、今日のお礼に信太郎君の分のプリンターもプレゼントしよう。一緒に秋葉原まで行こう。さあ用意して。」

第五章 川底探索（前書き）

この章で、白骨死体を発見し、いよいよ事件へと入って行きます。
お楽しみください。

第五章 川底探索

第五章 川底探索

2006年の末も押し迫った頃だった。香山氏を真似て始めた川底恐竜化石探索だが、同じ場所で作業をする事ではまずいだらうと考えた小野原勉は、香山氏が現在探索を続けているコンダマイン川を外し、一番大きな支流で、最後にはコンダマイン川に合流するウイルキー・クリークの探索を選び、既に半年が過ぎた。

12月に入って来週はもうクリスマスと言う17日。この日もウイルキー・クリークの未踏査川底を歩いた。その帰路、支流に迷い込んだ。幸いにも100メートル程歩いた所で気が付き、本流を求めて帰る段階で、ふと周囲の景色と少し違った感じを受けた。

何だろうと川底の砂を足で蹴って見るとさびたトタンの端があらわれた。

大きなトタンだった。

その隙間から丸く白い物が見えた。

大雨で化石が流れてきて更にその上にトタンが流れ被さったのかと少しそのトタンを持ち上げてみた。上に被さった砂はたいして多くはなかったのかトタンの上をサラサラと流れ落ち、難なくトタンを取り除く事が出来た。

そこで小野原勉は息を止めた。

その下に横たわる白骨死体を発見したのだった。

小野原は持参のデジカメで現場を詳細に撮影したのち、側壁をよじのぼり周辺に家は無いかと探した。すぐそばに物置小屋が目に入ったが、そこから500メートル程離れた所に緑色の屋根が目に入ったので、電話を借りるために向かった。

それから15分後、待ちくたびれた頃になって1台のパトカーがやってきた。小野原勉は第一発見者として警察に立ち会わされる前に香山氏にも連絡をした。

「香山さん大変な事になりました。今日もウイルキー・クリークの探索をやっていたのですが、そこで白骨死体を発見してしまったのです。今から警察に立ち会って現場検証をするのですが、ちよつと通訳に来てくれませんか。」

「なんですか。びっくりしたなあ。それは恐竜じゃ無くて人骨なんですか。」

香山もビツクリして答えた。

その後電話主に代わり、電話主は住所と道順を香山氏に教えた。10分程で香山氏も押っ取り刀で駆けつけてくれた。既に警察官と小野原は現場へと行っていたが、電話主が香山を待っていてくれ、現場へと同行をした。既に周辺にはテープが張り巡らされていた。数人の警官と話している小野原を見つけたので香山氏も側壁を下った。

「どうも遅くなりました。何事ですか。ビツクリしましたよ。」

香山の言葉に小野原が振り向いて

「まあねえ、わたしも実はビツクリしているのですよ。こんな所で事件に遭遇するなんて考えてもおりませんでしたからね。化石でも有るかなとひよつとトタンをめくってみたらこれですからねえ。」と言った。

警察官が闖入者に目を向けたので香山は彼等の方へと行き、挨拶をしている。その間、小野原勉は持ち前の職業意識を芽生えさせたのか白骨死体の横へと行き座り込んで観察を始めた。

川の側壁の上には別に2台のパトカーが到着した。殺人課のジェイソン課長が車から降り、川の上から現場を俯瞰した。

「おい、あれは誰だ。」

張り巡らされたテープの内側で頭蓋骨の陥没状況を観察している小野原を指さして横の警官に聞いた。

「発見者は日本人と言っておりましてので、たぶん、第一発見者でしょう。」

「そんなことは判っておる。必要以上に興味を持つ第一発見者。あれは絶対に黒い」

と言いながらジェイソン課長も側壁を下り始めた。

頭蓋骨陥没。顔面、顎、歯などが完全に破壊されている。高級背広のネームも切り取られている。これは身許隠しの為だ。死亡推定日時はおよそ1年かな、小野原勉が考えている所へ、ジェイソン課長が近づいて言った。

「おい、お前は何をしている。」

後ろから言われ、肩に手を置かれたので小野原がビックリして立ち上がった。

「わ、わたしの名前は小野原勉。第一発見者だ。」

と小野原勉が英語で言うのだが、急に声をかけられたものだから言葉も少しどもり、意味が通じていないらしい。

「香山さ〜ん、ちょっとお願いしますよ。この人の言ってる事が判らないし、わたしの言うことも判ってくれないんですよ。」

小野原が香山に向かって叫んだ。

早速、香山が駆けつけてくれてジェイソン課長に説明をしてくれた。

「ところでお前は何だ」

とジェイソン課長が香山氏にも言った。

「わたしは数年前からこの地区で恐竜探索をしている者で、この小野原勉さんは弟子のような立場の人です。」

香山が言うのを、ジェイソン課長は口をへの字に曲げて聞いていた。何しろ香山の頭一つ分は背が高く、親父からどやされている子供みたいに見える。

「よし、判った。それにしても何故そんなにお前は出しやばって骨を見ていたのだ。」

今度は小野原に向かって聞いた。

「香山さん、きつとこの人はわたしが元の職業意識でこの白骨死体を見ていたので、私達の事を犯人だと考えているのですよ。ちよつとわたしの元の職業を説明してやってください。」

小野原は内心、失敗したなと思いながら香山に言った。

「どうして、我々が犯人になるんです。」

「まあそう言わないで、警察つてところは、誰を見ても犯人と思えと教育されますし、第一発見者と言うのは必ず一番に疑うのが鉄則なんですよ。ましてわたしはちよつと出しやばって見てましたからね。」

口を尖らせて言う香山氏をなだめるように小野原が言った。

「そうなんですか、まあ判りました。じゃあちよつと説明します。」

と香山が言って、ジェイソン課長に向き直り

「この小野原勉さんは今は退職しておりますが、2年前まで東京の警視庁で殺人課の刑事をしておりました。」

と言った。

ジェイソン課長は興味を持ったような顔に変わり、

「そうか、それならあれだけ詳細に白骨を見ていたのだから判るだろう。死亡推定日時はどのくらいだと思うか？」

とテストをするように聞いた。

「まあ、今年は雨も降らなくて表面を雨で洗われたと言う事も無いし、波板トタンで覆いをしていた状況から考えて約1年程を経過しているでしょう。」

と答えた。香山氏の通訳を聞いていてジェイソン課長はうなずき「死体の状況から、どの様な犯罪だと推測するのか？」

と第二問を出した。

「後頭部に大きな裂傷が見られるので、これが致命傷になったものと考えます。凶器は損傷方向が左右に広がっている事から、手近に

有った少し長めの木材か鉄材で野球のバットを振るように横殴りにしたものと考えられます。いわゆる背丈の高い人間が犯人像として浮かびます。その後、顔、顎、歯などの破壊をしたもので、身許を隠す為であろうと考える。」

と答えた。

聞いていたジェイソン課長は、今までの構えをくずし、

「良く判った。貴方は誠に警察官だ。」

と言って小野原に握手を求めた。

小野原勉は照れたようにそのグローブのように大きな手を握り返した。

「それにしても、失礼な奴ですね。折角届けてやった我々を疑うなんて。」

彼等から少し離れたところで香山が小野原に言った。

「まあ、香山さん。そうは言わないでやって下さい。彼は地元の警察官ですから、職務に熱心なだけです。さつきも言いましたが第一発見者が犯人だったと言う事件はたくさんありますから。」

「それは判りましたが、我々のような純粹の発見者は気分を滅入らせてしまいますよ。」

「実際、日本でも警察に関与したくないという風潮が広がっているのは、こういう事から始まっているのかも知れません。でもやっぱり職業意識の方が優先してしまいますのでね。」

小野原勉の言葉を聞いても憤懣やるかたないと言った香山であった。

その後、再度発見時の詳細をジェイソン課長に説明をして二人は解放されて香山の山荘へと帰ってきた。

「まあ気分を直して一杯やりましょう。」

冷蔵庫からよく冷えたビールを2本出してきて小野原が香山に言った。

第六章 1994年2月

第六章 1994年2月

「親父、土地をかうからちよつとまとめて金を送つてくれよ。」
靖之が国際電話をかけた。

「何だ、何だ。どうして土地なんかかうんだ。」

親父がビックリして聞きただした。

「いいじゃんか、安い土地が有ったから買いたいんだ。そしてもう手付け金を

入れちゃったからね。800万円ぐらい送つてくれよ。契約書を見たいんならそつちへ送るからさ。でも英語だからな。」

「お前は何考えているんだ。勉強するって言つてたんじゃないのか。」

親父の心配そうな声が聞こえる。

「何いつてるんだ。これも経済の勉強だよ。安い土地を買って高く売る。どこが悪いんだよ。」

靖之は、うつとうしいなと投げやりに返事を交わした。

「判った。ところで何坪かうんだ。」

「坪？ちよつと待つてくれよ、計算するから。」

靖之は計算機を取り出して計算した。

「坪に直したら、約12万坪だよ。」

「何だつて、馬鹿も休み休みに言え。12万坪の土地が何で800万円なんかで買えるんだ。」

「いいじゃん。買えるんだから買ったんだ。まあ心配しないで金を送つてくれれば良いんだ。判った？頼んだよ。」

それから2ヶ月が過ぎたある日。

「親父、小遣いやろうか。」

靖之が電話で言った。

「ははは、どうしたんだ、お前が俺に小遣いをくれるなんて。」

全く信じない様子で親父が返事を返した。

「まあね、この間の土地を売ったからねえ。とりあえず親父から借りた800万円は振り込んだから。ちよつと銀行を確認してくれるかい。」

「ああ、あれはお前だったのか。銀行から言ってきたて何の金だって言うものだから、そんなの知らんって言ったところだ。」

「親父、1000万円ぐらいやろうか。」

靖之が自慢そうに言った。

「なんだって、1000万円を俺に小遣いとしてくれるってか。」

親父がビツクリして聞き直した。

「明日、銀行から振り込んでおくからな。」

「待て待て、おいその土地を幾らで売ったんだ。やばい事をしたのじゃないだろうな。」

親父が慌てて聞いた。だした。

「何言ってるんだい。売れて儲かったってだけだよ。馬鹿な日本人がいて、土地を見に行くのにヘリを2回チャーターして大げさに見せただ。でっかいリムジンに乗せたりしてさ。値段は1億円って言ったら値切りもしないで買うんだ。馬鹿だよなあ。なんにもやばくはないぜ。1000円のリングを1000円で売ったようなもんだ。」

靖之がくだらない事を聞くなどでも言うように言葉を吐き捨てた。

「そうか、靖之でかした。オーストラリアでそんな商売が出来るのなら金は幾らでも送るからどんどんやれ。」

親父が電話の向こうで感激して言った。

「判った。じゃあ、またそんな土地を探してきて買っておくから、馬鹿な客を送ってくれよ。なかなかこつちへ来る人間だけじゃ、そんなに美味しい話は数多くは出来ないからなあ。」

「よし、わかった。金の余っている人間をわんさか送ってやるよ。金が必要なら幾らでも出してやる電話をしてこい。そのお前がくれるという1000万円も土地を買うのにつかえ。」

親父が随分と乗り気になって話した。

「うん、でもとりあえずは送るよ。まあこれが儲けの証拠見たいなもんだからな。それより、アパートじゃ仕事がしにくいから、いつそのことこつちに別荘を買わないか。そうしたら事務所兼にして使えるんだがなあ。親父もたまにこつちへ来て羽根を伸ばせるしな。丁度良い売り物があるんだ。本当は俺が今度の儲けで買おうかなと考えていたんだけどな。」

「おつ、それもいいな。この前、靖之が大学行く間だけでも向こうに家が有ったら行けるのにつて、母さんが言つてたところだ。それは良いところか？」

「そりゃあ俺が気に入ってるんだから。新築で土地は300坪ぐらいだけど家がでかいんだ。まあゴールドコーストは値段も高いけどな。」

「よし判った。それを買おう。金は幾ら送れば良いんだ。」

「じゃあ、買っておくか。8000万円だけど、登記費用や弁護士費用、それに家具なんかも買わなくっちゃならないから9000万円程送ってくれよ。契約はこつちでやっておく。契約書と写真は来週にでも送るからな。」

言つてから靖之は返事も聞かず電話を切ってしまった。

「よし、又々一件落着だ。さて、基地が出来るとこれからやることがたくさんあるぞ。」

靖之は受話器を置くと同時につぶやいた。

第七章 1995年7月

第七章 1995年7月

「なんだよ、お袋、誰か知ってる人がいるって、お前が言ってたんじゃないか。どこにいるんだ。」

空港で待ち合わせをしていた筈の千恵子が見あたらぬ。全く知らないブリスベンの空港で初恵は戸惑った。

「まあ、お前の友達ってそんなもんだよ。いいからタクシーで行こう。ホテルはちゃんととってあるんだから。」

と、征次が荷物に手をかけてタクシーと書かれた表示に向かって歩き出した。仕方なく初恵も従った。

「最初からこれだもんなあ。お前の友達ってのは誰も信用が出来ない。」

タクシーの中で征次が毒づいて目を閉じた。以後は一切の言葉を拒否するかのようだった。

「千恵子、どうして空港へ迎えに来てくれなかったのよ。」

ホテルの部屋に入ると同時に、初恵は千恵子の電話番号を廻して毒づいた。

「あれえ、初ちゃんが来るのは明日と思っていたのよ。今日は何日かしら。」

電話の向こうで千恵子がカレンダーでも見に行ったのか、言葉が聞こえなくなった。

「初ちゃん、ごめ〜ん。今日だったのね。わたしの勘違い。で、今はどこからかけてるの。」

初恵は千恵子が電話の向こうで舌を出しているのを想像しながら、

「もういいわよ。ホテルに入ったから。約束どおり明日通訳を連れて来てね。部屋番号は2301だからね。」

初恵は返事も聞かず電話を切った。

ホテルはカジノのあるコンチネンタルホテルだった。小さなホテルで、小さな部屋を想像していた初恵は、やっと落ち着いた部屋を眺め回し、セミスイートの大きな部屋を予約してくれた浩一に、今更ながら感謝の気持ちを抱いた。

大きなテラスがある。初恵はそこへ足を踏み出した。手すりにもたれかかってゴールドコーストの景色を眺めてみた。ここブロードビーチからは北に見られる多くのビル群。あれがサーファーズ・パラダイスだろうか。南の方は余り高さの高いビルは無い。東の眺めは幾つかのビルの上に太平洋が広がっている。

それにしても大きな広い空だ。しかもこんな青い空は久しく見たことが無かった。空気も全く汚染されていないようにうまい。

「やっぱり日本なんかよりここがいい。」

初恵は千恵子に感化され、夢にまで描いていた見知らぬゴールドコーストを実感してつぶやいた。そこへ部屋の電話がなり始めた。征次はカジノが有ると聞いて勇んで出て行ってしまった。初恵は恐る恐る受話器を取り上げた。

「おう、無事に着いているな。何も問題は無かっただろう。」

耳に当てた受話器から浩一の声が飛び込んできた。一瞬、初恵は優しかった時代の浩一を頭に浮かべて言った。

「あつ、あなた。はい、何も問題なく着きましたわよ。」

「そうか、まあ心配することは無かったんだが、着いたかどうかの確認に電話をしたんだ。部屋はどうだ気に入ったか。」

「はい、綺麗な大きな部屋で安心しましたわ。でも、地球の裏側にいるのに、随分と近くにいるように綺麗に聞こえるわよ。」

「ははは、そうだね。僕も10日ぐらいしたら一度そっちへ行くから、またその時には連絡するよ。それまでに店の候補地を探してお

いてくれ。勿論、住む家もな。じゃ、電話代が高いから切るぞ。」

浩一は言うだけ言うつと受話器を置いてしまった。

「まあ、こんなものね、やっぱり。まあいいわ。」

初恵はつぶやきながら受話器を戻した。

「こら、いつまで寝ているのよ。早く用意して。お迎えが来ているのよ。」

征次の部屋に来て初恵が揺り起こした。既にラウンジには千恵子と通訳が待っている。

「はいはい、急いで急いで。」

「なんで、俺まで行かなくちゃならないんだよ。」

征次がぐずぐず言いながらも起きてきたので、初恵はラウンジに戻った。

「ごめんなさいね、息子が寝坊なものだから。すぐ来ますからもう少し待つてくださいね。」

「じゃあ、とりあえず通訳をしてくれるこの人を紹介だけしておくわね。亀井靖之君って言って若い人だけれど、こっちの大学に通っていて、不動産に詳しいものだからお願いしたの。千葉市で大きな会社の会長さんの息子さん。よろしくね。そして、初ちゃんごめんわたし今日はお付き合い出来ないの、主人に付き合わされる事になっちゃって、今、下に迎えに来ているからもう行くわね。じゃあ亀井さんよろしくお願いしますね。」

千恵子が頭を下げて、部屋から出ていった。

「なあんだ、千恵子は薄情な人だわ。じゃあ、亀井さん悪いけどお付き合いお願いね。」

「はい、何でも任せてください。と言ってもまだまだ英語の方は得意じゃ無いんですけどね。でもだいたいの事はわかりますから御心配の無いように手配はいたしますよ。」

初恵は言葉を丁寧に八キ八キと話し、礼儀正しい目の前の若者を眺めて、つい自分の息子征次と比べてしまう。

「そう、あなた千葉市内って言ったわね。私達は東京だけれど、すぐお隣の江東区よ。それよりあなた、大学生って言ったわね。今起きてくる息子なだけれどこっちの大学に入れるって事は出来るの。」

初恵はふと閃いた事を聞いてみた。

「ええ、それは簡単ですよ。最初に大学の中にある語学学校に入学するんです。そうして簡単な英語のテストを受けて、受ければ本コースへと移れますから。これが一番早道でしょう。でももし彼の英語が素晴らしければ、そのまま直接大学のテストを受ける事も出来ますが。」

亀井が応えた時に、征次が出てきた。

「何の話をしているんだい。」

「ああ、お前の学校の事を聞いて居るのよ。」

初恵が答えた。

「ちよつと早いんじゃないか。まだ昨日来たばかりだぜ。」

「おはようございます。撲、亀井靖之と申します。昨年からこちらの大学に通ってしまして、今日はあまりうまくは無いのですが通訳をさせていただきます。」

征次の話を遮って、靖之が立ち上がりお辞儀をしながら言った。

「あつ、すみません、おはようございます。よろしく願います。」

征次も釣られて立ち上がり、靖之に挨拶を交わした。

初恵はそれを横から見ていて、この人と付き合わせたら征次も少しは良くなるかなと思った。

「じゃあそろそろ出発しましょうか。今日の午前中はリムジンをチャーターしてありますのでゆったりと廻れますけど、時間が無いので急ぎましょうか。」

亀井が先に立って部屋のドアを開けた。

「すごい車だねえ。なんだよ、これは。あれっ、ワインやウイスキー

「まで入ってる。こっちはグラスなんかも。」

征次が車に入るなりすぐさまあちらこちらと扉を開け始め、感嘆の声を張りあげた。

「ははは、このリムジンはストレッチ・リムジンと言いまして、普通の車の1.5倍ぐらいに車体を長くしています。普通サイズのリムジンも有るのですが、やはりこっちの方が広くてゆったりですからね。じゃ、とりあえずサーファーズ・パラダイスの不動産屋から始めましょうか。」

亀井はそう言って運転手に向き直って行き先を英語で指示した。

「亀井さんは、ここ来て何年になるの？」

初恵が聞いてみた。

「そうですね、まだ1年と半分を過ぎたところです。」

「じゃあ、日本でも英語が得意だったの？」

「いえ、僕は大学入学に失敗してこっちへ来た組みですから、英語もですが頭が悪くて駄目な人間ですよ。まあ、英語は慣れですから、それぐらいいるだけで誰でも簡単に僕ぐらいしゃべれるようになりますよ。」

亀井が恥ずかしそうに答えた。

「えっ、亀井さんも受験失敗組なの。じゃあ僕と同じじゃん。」

征次が急に親しみを持ったように素っ頓狂な声で叫んだ。

「あんまりこんな事は言いたく無いのですがねえ。」

「でも、でも、亀井さんってこっちの大学生でしょう。今は何を勉強しているの。」

亀井の言葉を遮るように征次が聞いた。

「ええ本当は法律を勉強したかったんですが、今は経済です。こっちは大学を卒業したらそのまま会計士の資格が貰えますからね。法律だったら卒業だけで弁護士ですよ。だから日本の大学よりか良いと今では思っています。」

亀井が説明した。

「じゃあ、あなたは卒業したら会計士さんになるのね。」

と初恵が聞いた。

「いえ、資格は資格で持つていて、僕はこちらで不動産業をしたいんです。あっ、着きましたからこの話は又あとにしましょう。とりあえず降りてください。」

制服に制帽の運転手がおもむろに開けたドアを初恵と征次が出たのに続いて亀井が運転手にウインクをして出た。

「さて、こちらです。お入り下さい。」

二人は亀井に言われて、不動産屋の自動ドアを入った。

事務所はたいして大きくは無い、従業員も見渡した限り7、8人程度だ。既に亀井から連絡が来ているのだから総ての従業員が眼を向けた。その内、金髪の上品なおばあさんが立ち上がって近づいてきた。

「いらつしゃい、さあどうぞ、こちらへ」

とでも言っているのだろう。手の動作でその様に思える。その女性に続いて亀井が入って行ったので、二人も素晴らしい調度の応接室に入った。座れと指定されたイスはアンティークで綺麗に磨かれていた。お尻が沈み込むような感じの長居をしそうな座り心地の良いイスだ。

その女性が、何かを我々に向かって話し掛け、日本と同じように名刺をくれた。なんとその名刺の裏面には日本語が書かれていた。読むとこのおばあさんがこの社長さんだ。言った言葉はウエルカム程度だろう。

「じゃ、話は総て僕の方でしますから、勿論途中で何を話しているかぐらいは通訳します。さて、何から話しましょうか。」

亀井が聞いた。

「そうね、まず聞いて欲しいのは日本食レストラン用の貸店舗を見せて欲しいのと、私達が住む家を一軒買いたいものよ。今はそれだけ。」

初恵が言った。

「じゃあ、」と言って亀井が英語に訳して、社長のローズマリーに話している。

「今、ローズマリーが探してくれませんが、予算は幾らかと聞いています。」

「予算、予算ねえ。全然、相場も判らないからある物全部見せて頂戴。」

初恵が戸惑いながら言った。

「判りました。でもたくさん有るはずですから全部見ることは無理でしょうね。とりあえず場所はこのサーファーズ内に限定しましょうか。」

「そうね、そうしてちょうだい。」

亀井は初恵から聞いて、再びローズマリーに向かって話し出した。途中から彼女は内線電話で何かを話している。数分後に数枚のコピーが事務員の手によって届けられた。

テーブルに並べられた書類を見ながら、

「英語は判らないけれど、図面になったら楽だなあ。」

と征次が言った。

又々内線でかかって来た電話をローズマリーがとり何かを話して、二人に向かって何かを話して部屋から出ていった。

「今、何て言ったの。」

初恵が亀井に聞いた。

「別に大事な事じゃありませんよ。用事が出来たので、ごゆっくりと言った挨拶だけです。それよりか、一つ一つ見てみましょうよ。まずこれ。」

と言って亀井が指さす物件の図面に二人は視線を戻した。

「これはビーチ沿いの物件ですね。でも面積が小さいかな。72平方メートルって書いてますね。どのぐらいの広さをお考えですか。」

「えっ、それって何坪なの。」

「そうですねえ、20坪ちよつとかな。」

「それじゃあ狭いわねえ。せめて倍以上は欲しいわ。50坪ぐらい

で探してみよ。」

「判りました。え〜とこれも小さいか。これは200平方メートル有りますね。あっ、これがいいかも知れませんが。だってメインのハイウェイに面していますし、ファーストフロアーと書いていますから二階ですよ。70坪程度だから良いですよ。ちょっと待ってください。」

と言つて亀井は応接室から出ていった。

「さっきから聞いていると、母さんは何も考えて来て無いんじゃないか。」

征次が怒つたように言った。

「そりゃそうよ、お父さんが言い出したのが一週間前でしょう。旅行の事ばかりでこっちの事なんか考える暇なんか無かったわよ。まあ今日は見るだけで、お父さんが10日ほどしたら来るから、その時にあとのことは全部して貰うからいいの。」

初恵が投げ捨てるように小声で言った。

「すみません、お待たせしちゃって。今聞いてきたのですが、この物件はここから歩いてすぐのところですし、今度見ることが出来るそうなんです。どうですとりあえず見に行きましようか。」

亀井が応接間に入つてくると同時に言った。

「よし、見に行こう。」

征次が言つて立ち上がった。

その店は歩いてほんの2分ほどで、大きなホテルの2階に有つた。以前は土産物屋だったそうで、壁などはある程度内装されている。広さも大きく感じられた。初恵が、ここに厨房、ここはカウンター、ここのトイレはこっちへ移動して、倉庫をここに作つてとブツブツ言いながら先に立つて店内をくまなく見て回つた。こうなると昔取つた杵柄だと征次はうしろで苦笑した。まあ初恵が気に入つたようだと征次も亀井も思つた。半時間もウロウロしただろうか。亀井はそろそろ潮時だと考え、

「ここはこのホテルがオーナーなんです。今のところ日本料理の店が無いのでかなり乗り気になっていきますから、家賃の方はけっこう値引きしてくれると思いますよ。いっそここに決めてしまいましょか。」

と言った。

「うーん、わたしはいいのだけれど、お父さんが大蔵省だから。ちよつと待ってね。10日もしたらお父さんが来るから、その時に決めますから。」

初恵の気持ちは既に固まっているのだが、大きな買い物だからと、二の足を踏んで返事を返した。

「でも、最近は店舗の流れが早くって10日もしたら、よその人に決められてしまっているかも知れませんか。とりあえず少しでも手付け金を入れて押さえておいた方が安心できますよ。」

亀井が熱心に薦める。

「母さん、亀井さんが言うように手付け金を入れようよ。あとは親父には俺が言ってるから。」

征次の一言で初恵も腹をくくり、

「そうね、ここは良さそうね。じゃあ、亀井さんここに決めます。あとはどうすれば良いの。」

と言った。

「じゃあ、さっきの不動産屋に帰って書類を作りますから、一緒に行きましょう。」

亀井がそう言って店舗の入り口方向へと歩き出したので、二人も従って出た。

「これが手付け金の領収書で、これが契約書です。ホテルに帰ってからゆつくりと読んでください。もし判らないところが有りましたら、いつでも電話を下さい。じゃあとりあえずホテルまでお送りします。ホテルに着いたら簡単に昼食を摂り、昼からは僕の車に乗り換えて住宅の方を見に行きましょう。それでは、お忘れ物の無いよ

うに、いいですか。では。」

出口で、従業員全員の見送りを受け、リムジンの窓からローズマリーと握手を交わして車はホテルへと向かった。

「よかったですね。良いところが見つかった。さっきの不動産屋は店舗賃貸のエキスパートなんですよ。やっぱり専門は専門に任せるものですねえ。昼からは別の不動産屋へ行きますからね。住宅の方はやっぱりサーファーズ・パラダイスが良いですか。それとも周辺の方がよろしいのですか。」

車の中で亀井が聞いた。

「家の方は征次、あんたが決めなさい。」

初恵は頭の中がレストランの事で一杯なので征次に振った。

「え、それは無いぜ。どんな家でも良いって言うのなら、文句を言わないなら俺がやるけど。知らないぜ。」

征次がドギマギして返事をした。

「いいわよ、気に入らなかつたら又売ればいいじゃない。」

「判った。じゃあ俺が決めるぜ。本当に知らないぜ。」

リムジンの後部座席で話を聞いていた亀井が言葉を挟んだ。

「ところで、マンション、こちらではハイライズと言うのですが、マンション形式がいいか、普通の土地付きがいいのかを決めて下さい。それと予算もね。」

「予算って言うてもだいたい幾らぐらいするんです。」

初恵も全く予備知識無しなので戸惑いながら聞いてみた。

「マンションなら3000万円ぐらいから、普通の住宅なら5000万円ぐらいから有りますよ。」

亀井が答えたのに初恵が反応して言った。

「マンションって言うたら鍵一つで生活できるから、マンションの方が良いわね。征次もいいでしょう。」

「ああ、どうでもいいよ。いつそのこと俺の名前にしてくれたらもつといいけれどなあ。」

征次が言った。

「じゃあ、やっぱり、サーファーズあたりから見てもましようね。ホテルで貴方が朝食を摂っている間に、僕が一足先に探して来ますから。さあ、ホテルに着きましたよ。じゃあ僕は2時にお迎えにあがりますので、この玄関に出てきてください。」

亀井がリムジンから降り、言っつてすぐ二人と別方向に行こうとしたので、初恵が言っつた。

「あのおう、このリムジンのお支払いは。」

「ああそれはあとで総て清算しますから、今はいいです。それではごゆっくり朝食をお楽しみ下さい。では。」

急いでいるのか亀井が言うやいなや行っつてしまった。

「どうしよう、お昼は。」

初恵が征次に聞いた。

「どうしようつたつて、とりあえず書類なんかを部屋へ放り込んでこようよ。飯はそれから考えたらいいじゃん。」

征次と初恵はエレベーターに乗り込んだ。

「こないねえ、どうしたのかしら。」

初恵と征次は玄関で待てと言っつた亀井を待っている。既に約束の2時を10分も過ぎている。車はひっきりなしに玄関前に止まっつては出ていくのだが、どの車にも亀井は乗っつていなかった。

「なんだよう、あんまり信用できない奴だなあ。」

征次が言っつた時、遠くで二人を呼ぶ声が聞こえた。玄関の遙か向こうに数台の車が停まっつている。その中の一台のドアが開けられ呼んでいる人間が見えた。

「あつ、お母さんあの車だよ。」

征次が言っつて出入りする車の隙間を縫っつて歩き始めたので、初恵もうしろを追いかけた。

「亀井さん、凄い車じゃないですか。これっつてロールスロイスじゃないの。亀井さんの車？」

征次がビククリして亀井に聞いた。

「ええ、お客が来る度にリムジンを雇っていたら高くつきますから、親父が買ってくれるっていうからいつそのことこんな車にしたんです。でも学校に行くには運転手みたいですからイヤなので、別に小さな車も持っていますかね。」

亀井が答えながらドアを開けたので、征次が助手席、初恵は後部座席に座った。

「亀井さんって、凄いいお金持ちなんですねえ。」

征次の言葉まで変わってしまった。

「いゝえ、金持ちは親父で、僕はいつまでたっても貧乏ですよ。さあ、もう一度サーフアーズへ行きましょう。」

亀井が答えて車を走らせ始めた。

「いいなあ、俺もちよつと親父に頼んでみようかな。」

征次が後を振り返って初恵に言った。

「馬鹿ねえ、あんたはブラブラのプー太郎でしょう。そんなのでは何を言っても聞いてくれないわよ。大学にでも入ったら言ってみる事ね。」

初恵が言った。

「そうそう、マンションを見たあとに、大学の方も見に行きましょうよ。オーストラリアにある唯一の私立大学がゴールドコーストにあるんです。そこなら入学は結構楽ですから。」

「へえ、それはいいねえ。俺は家よりそっちの方を先に行きたいねえ。」

「征次さん、そう言いなさんな。不動産の方を優先してくれないければ僕の生活に影響しますからね。大学の方は僕に任せてください。今、法学部の方では生徒数が少ないって言ってましたから入れますよ。卒業したら弁護士ですよ。その頃には僕も商売を始めていますから、弁護士になった征次さんが仕事を手伝ってくれたらいいなあ。」

「亀井が持ち上げるように言ったのをまともに受けた征次が、
「弁護士かあ。響きがいいなあ。弁護士になったら親父も文句は言

わないだろう。」

後部座席の初恵に向かって征次が言った。

「馬鹿だねえ。何言ってるの、あんたが弁護士なんかになれる筈が無いじゃないの。そんな夢みたいなお話ばかり言ってるので、しっかり考えなさいよ。」

初恵は勿論息子の学力程度も判っている。こんな愚息が弁護士なんかになれる筈がないと確信を持って、馬鹿にしたように言った。

「さあ、さあ、着きましたよ。」

車は大きなマンションの玄関先に滑るようにして横付けにされた。亀井が言っただアを開けた。

「一足先にキーを借りてきましたので、不動産屋へは立ち寄りせずに直接来ました。さあ、入ってみましょう。」

3人が玄関に立つと、両開きの大きなとびらが自動的に開いた。大理石を敷き詰めた床を歩きながら、初恵は、ここは高いだろうなと思った。広いロビーの片隅にカウンターがあり、若くもない女性がかちらを見ている。亀井が手を挙げて近づき話している。

「ここは夜になると玄関ドアはロックされて入居者以外は誰も入ってこられなくなります。昼間も管理人さんがあやつて見張っていますから、変な人は自由に出入り出来ませんからセキュリティは完璧です。だいたい新しいハイライズはこんなシステムになっています。さあ、行きましょう。」

と亀井が言っただエレベーターに入った。21のボタンを押して、「こちらはイギリス方式で1階はグランドレベル、2階から1、2、3階と数えますから実際は22階ですね。最初は僕も戸惑いました。さあ着きました。」

随分と早いエレベーターだ。征次がものを言う前に22階まで上がった。エレベーターホールから左右に、厚手の絨毯を敷き詰めた廊下が続いている。廊下の反対側には大きなガラスがはめ込まれ、ゴールドコーストの景色が一望出来る。3人は廊下の突き当たりま

で歩いた。亀井がキーを差し込んで扉を開けた。入るとすぐが、広いラウンジだった。その外側にはそこでパーティでも出来そうな広さのベランダがある。すべてガラス張りの窓からは南太平洋が完全に見渡せる。こちらがマスターベッドルームですと言う亀井に連れられて広いベッドルームに入った。ここにも広いベランダがついている。

「凄い部屋だなあ。あれこの扉はなんだろう。」

と開けたと同時に征次が言った。

「母さん、ちよつと来てみるよ。凄い風呂がついてるぜ。面白い設計だなあ。寝室にくつついて洋服部屋が有つてその奥にこんなに広い風呂部屋がついているなんて。秘密の部屋みたいじゃん。この風呂場だけでも俺の今の部屋よりか大きいぜ。」

「まあ、ほんとう。凄いわねえ。」

二人が感動しているのを横目にみながら亀井が言った。

「その浴槽には最初から泡の吹き出し口が付いていますよ。疲れた時なんか泡風呂にゆっくりと浸かるのもいいものですよ。その浴槽から眺める景色も良いです。ちよつと浴槽の中に入ってごらん下さい。いいですよ土足のままで。」

「ほんとだ、ここからカジノが見えるぜ。」

「部屋数は3つ有りますから、そちらも見てみましょう。」

亀井が言ったので、初恵も景色を見てみたかったのだが仕方なく諦めて亀井に続いた。

「ここがキッチンです。すべて作りつけのシステムキッチンです。これがオープンで、これがディッシュウォッシャー、いわゆる皿洗い機ですね。」

亀井が言つてその扉を引き下げた。

「へえ、こんなに大きな皿洗い機。見たことないよ。ねえ母さん。」
征次は何にでも感動するタイプらしい。

「そうね、何でも揃っているみたいで本当に便利がよさそうねえ。」
「こちらと、こちらがベッドルームです。それぞれにローブが付い

ていますから、日本のようにタンスで室内の広さを狭められる事は有りません。そしてこちらがトイレと風呂場です。その横の扉を開けると洗濯室が付いています。どうぞ御覧になってください。」

亀井が言うので征次はベッドルームへ、初恵は洗濯室へと入った。「あらまあ、アイロン台から洗濯機、乾燥機まで付いているのねえ。収納庫も充分ね。」

亀井の耳に初恵の驚きの声が聞こえてきた。

「亀井さん、ここ良いよ。俺はここで良いと思うよ。幾らなのかなあ。」

征次が亀井の横に来て聞いた。

「まあ、そんなに焦って決めなくてもあと幾つも見に行きますから、それから検討してくださいよ。ちなみにここは少し高くて日本円で5600万円です。次に見に行くところは少し安くて4000万円です。まあ見てから比べてください。」

初恵も横に來たので、

「じゃあ、次の物件を見に行きましょう。」

と亀井が初恵に向かって言った。

「別にそんなにたくさん見なくなっちゃっていいわよ。わたしもここが気に入ったわ。」

「まあ、そう言わないで、これこうやって不動産屋からキーまで借りてきているのですから見るだけお付き合ってくださいよ。」

亀井がポケットから鍵を取り出して顔の前でプラプラと振りながら言った。

「仕方がないわね。じゃ行きましょうか。」

と言って初恵が入り口に向かって歩き始めた。ふと玄関ドアの前で振り返り、窓から見える南太平洋の景色を見たり、台所の方を眺めたりして、

「やっぱりいいわあ。」

とため息をついてドアを開けた。

車に乗ってからも初恵は感激を多くの言葉で言い、別の物件は見なくても良いと言った。

「まあ、そう言うなって。次のを見て比べりゃ良いんだから。」
征次がなだめ役になった。ほんの少し車に揺られただけだが、
「はい着きましたよ。」

と亀井が言った。そこはゴールドコーストハイウェイに沿った高層マンションだった。

「ここは8階です。でも9階です。変ですねえ間違わないでくださいね。」

亀井がエレベーターの前に立ち止まって言った。中に入ったエレベーターのカーゴで建物の古さがにじみ出していた。

「ここは少し古いので安いのですが、裏側がネラングリバーになっていましてマンション専用の栈橋があります。勿論入居者専用ですから、ボートでもお買いになつたらここから直接太平洋へと出られますよ。」

亀井の言葉が終わるやいなやエレベーターの扉が開いた。

廊下の壁はモルタルに吹き付けられているだけで、さっきのマンションのような高級感はなく無い。しかも両サイドに部屋が有るので、廊下の灯りは電気の照明だ。亀井が部屋の前で鍵をカチャカチャ言わせながら、

「あれ、おかしいなあ、入らないや。こっちのキーかな。あつ、これだこれだ。」

と言ってようやくドアを開けた。さっきのに比べてみて少し狭いかなと感じた部屋からはゴールドコーストの山並みが遠くに見渡せる。ベランダに出てみて下を覗いた征次が言った。

「ああ、あれが栈橋ですか。でも誰も船は停めていませんね。」
「えっ、そうですか。ここはそんなに金持ちが住んでいないのかなあ。」

亀井がうしろの方の言葉は濁して言葉少なく言った。

「亀井さん、もう他のマンションなんか見る必要はありません。さっきの部屋に決めますからね。」

初恵が急に亀井に向かって強い口調で言った。

「なんだよう。俺に決めさせるなんて言ったくせに。」

征次が口を尖らせて言ったが、別に物件に文句を言っている訳では無さそうだ。よしよし魚が食いついたぞ。亀井は心の中でつぶやいた。

「はい、判りました。そしたら明日契約書なんかを用意してホテルの方へ参ります。英語の契約書ですけど僕が説明しますから安心してください。手付け金は幾らかお持ちになつておられますか。」

亀井が最後の一押し、フッキングだと考えて言った。

「ええ、現金はそんなに持つてきてないけど、トラベラーズチェックならたくさん有ります。それでも良いでしょう。」

初恵がおおずと答えた。

「はい、そりゃあ問題有りませんよ。とりあえず1割りの手付け金を頂くのがしきたりですので御用意下さい。部屋の引き渡しは1ヶ月後となりますがよろしいでしょうか。」

亀井が言うのに、

「えっ、それは困るわ。お金は問題ありませんけど、もっと早く出来ないかしら。だってホテル代だって勿体ないし、その分家具を買ったりする分に足せるでしょう。何とか早く出来るようにしてちょうだい。」

初恵がせき込んで言った。

「判りました。でも弁護士の手続きなどで最低でも2週間は必要です。特急でやって貰ったとしてもやはり2週間は頂けませんと。」

「仕方がないわね、絶対に買うからその作業は今日からでも初めてちょうだい。」

ようしやった。フッキング成功。あとは釣り上げるだけだ。今度の魚は大きそうだ。亀井は心の中でほくそ笑んだ

「判りました。今から大学の方へ行つて、帰つたらすぐ不動産屋に手配をさせるようにします。じゃあ早い方が良いでしょうから、すぐ大学の方へ行きましょう。」

3人はまとまってエレベーターへと歩き、ロールスロイスに乗ってボンダイ大学へとやってきた。

「なんだ、もつと遠いところに有るのかと思つていたのに、こんな住宅街にあるなんて信じられないよ。新しい校舎だね。」

「そうですね、まだ大学自体が設立されて15年ぐらいかな。」

「へえ、建物を見たら去年にでも出来た感じだけね。」

「ははは、そりゃあ日本と比べたら駄目ですよ。日本なら15年も経たら建物の外壁はどす黒くなつてしまいますが、やはりこちらの空気が綺麗なのでしょうね。いつまで経つてもこの様に綺麗な外壁ですよ。」

亀井が笑いながら征次に答えた。

「じゃ、もういいわね。亀井さんホテルまで帰りましょう。」

急に初恵が言い出した。

「何言つてんだ、今来たばかりじゃないか。まだ大学の中も見ていないし。」

征次が俄然と抗議をしたが、

「いいの、大学の中なんかあんたが入学したらいつでも、イヤになるほど歩けるんだから。亀井さんに早く帰って貰つてマンションの手続きを始めて貰う方が大切な事なのよ。」

初恵が言い張るので、亀井と征次は顔を見合わせてお互い、肩をすぼめて大きく両手を広げた。まるで外国人のような仕草だ。

「はいはい、判りましたよ。じゃあ、亀井さんホテルまで送っていただきますか。」

征次が言つので亀井も同意して車を走らせた。

「じゃ、明日の朝、9時頃に部屋までお伺い致します。」

亀井がホテルの前で二人を降ろしてから言つた。

「はいはい、じゃ、よろしくお願いしますわね。9時ですね。お待ちしていますよ。」

初恵も挨拶を交わして征次と共にホテルの中へと消えた。そのまま亀井は車を走らせてパシフィック・フェア・ショッピングセンターの駐車場へと入れた。車の中で携帯電話を取り出し、手慣れた指でボタンを押した。

「ああ、親父かい。ちよつと儲け話があるんだよ。いいから、いいから、ちよつと聞けよ。俺の客がマンションを買っただけど、中抜きをやってるから一旦親父が買っただよ。そうそう、中抜きだよ。親父もよくやってたじゃないか。でもな、こつちは法律でうるさいんだ。だから親父が一旦買っただよ。明日その契約をするから今日中に買ってしまったくないと問題になるからね。」

電話の向こうで親父が考えている様子が見える。

「幾らで買って、幾らで売るんだ。」
「しばらくして親父が聞いた。」

「3400万円で買い。5600万円で売り。費用は2000万円ぐらい。簡単な計算だろう。親父の取り分は2000万円だよ。まっ、少しは俺にも小遣い銭はくれるだろうけれどね。俺も金は持っているから出しても良いけれど。銀行を通して送金の実績を作っておかないとまずいだろう。親父に金が足りないなら俺から送っても良いぜ。」

亀井靖之が親父の心配を跳ね飛ばすように言った。

「金は問題ない。今からでもすぐに送ってやる。銀行に電話をすれば良いだけだからな。でも契約書のサインなんかはどうするんだ。」
「何を言っているんだい。今まででも親父のサインで俺が何でもやってきたじゃないか。こんな時は親父と俺の姓が違うツてのは便利のいいもんだな。じゃ、手続きを始めておくれ。頼むよ。」

亀井は電話を切るとポケットからタバコを取り出して火をつけつつくりと煙を吐き出し、

「これで今日の収入は2500万円ぐらいかな。」
とつぶやいた。

第八章 新事業

第八章 新事業

早川浩一は父の代から始まった早川組と言う土建屋を2代目として引き継いだ。それから2年目に早川建設株式会社へとその組織形態を変えた。明治生まれの親父は浩一を子供の頃から2代目に育てるため、土建屋に学問はいらんという自説の元にスパルタ方式で育て上げ、中学校卒業と同時に工事現場へと見習いで放り込んだ。明治、大正、昭和と生きた親父は頑固一徹で早川組を江東区では一番大きな土建屋へと育て上げた。それを一番身近で見習った浩一は親父の頑固さに加えて、親父に隠れて勉強した経理や法律を武器としてゼネコン予備軍としての早川建設と言う会社組織にまで大きくのしあげ、今では従業員300人、下請け作業員1000人を抱えるまでになった。

早川浩一の正妻にはこどもが生まれなかった。御陰で外に女を何人か作っても女房は苦言の一言も言わない。その中でも小料理屋をやらせていた熊谷初恵に男の子が産まれた。浩一が45歳の時だった。遅く生まれた子供ほど可愛いものはない。初恵には小料理屋もやめさせて一軒の家を持たせ、子供と二人で暮らせるようにしてやった。

18年が経った今、その子供がどうしようもない反抗期で大学受験にも失敗し入った予備校もさぼり、プー太郎を決め込んでいる。それが初恵と共に送り込んだオーストラリアで地元の大学へと入りたいと言う。日本に住んでいた間中、それも特にこの数年間、早川浩一を悩ませ続けたあの愚息が外国の大学へ行きたいという。私立大学だから入学に際しての寄付金が必要だという。聞くと500万

円で法学部に入れるそうだ。早川浩一はにべもなく送金してやった。

そんな頃、親父の代から引き継いで会社の専務をしていた金沢徳蔵と言う男が老衰で無くなった。その息子孝雄にも一つの現場を任せていたが、葬式の数日後、社長室に尋ねてきた。

「社長、わたしの持つている現場も今月末で終わります。出来たらこれを機会に会社を辞めさせていただきたいのです。」

金沢孝雄が出されたコーヒーにも手を付けずに、固い表情で言った。

「おいおい、どうしたんだい。急にビツクリするような事を言うなよ。何が不満なんだ。お前の場合、給料じゃなく出来高払いだから、結構金には文句は無いだろが。」

浩一が机から離れて金沢の前に腰を降ろして言った。

「さあ、聞こうじゃないか。」

金沢の言葉を促すように、更に言葉を付け足した。

「はあ、実は不動産の免許をとりましたので遅蒔きながら独立を考えているんです。大学時代の仲間が既に3人集まりましたから本格的に不動産屋を始める事にしました。」

金沢孝雄は浩一の親父と違い息子には学問をつけなければいけないと大学まで卒業させ、浩一の会社へと入社させたのだった。

「なんだ、そうか。独立するのなら止める訳にはいかな。大学卒業の人間が集まってやる不動産屋なら周旋屋をやるのではないだろう。土地の開発でもやるのか。」

浩一が聞いた。

「はい、一応はこの会社で学びましたマンションの建設から始める事にしております。だから図面が出来たら社長に建設の方をお願いするつもりでありましたが、今日現在ではまだ出来上がって来ませんので持参しておりません。でも間違はなく社長に建設はお願いします。社長に退職の了解を戴きましたら、すぐさま作業に取り掛かりますので数日内には御覧戴けると思っています。」

金沢が活き活きとした顔を見せて話した。

「そうか、そうか。それはよかった。ところでマンションを建てると言っても資金はどうするのだ。用途はついているのか。」

「ええ、仲間の一人は現在大手の銀行で貸し付け係をやっておりますので、資金関係はこの男が見て、あとの二人は不動産業者に務めておりましたから、販売を担当します。わたしが建設関係を見て、一応の態勢がとれた訳です。とりあえずは東京都内だけをテリトリーとしますが、順調に拡大できましたら大臣免許を申請して周辺の県外へも進出する計画ではあります。既に3箇所の土地の手当ては契約だけですが終わっておりますから、わたしが抜けることが出来ないのです。ご無理を申しますがよろしくご判断下さい。」

金沢が頭を下げた。

「そうか、そこまで進んでいるのか。羨ましいな。頑張ってくれよ。そんな話を聞いて俺が反対なんか出来るものか。出来る限りの応援もさせて貰おうじゃないか。」

浩一が金沢の手を取って言った。

「あっ、ありがとうございます。」

金沢が感極まったように目を潤ませて言った。

「そうなれば俺も色々と考えなくてはいけないな。ちょっと待て。」

浩一が立ち上がって社長机のうしろにある大きな金庫を開けて、札束を手づかみで持ちだし、金沢の前にデンと置いた。

「退職金なんかはあとで総務の方から出るだろうが、これは俺からの選別だ、1000万円ある。会社設立の経費ぐらいにはなるだろう、持って行きなさい。」

「えっ、そんな・・・」

金沢は声も出ないほど感激した。

「まあ、親父さんから君まで二代に渡つての奉公をしてくれた金沢家だから、これでも少ないぐらいだが納めておいてくれ。本当に俺が必要ならいつでも手伝ってやるから言っただけよ。長い間ご苦労だったな。ありがとうございます。」

金沢が涙を溜めて浩一を見つめているが、声にならない。

「よしよし、もういいから行きなさい。俺も今から用事で出掛けなくちゃならんからな。」

金沢がうなずいて現金を自分のカバンにしまい込んで立ち上がった。

「本当に、無理ばかりを言いました。すみません。……でした。」

最敬礼を何度も繰り返して金沢が部屋から出ていった。

「そうか、独立する奴がうちの会社から出るようになったか。」

浩一がつぶやきながら冷めたコーヒーに手を伸ばした。

数日後浩一は金沢から電話を受け、同じ社長室で金沢の連れてきた3人の男達とも向かい合った。

「先日は本当にありがとうございました。会社のメンバーも本当に喜んでおります。つきましては3棟分の図面が出来上がりましたので、社長に一番最初に見て貰おうと持参致しました。どうか御覧下さい。」

金沢が広げた大型の図面に目を落とした浩一がビツクリしたように言った。

「おいおい、金沢君。これは本格的な建物じゃないかい。僕はてっきり小型のマンションから始めるものだと思っていたよ。1、2、3、……12階建て。どうして、どうして、凄い物から始めるんだね。ビツクリしたよ。どうやってこんな資金が出来たのか聞きたいねえ。」

「それにつきましては僕の方から説明します。我々ではたいした信用は有りませんので、資金集めを銀行などからやっていたのはこんな事業は出来ません。僕が銀行にありました時に考えを巡らせていたのですが、色々な資金集めのからくりが有りまして。一口で言えば、一般顧客から直接集めるという方法なんです。まあ土地の資金程度は銀行からも借金をしていますからね。」

金沢が連れてきた吉田と名乗る男が答えた。大手の銀行に長年勤めていたと言うだけあってそれなりの貫禄も供えている。

「それにしても凄いね。これを3棟一発に着工するのかね。」

「いえ、先日社長に話をしてからあと、更に4箇所の土地手当が出来ましたから第一回目の建築発注は7棟になる予定です。しかも販売も順調で戸数で言えば既に4棟分が完売しております。」

金沢が胸を反らせて言った。

「おいおいおい、そんなに年寄りを驚かせるものじゃないよ。そんなことが出来るものなのかね。ビックリを通り越しちゃったよ。まさかその建物総て俺にやれと言う訳じゃあ無いんだろうな。」

「とりあえず、この3棟だけは社長にお願いするつもりです。どうかよろしくお願いいたします。」

「わかった。うちの会社の内容は君がよく知っているから暴利はとらないように積算の方に言っておく。まあこれは任せて貰ってもいいだろう。あとの分はその流れを見せて貰ってから相談しよう。」

浩一は金沢達に押され気味の自分を感じながら言葉を継いだ。

「ところで、その資金集めのやりかたと言うのはどんなからくりなんだ？これは教えてはくれ無いわなあ。」

「いや、社長なら問題ないでしょう。実はこれらのマンションの大半は貸しマンションなのです。買い手は住むのが目的では無く、賃貸収入を求める人々なのです。一つは参加経営システムで、一口を100万円で区切り、返済期限を3年として満期時には元金を返済します。その間利息を年率で10パーセントを支払います。これはあくまで経営に参加する方式ですが、二つ目のシステムは普通の所有システムです。いわゆる購入されたマンションのローン返済を家賃で相殺していく方式です。これだと少ない頭金を用意するだけで入居者が支払う家賃が借金を消して行くわけです。購入者は知らない間に資産形成が出来ていくと言うものです。だから普通のサラリーマンでも一度に数戸のマンションを購入できるのです。最後に3つ目のシステムですが別枠所有システムとして一口を100

0万円とし、期限を2年間として出資して貰います。これには満期時期に元金の2割を金利として加え返済をするという方式です。この3つ目の方式で既に4億円を出資した方がおられますし、2つ目のシステムでも、まだ宣伝もしていないのに70戸が売られています。一つ目のシステムは現在、セールスマンを6人雇って戸別訪問をやらせていますが、これも約1000口が契約できております。それらの御陰で土地購入に拍車がかかった次第なんです。来月からはTVでも募集を開始しますから更に資金は膨れると思えますよ。」

先の吉田が自慢そうに言った。

「なるほどねえ。随分と頭の良い人間が揃ったものだ。」

浩一が言った。

「ところで今日は全員が揃ってお伺いしたのには訳があるのです。」
横から山口という大手不動産会社の次長だったと言う人物が声を出した。

「おいおい、改まって話されると怖いね。まさか俺にも客になれと言うんじゃないだろうね。」

浩一が空とぼけたように言った。

「いや、実際我々にとっては重要な事なのです。金沢君から話した方がいいかな。」

もう一人の別の不動産会社に勤めていたという中村が金沢に向かって言った。

「そうですね。僕の方から話しましょう。じつは社長にたつてのお願いが有って全員で雁首揃えてお願いに伺った次第なんです。実は、余りにも新しい会社なので、対外的にも銀行関係にも更に顧客にも全く、海のものとも山のものとも知られておりませんで、いわゆる信用が全く無いというのが実状です。我々若輩者が何人首を揃えても信用の足し算にもなりません。会社の設立段階でそれなりの方をヘッドに迎えた方が一番早いと言う結論になったのです。そこで我々の中で白羽の矢をうち立てたのが社長なのです。別段名前だけを貸してくれと言うのでは有りません。我々の会社ごと社長の傘下に

納めていただくつもりです。先程も申しましたように、資金云々は全く問題はございません。經理に関しては社長の会社とは完全に分離して頂いて結構です。いわゆる社長の名声が我々には必要なのです。どうかこの金沢を助けると考えて聞き届けては戴けないでしょうか。」

4人の男が一斉に立ち上がって最敬礼をした。

「おいおい、こんな田舎のお爺さんにそう言う事をしては駄目だよ。まあ座り給え。話はよく判った。しかし、わたしも自分の会社を大きくするのに手一杯状態なのは金沢君がよく知っている筈だ。」

浩一が話を始めたのを制するように、

「いや、申し忘れていましたが、社長に常勤をお願いする訳では有りません。」

と金沢が言った。

「判った、判った。まあ金沢君を含む君達が大きく事業を延ばしたのは判る。しかし俺なんかでいいのかね。他にも有名人に頼むとか方法はありそうなものだが。」

「いえ、やはりこういった事業は、それなりの事業経験の有る方ではなくてはなりません。映画俳優などでわたしが務めていた銀行にも知り合いはありますが、彼等は宣伝には使えても、事業には向きません。それは私どもではなく社長の方がお判りでしょう。」

吉田が金沢に替わって答えた。

「よし、判った。ここ2、3日時間をくれないか。その間で今まで聞いた事の考えを自分なりに整理して返事をしよう。15日の金曜日夕方にももう一度会おう。今度は忙しい中、全員で来なくてもいいだろう。何とかいい返事が出来るように考えてみるよ。」

浩一が言った。

「ありがとうございます。それでは当日金沢に電話をさせましてからお伺いいたしますので、どうかよろしくお願い致します。」

吉田が全員を代表する形で言い、全員が立ち上がって最敬礼をした。

「いやあ今日は楽しい勉強をさせて貰ったよ。頑張つて事業を成功させてください。じゃ、次に会うときを楽しみにしているよ。」

早川浩一は彼等を送り出してため息と共に社長イスにどっかと腰を落とす、

「あの吉田という奴が首謀者みたいだな。金沢君を守つてやらなくてはならないかもしれないな。」

とつぶやいた。

約束通り金曜日の4時に金沢から電話を受けた。金沢だけが来ると言つので、築地の料亭新月で7時に会うことにした。

「社長さん、ようこそいらっしやいませ。お連れ様はもうお着きになつておりますよ。どうぞどうぞ。」

築地では一番美人だと評判の女将が、早川を迎えた。

「おつ、こりやどうした風の吹き回しかな。美人の女将が迎えに出るとは。景気が悪くて下足番を首にしたのか。」

「まあ社長さんたら、いけずやわあ。」

京都出身の女将は時たま京都弁が出てくる。

「そんなことお言いやしたら、次からはでえしまへんえ。」

女将が先を歩き、振り返りながら早川をちよつと睨んで言った。

「ははは、冗談に決まつてるだろう。睨まれたら怖い怖い。」

部屋の前に来て、女将が廊下にすわり、

「ごめんやしや。」

と言つて両手で障子を滑らし、頭を下げるので、その前を通つて

早川は部屋へと入った。

「どうぞ、社長さん。ごゆっくり。」

女将が挨拶の後に出ていこうとしたのに、

「あつそうだ。女将、今日は忙しくて昼飯を食つたらん。ここへ座つたら急に腹が減つてきた。酒もそうだが、料理の方も早めに出して貰おうか。」

と早川が言った。

「はい、板さんにそのように言いつけます。ほな、ごゆっくり。」
女将が出て行ったので、金沢が座っていた座布団をずらして頭を
下げて言った。

「お忙しいところ本当に無理を申しまして申し訳ございません。」

「まあまあ、気持ちの上での袴は脱ぎ捨てて、気楽に飯に付き合う
つもりで飲もうよ。それよりか販売の方は順調に進んでいるのかい。」

早川の言葉で座布団に座り直した金沢が言った。

「はい、ありがとうございます。あれからも出資者の集まりはかな
り増えておりますし、分譲の方も順調です。」

「そうそう、そこで問題じゃよ。いったい1棟のマンションで何人
の出資者をとるつもりなんだ。家賃との関連も有るから計算はして
いるのだろう。」

早川の言葉で、金沢がカバンを引き寄せて書類を取り出そうとし
た。

「よせよせ、ここは会社じゃないんだから、堅苦しい話の仕方はや
めにしよう。酒の上での話しに書類は必要ない。」

「はい、判りました。どうもすみません。」

金沢が謝って、頭を下げた時に、仲居が二人で酒と料理を運んで
きた。

「おう、待ちくたびれたぞ。腹が減って前の皮と後の皮とがくつつ
いてキツスをしているぞ。」

早川がお腹をさすりながら仲居に言った。

「まあまあ、社長さんはご冗談がお好きですなあ。そのお腹でした
ら皮の厚みが凄いですね。ほほほ。」

「あつ、多恵ちゃん、言ったな。知ってるかい、天は二物を与えず
って言葉を知っているだろう。見て見る、多恵ちゃんが言うように、
腹の皮は厚い、だからその反動で面の皮が薄いだろう。だから可哀
想にいつも、こんな所で多恵ちゃんみたいな美人にいじめられて泣

いているんだよ。よよよよ。」

早川が泣き真似をしながら仲居に言った。

「まあまあ、社長さん。馬鹿なことを言っただんな顔してそんな事が言えるんですか。ちよつと顔を見てみましょう。」

仲居が社長の顔に自分の顔を近づけた。

「うわあ、恐い。多恵ちゃんに又貞操を狙われた。」

と、早川が驚いた顔をあげた。

「まあ、何が貞操なもんですか、あつちでもこつちでも女を泣かしているんですよ。」

仲居がすねたような振る舞いでかるく早川のひざを叩いて言った。

「あつ、多恵ちゃん。それは間違っている。僕はな、女を喜ばす事はしても泣かしはしないんだよ。」

「まあ、社長さんたら。そんなことどうでもいいでしょ。お料理は本当に全部並べてもよろしいんですか。」

仲居が本来の仕事を意識して言った。

「ああ、本当に腹が減っているんだ。全部並べてくれていいから。」

「そんなことしたら、旅館の夕食みたいになってしまいますよ。」

「いいんだ、いいんだ。その方があんた方も楽だろう。酒もあと2本ずつ持つてきてくれ。全部持つてきたら、あとはこつちでやるから誰も来なくて良いからね。」

早川が釘をさして仲居を帰した。

「さあ、まずは一杯いこうか。」

早川が差し出す徳利を金沢は手で制して、

「あつ、気がつきませんすみません。まずは社長から。」

と言い、早川の持つ徳利を取り上げ早川に勧めた。

「さて、仲居を相手に口慣らしも出来た事だし、飯を食いながら話をしようか。さあ、さっきの答えはどうなっている。」

早川が言ったので金沢は口元へ運んでいた猪口を置いて答えた。

「はい、計画では一戸あたり20口と計算していたのですが、出資者としての希望者が多いので現在は全く無視しています。いわゆる

売れば売れるだけ売ろうと言うことです。だから余剰資金が出来たらすぐ次のマンションの計画に入ると言う考え方に変わってきました。いわゆる100億集まれば100億のマンション。1000億集まれば1000億と言う風にフレキシブルに考えて行こうとなつたのです。」

「そうか、なるほどな。それで急に建設棟数を増やしたんだな。」

「そうです。実際売れ行きが悪ければそう容易く棟数を増やせる訳では有りませんから。」

「そうか。と言うことは俺としたらマンション建設の注文がうちの会社に入ってくる数をみていれば俺が常勤しなくても会社の状態をみる事が出来る訳だ。」

「そうです、そうです。営業を100人ぐらいに増やす計画です。で、現在の本社を少し広げようとしております。その時には、社長がたまに覗いてみようかなと思われたらいつでも来られるように社長室も作ります。」

「よし、判った。社長を引き受ける一つの条件は、総ての建設、もし本社社屋を建てる時でも、大から小に至るまで俺の早川建設に発注する事。それから俺の代行としての人間を一人取締役に加えること。彼には常勤させる。その二つの条件で引き受けるがどうだ。」

早川が酒を飲みながら、食事に箸を運びながら、淡々と話した。

「ありがとうございます。これで我々は助かります。更に事業を大きくする事が出来るというものです。本当にありがとうございます。」

金沢が箸を置いて、テーブルに頭をこすりつけるようにして礼を言った。

「待て待て、お前は何を言っているんだ。まだお前の方の返事を聞いていないぞ。」

早川が手で制して言った。

「いえ、その条件は我々が予想していた条件ですので全く問題が無いと言う事です。」

第九章 恐竜展

第九章 恐竜展

小野原は数年前の8月、暑かった日本の夏を回顧していた。二度目の信太郎と一緒に行った恐竜展。自分一人で行った時に比べて別な楽しみが有った。何しろ子供達はよく知っている。恐竜達の展示を見ていく内に、信太郎からは随分と説明をもらった。まるでガイド付きの観光気分だった。

その2日後、信太郎からメールが届いていた。それには。

「おじさん、昨日は本当にありがとうございました。楽しかったです。インターネットを楽しんでいますか？もしホームページを作りたいのなら又手伝いに行きますので連絡下さい。」
と書かれていた。

小野原勉は駅員の熱心な勧誘から恐竜展を見に行き、そこで子供達の旺盛な知識に刺激を受け、自分自身も少しは勉強してみようと思いい立ち、あれからずっと本で知識を蓄えてきた。インターネットにはまり込んでからまだ2日間だけだが時間が許す限りパソコンの前に陣取り、それぞれのホームページを閲覧してきた。

小野原は多年の経験から事件捜査で、自分の判断やカンを初期の段階で表明しないほうがよいことを知っていた。何気ない一言が、若い刑事に先入観をもたせて、捜査を誤った方向へ導く事がある。しかし、逆に自分の判断やカンが今まで狂った事が無いことも知っている。ホームページを多く見るに連れて恐竜に引き込まれていく。

イギリスで1676年にロバート・プロットによって恐竜の化石

が発見された。当時は全知全能の神が創った生物が滅びる事は無いというキリスト教の教義から、絶滅した生物の化石だとは言えず、巨人の骨だとされていた。それでも約100年後の、1763年になってR・ブルックスによって、それはメガロサウルスの大腿骨だと特定された。1802年から1860年にかけて同じ場所からかなりの恐竜足跡化石が掘り起こされた。アメリカでも1820年に恐竜の骨を発掘したがやはり巨人の骨だと言われた。

日本ではどうだろうか、十数年前までの学説では、恐竜は日本には居なかった。何故なら当時日本の国土は海底下にあつたからと言う学説が蔓延していたからである。しかし、熊本県で恐竜の足跡が発見されてから100パーセント地質学地図が塗り替えられる事となった。今では日本国内の至る所で数十の恐竜化石が発掘されているという。

何しろ恐竜が最初にヨーロッパで発見されてから330年、それが学問となってからの150年というもの、恐竜の研究はそれぞれ発掘者の科学的推論の演習そのものである。いわゆる自分が述べる推論に証拠を出せと言われても、あくまで状況証拠しか揃えられない。日本の裁判では通用しないと小野原勉は思った。

恐竜骨の化石やその足跡から太古に絶滅した恐竜達の手がかりをもとめ、推理を働かせる。最良の古生物学者と言う者は、自分が立ち立てた推理に基づき、最もすぐれた結論「推論を引き出せる者だ。小野原勉は本を読み進め、インターネットで勉強を進める内に、古生物学者は古生物探偵じゃないかと思った。

今まで足を棒にして証拠集めや捜査をしてきた小野原にとって証拠無くして推論が通る世界は、余りにも楽な世界に思えた。これなら自分にも出来る。ひとつ、古生物探偵になってやるう。

それにしても、本でもインターネットでも総てと言って良いほどに、地質年代表の時代年数が微妙に違っているのを見つけた。本な

どは筆者が書き、編集、印刷、出版、そして販売という時間的な問題があるからだろうとは思うが、インターネットでもそれぞれが違っている。どうしてだろう。どれが一番正解なのだろう。その他にも色々疑問な点が浮かび上がってきた。よし、ちよつとインターネットでメールを送ってみよう和小野原は考えた。

「さて、誰にこの疑問を送ればいいのか。」

パソコンの前に座って小野原は考えた。これらの疑問のレベルはどんなものだろうか、それによって恥ずかしい思いをしなくてはならないかも知れない。小野原は正直なところ迷った。

「そうだ、信太郎君からメールが来ていた。そうだ信太郎君に聞く。彼が先生だもんな。」

小野原勉は苦勞して質問を書き込んで送信ボタンをクリックした。「まあ、返事が来るのは明日かな。楽しみに待っていていよう。そうだ、山本君がアメリカやイギリスの警察のホームページを見ているって信太郎君が言ってたなあ。ちよつと見てみるか。」

小野原勉はスコットランドヤードの公式ホームページに入ってみた。勿論、英語で書いてあるので大半は意味不明だ。数ページ読んだと言つより眺めた感じだ。

ふと小野原は、自分が警察に関しての関心を失っているのを感じた。そこで、先日見たオーストラリアの香山さんのホームページでブリスベン博物館へのリンクが有ったのを思い出した。

「同じ英語なら恐竜の方を見てみるか」

小野原はつぶやきながら早速、ブリスベン博物館のページを呼び出した。

「言葉が判らないのは同じだが、こっちのホームページの方が何となく判るような気がする。やっぱり恐竜探偵の方が良さそうだわい。」

小野原はパソコンに話し掛けるように言った。そこへパソコンが変な音を鳴らし、画面の下の手紙マークにランプが点滅しだした。

「なんだろう。別に何も操作していないのに。あつ、これをクリッ

クしたらメールが見られるって信太郎君が言ってたなあ。」

つぶやきながらカーソルを合わせクリックした。信太郎からの返事だった。

「ありや、早いなあ。信太郎君もパソコンの前に座っていたのかな。」

「今現在、南半球で一番大きな全長26メートルのブラキオサウルスを発掘しているので参加されてはいかがですか。丁度こちらは冬場ですから11月に今年最後の発掘をやります。期間は二週間ですので費用は少し掛かりますが、経験の意味で参加するのも面白いですよ。参加申し込みはブリスベン博物館のホームページから出来ませんが、英文ですので面倒でしたら、私の方から担当している古生物学者に直接申し込んでもいいですよ。」

と、オーストラリアの香山さんにメールで紹介された。

信太郎と一緒に恐竜展を見に行ってから3ヶ月の時点で小野原勉はカンタス航空の機内にいた。

初めての海外旅行だ。それも単なる観光旅行ではなく恐竜の化石を掘り出すという崇高な目的を持つての旅である。

治安判事と言う肩書きを持つ香山であるが、会ってみて気さくな人で安心した。中肉中背、浅黒く日焼けした大きめの丸顔で、細い眼にどっしりした鼻を持ち、銀縁のメガネをその鼻の上に引っかけるようにしてかけ、白髪交じりの髭が特徴だった。還暦を迎えると言つわりには若く見える。

「まあ独身ですから、金銭面以外のフラストレーションが無くて、苦勞が無いから若く見えるのでしょうかなあ。あははは。実際、当地で免許証でも見せない限り年齢は信じて貰えませんか。」

香山は豪快に笑い飛ばした。

小野原勉は恐竜の発掘予定日に先駆けて数日の余裕を見て渡豪した。

「ブリスベンからウイントンの発掘現場まで、約2000キロの距離がありますから、途中一泊して車を走らせた方が良いでしょう。まあ私の場合、貧乏人ですから、宿泊費が勿体ない。だから一日で走ってしまいますがねえ。そこで早速ですが今日はブリスベン博物館へ行っていただきます。ちよつと用事がありますのでね。お疲れでしょうが、お付き合いください。博物館の入り口にはマタボウラサウルスの骨格がデンと据え付けられていますよ。楽しいですよ。そうそう、これからの予定ですが、今夜はゴールドコーストへ行って泊まります。明日は昼過ぎまで観光をして3時頃からダルビーの私の小屋へ行きましょう。山登りしたときの山小屋を想像してください。汚いところですがそこで一泊していただいて、翌日早朝からウイントンに向かって走り始めましょう。」

空港へ迎えにきてくれた車の中で香山は言った。

「いやあ、何から何までお世話をおかけします。何も判らない本当にど素人ですから100パーセントお任せするしかありません。どうかよろしくお願いします。」

小野原勉も謙遜ではなく心から言った。本当に、初めての海外旅行でもある事だ。英会話なんか全く出来ない。勿論、実際に恐竜に触れてみるのも初めての事だ。年齢の所為で度胸だけは人一倍あるでもそれが海外のしかも言葉の通じない中で通用するものなのだろうか。恐竜の化石を掘りに行って、もし何かの化石を見つける事が出来たとしても、それがいったい何の化石かも判らない。考えてみれば無謀な事だらけだ。今更ながら小野原は戸惑いを覚えた。

「まあ英会話なんて慣れですから。ましてゴールドコーストなんかで生活されるならすべて日本語でも不自由しないくらいですから、全く心配要りませんよ。」

小野原の心の中が見えるのか、香山がハンドルを握ったままで言った。

ブリスベン川に沿って建つクイーンズランド博物館は近代的な5

階建て程の高さの大きな建物だった。地下駐車場へと車は滑り込むようにして入った。

「荷物は総て車の中に置き去りにしてください。カバンなんか持ち込むと入り口でいちいち預けなくてはなりませんから。」

と香山が言っつて後部座席からビニール袋を重そうに取り出した。

「これですか、これは先日掘り出した樹木の化石なんです。これの年代測定をして貰おうと持ってきたんです。ついでじゃなければなかなかここまで来られませんからねえ。あつ、しまった。ここじや無かった。」

と言いながら香山は元の位置にそれを戻した。

「どうしたんです。」

小野原も説明を聞きながらビックリしたように聞いた。

「いやあ、ついうっかりしてアネックスはヘンドラへ移転しているのを忘れていたんです。もう3年も前なのについつい博物館と言えばここへと走ってくるんです。馬鹿ですなあ。でも折角駐車料金も払ってしまったので見学だけでもしましょう。」

と言っつて香山が先に立っつてエレベーターに向かっつて歩き出した。

「アネックスっつてなんですか。」

追いついた小野原勉が聞いた。

「ああアネックスは、何と言っつたらいいかなあ、作業場、保管庫かなあ。実際、そこには200万点もの化石が分類されて保管されていますから。まあ、一般には公開されていませんが。昔はここに有っつたのですが狭くなっつてきたので、そのセクションだけが移転したのですよ。」

エレベーターの前で香山が説明してくれた。

エレベーターを降りると目の前にデンと見上げるように大きなマタボウラサウルスの骨格が立ちはだかつていた。高さが4メートル、長さも10メートル程有りそうだ。

「凄いですねえ。少し前に恐竜展を見に行きまして感動したのです

が、近くに見ると更に凄さが感じられます。こんな化石が全部揃って出たんですか。」

小野原が感心したように見上げながら聞いた。

「いやいや、これ全部が発掘された訳ではありませんよ。一部です。これはその発掘された骨を参考に造った物ですよ。だから恐竜展なんかでは、まあ一部分は本物かも知れませんが大半はあとから造ってくっつけた物なんです。どこの博物館でも本物は奥深くしまっているものですよ。じゃあ本物の化石を見に行きましょう。」

香山はそう言ってエスカレーターへと足を運んだ。3階へ上がり廊下の奥にある事務所スペースへ来た。香山氏はカウンターに座っている男性に手を挙げて奥へと勝手に入っていった。小野原もそのまま従った。大きなたくさんの引き出しの前で香山が腕を組んでその見出しを丁寧に眺めている。

「あつ、これこれ。」
と言って引き出した。

「これが本物の化石ですよ。さっきも言いましたように、ここに有るのはほんの一部で大半はアネックスに有るのです。ちょっと触ってみませんか。」

香山が言うので小野原は恐る恐る手を出して触ってみた。

「へ〜こんな感じなんですか。これを見るとやっぱりさっきの全体骨格は模型と言うのが判りますね。これはいつ頃の物なんですか。」
小野原勉は初めて直接触る恐竜の化石に感激して聞いた。

「ちよつと待って下さい。これは135myaと書いていますから、日本語では白亜紀ですね。それもジュラ紀に近い時期です。このmyaというのはミリオン・イヤーズ・アゴーの意味ですから一億3500万年前の物ですよ。」

香山が年代を計算しながら説明した。更に別の引き出しを開けて、「こちらのは同じ頃の樹木の化石ですよ。」

「これは現代の木と同じでちゃんと年輪が有りますね。」

小野原が同じように恐る恐る手を触れて言った。

「そうですね。ここにしていると日本には無い勉強が出来ますので、楽しいですよ。ましてこんなにして手で触れられるでしょう。ところで時間がないので急ぎましょう。」

と香山は言って歩き出した。それぞれの展示物の前で香山の説明を聞きながら小野原勉は恐竜の前に地質学の勉強までしなくちゃならないなあと重たい気持ちになった。

「そうですね、古生物学は現代の生物にも比較しなくちゃなりませんから、一般動物学も必要ですし、勿論、地質学も重要です。更に植物も同じですね。例えば恐竜それぞれの歯も形状も大きさも違いますが、それを比較して食べていた食料などを考えます。でも少しは知識も必要ですけど、大半は発掘した物自体をここへ持ち込めば、それが何であるか、年代はいつ頃のものであるかなど計測、鑑定してくれます。だから難しく考えないで無心に掘り出せばいいんです。」

香山が小野原の気持ちに伝えて解説してくれたので少しは気持ちが悪く落ち着いた。

アネックスまでは車で約10分程で着いた。重そうなビニール袋を提げた香川に続いて小野原も入った。何かの倉庫か工場だった建物を改良したのか、体育館の中に図書館の書庫が無数に建ち並んでいるような感じを受けた。中は薄暗く、湿度も外部に比べて多そうである。香山からクック博士に会うと聞いていたので、ふとお茶の水博士を思い浮かべていた小野原だったが、出てきた人物を見て驚いた。普通のTシャツにジーンズをはいて、角刈りの頭をした体格のがっちりした、どちらかというと丸暴に近い人物だった。香山が持参したビニール袋を預け、英語で何やら話しているのを横で聞いていたが、

「じゃあ、ちょっと行きましょう。彼が案内してくれるそうです。」
と香山が急に声をかけたので、少しビックリした小野原だった。

迷路のようになった書庫ラックの間を右に左に何度も曲がり、ようやく目的の書庫の前に来た。さすが200万点も保管されている場所だ。1メートル幅程の引き出しが10段程も積み上げられ、それが無数に横並びで有る。その一つを博士が引き出した。

「これが現在ウイントンで掘り出されている例のブラキオサウルスの化石ですよ。この二つの列が総てそこから発掘された化石ばかりです。約500点くらいあるそうですよ。」

香山がクック博士の言葉を通訳してくれた。それにしても凄い大きさだ。間近に見て手で触ってみて、小野原は自分が入り込もうとしている恐竜の世界の凄さに今一度ため息をもらした。

別れ際にクック博士が何かを言っ握手を求めてきたのでそれに応じたが何を言われたのかは判らない。車に乗って香山に聞いてみた。

「ああ、近い内に発掘現場で又お会いしましょうと言っただけですよ。」

香山が何気なく教えてくれたが、小野原勉はそんなことも判らなかったのかと気持ちの上でかなり落ち込んだ。

その気配を運転しながら感じ得たのか香山氏が

「前にも話しましたように、英語は慣れですから、余り大げさに考えない方が良いでしょう。」

と慰めともつかない言葉で言ってくれた。

「そうそう、私の前の同僚で若い時分にオーストラリアを1年かけて一周して英語を学んだと言う人間がおりましてな、そんな事で身に付くものでしょうかねえ。」

小野原が山本の息子が自分に言っ言葉を思い出して聞いてみた。「ああそれは良いことですよ。私も一周した事があります。大きな町では結構日本人なんかいて、つい日本語で話をする事になりませんが、小さな町では英語しか意思を疎通する手段はありませんからねえ。特にオーストラリアの北半分は熱帯ですから話す言葉もゆっ

くりですし、田舎の人は人間好きと言いますか、話好きですから意思が疎通するまでゆつくりと話してくれそうですし、逆に、捕まれば離してくれない事もありますよ。特に老人なんかはね。まあ総ての人々が無料奉仕で英語の先生をしてくれる訳ですから感謝の気持ちで接すればかなり英語力を伸ばす事は出来ますね。勿論その期間は日本とは絶縁しておかないと、英語で考えるようになった頭の中がすぐに元に返えつちやいますからねえ。」

車はいつの間にか8車線のハイウェイに入っていた。小野原は耳に聞いていたドイツのアウトバーンもこんなものかと想像してみた。道路幅が広いのでスピード感は無いが、ふとメーターに目をやると130キロもの速さで走っていた。

「それにしても、凄いスピードで走るのでね。」

小野原が恐る恐る聞いてみた。

「ははは、オーストラリアは広いですからねえ。でもこれはやっぱりスピード違反ですから。」

と言って少しスピードを落とした香山が言葉を繋いだ。

「この道路のスピード制限は110キロなんです。でもそれをきっちり守って100キロぐらいで走るとしましょうか、どうです廻りの車に迷惑をかけるでしょう。」

実際のところ、現実に廻りの車が我々の車を迷惑そうに避けて追いついて走り去る。

「なるほど、郷にいれば郷に従えですな。」

小野原も納得した。

「さて、ゴールドコーストの町中に入ってきましたよ。どうです想像より大きな町でしょう。今走っている道はゴールドコーストハイウェイです。当地でハイウェイと言えば基幹道路という意味で日本の高速道路とは違いますからな。このあたりはメインビーチ、前方に高いビル群が見えますが、総てホテルかアパートですよ。まっ、日本ではマンションと言いますかな。そうそう、まずは宿を決めな

くてはなりませんな。さて、どこにしたらいいものか。安いモーターでもいいですか。私は貧乏ですから。」

香山が車を運転しながら小野原を横目で見て言った。

「いいですねえ、私も退職して貧乏ですから安い方がいいですよ。お任せします。」

小野原勉はモーターと言われ、すぐさま日本の煌びやかなセックス産業を象徴するモーターを想像した。

「モーターって、イヤらしいことを想像したでしょう。」

小野原の心を覗いたかのように香山が聞いた。

「いや、その、昔の職業から結構犯罪の現場になっていますから、ふと」

「ははは、日本は本当に何でもねじ曲げてしまうからねえ。日本でモーターは自動車旅行者の為の宿泊施設という本来の目的から逸脱してセックス産業の主流に転向してしまいましたからねえ。まあ物は例しとを考えてください。カジノのあるブロードビーチの先で安いところを探しましょう。」

香山が小野原の戸惑いを受け、小野原の話す言葉の途中から割り込んで笑いながら言った。

世界で一番高い80階建てのマンションQ-1が建つという場所や、カジノのビルディングを眺めながら、車は一つのモーターに入った。

「ここはこの辺りでも一番古いモーターなんです。だから安い。だいたい僕はゴールドコーストへ来ると友人宅に泊まるか、気を使わないで過ごしたい時などはここに泊まるのです。小さなモーターですし、オーナーも気さくな夫婦ですから。」

ここで香山が二つの部屋を確保した。小野原勉は自分の部屋へ入って思ったより広いし、ベッドも二つある。どうして別々に部屋をとったのかと夕食時に聞いてみた。

「ああ、理由は簡単です。私のいびきがうるさいからなんです。」

香山がすらつと応えた。

「でも香山さんは独身でしょう、いびきがうるさいなんて誰が言うのですか。あつ、これは野暮な事を聞いてしまったかな。」

小野原がつい聞いて頭をかいた。

「いやいや、野暮な話は一つもありません。ゴールドコーストに住んでいたときは結構、友人や学生などの若い人達が私の家に泊まり込みで来ていましたね、部屋は3つ有りましたので余った二つの部屋に彼等が泊まるのですが、遠く離れた私の部屋から漏れ聞こえる私のいびきがうるさくて眠られなかったと言うのを数人から聞きましたのでねえ。まあ、それは明日、わたしの山小屋で経験出来ますよ。ははは。」

それにしては夕食のステーキは大きい。しかも柔らかくてうまい。小野原は久しくこんな美味しいステーキを食べていなかったと思つた。レストランの店内は広く、見回すと結構東洋系の客も多く、飲んでいるビールも美味い。まるで日本に居るみたいな錯覚を覚えた。

「おはようございます。昨夜はよく眠られましたかな。」

朝はゆつくりと出掛けましょうと言う香山の言葉で、久し振りに朝寝をした小野原が9時になって外へ出ると、車の準備をしていた香山が声をかけた。

「いやあ、遅くなってしまいました。気持ちが悪く落ち着いた所為かよく寝られました。」

「それはよかつた。今日は今からちよつとカジノの建物に入って朝飯を食べてから、わたしは税理士のところと買い物に出掛けますのでお付き合ひ下さい。3時過ぎまではゴールドコーストですから途中色々観光しましょう。」

「わたしはこの2階にある税理士の事務所に行きます。小野原さんはその角を曲がったところに喫茶店がありますからコーヒーでも飲んでいてください。1階の不動産屋を眺めているのも良いかも知

れませんね。1時間程時間を下さい。」

と言って、香山は階段を上っていった。

小野原はついさつきコーヒーを飲んだところだし、1時間と言う時間を見知らぬ町の中を歩き回る程の度胸は今のところまだ無い、ふと不動産屋のウインドウに掲げられている売り物件の表示を眺めた。町の名前は判らないがたぶんこの近くだろうと想像しながら見て行く内に書かれた内容も何となく判り始めた。しかしどの物件にも土地の面積や建物の面積が書かれていない。これはあとで香山さんに聞いてみよう。数軒先にも別な不動産屋があった。ここから離れるのは不安だがまだ時間も有ることだしと小野原は移動した。ここでは店頭の数冊の本が置かれていた。見るとフリーと書かれている。手に取ると不動産物件のパンフレットのようなようだ。フリーと言うのは無料と言う意味だろうと、一冊を丸めて手に握りしめ、同じように掲示されている物件を眺めた。ふと目線を感じた。ガラス越しに掲示パネルの隙間から、中にいるセールスマンが自分を品定めでもするように見ているのだった。目線が合ったとたんにセールスマンの目が営業用の笑みを含んだ眼に替わり、ドアを開けて外へ出てきた。

「いらつしゃい、どんな物件をお探でしょうか。」

とでも聞いたのだろうとは思うのだが、小野原は100パーセント聞き取りが出来なかった。そこでつい、

「ソリー、アイ・キャン・ノット・スピーク・イングリッシュ。」

と言ってしまった。

かのセールスマンは両方の肩をすばめ大げさに両手を広げて、何かブツブツとつぶやきながらドアを開けて店内に姿を消した。小野原は、

「これは参ったぞ、やっぱり本格的に英語の勉強をしなければ。」

とつぶやきながら元の不動産屋の店先に戻った。なんとそこに香山の姿を見いだした。

「あっ、小野原さん。どこへ行かれたのかと心配していました。税

理士との話が早く済みましたので出てきたのですが、喫茶店にもいらっしやらなかったし心配していたんですよ。」

小野原に気づいた香山の方から声をかけてきた。

「いやあ、別の不動産屋に行つてたのですが、急に声をかけられてドギマギして逃げて来たところですよ。香山さんが神様みたいに思えましたよ。やっぱり英語を勉強しなくっちゃいけませんね。」

小野原がほつとして言った。

「ははは、そうでしたか。これは良さそうな客だと判断されたのでしようね。よかったじゃないですか。じゃあこれからちよつと買い物にでも行きましようか。」

二人は車に戻り、大きなショッピングセンターへと入った。

「ここでは日本食料品を買うだけですから。一緒に行きましょう。」
駐車場に車を入れ、香山が先に立つて歩き出した。

「へへこんな店もあるんですね。でも結構値段はしますね。」

小野原は頭の中で表示されている値段を日本円に換算しながら店内を香山にくつついて廻った。

「大きな声じゃ言えませんが、郷にいれば郷に従つて食生活を考えればずつと安く生活は出来るのですが、やはりこんな店が出来て商品が並んでいるとなるとやはり買いたくなるものなんですよ。わたしが来た最初の頃なんか、こんな店は一軒も有りませんでしたから大根やゴボウ、野菜類は庭で栽培もしましたし、魚を釣りに行くの大抵は大漁で帰つてきますので、白身をつぶして蒲鉾を作つたりもしましたよ。そうそう、豆腐が非常に食べなくなつた事がありました、仕方なく化学実験みたいにして自分で作りましたよ。実際便利にはなりましたが、貧乏に拍車が掛かつた事は否めませんなあ。ははは。」

香山は言いながら店員にも挨拶している。

買い物袋を車に積み込んで香山が言った。

「おっと、忘れるところだった。もう一度引き返しましょう。小野原さんにここの本当の物価をみてもらつてもりだったのです。」

二人はショッピングセンターの中にある大きなスーパーマーケットに入った。スーパーマーケットは小野原には大きな倉庫に入ったかのように思えた。その展示は高い天井まで届くかと思うほど高く品物がラックに積み重ねられている。日本のように総ての店内が見渡せる訳ではない。

「どうです、やっぱり安いでしょう。」

香山が振り返って言った。

「そうですねえ、たまにわたしもスーパーに買い物に出掛けますので、結構物価には詳しいんです。でもこの肉なんか9ドルって、800円ぐらいでしょう。そんなに安くは無いですよ。日本で買ってもオーストラリア産で350円ぐらいかな。」

小野原が香山に指さして言った。

「あっ、それは値段の表示が違うからですよ。こちらの表示は総てキログラム表示なんです。御覧なさいうしろにkgって書いてあるでしょう。だから日本の価格表示で考えると80円ですよ。」

香山が価格表示のプレートを指さして言った。

「なるほど、そう言われてみると安いんですね。」

小野原もそう聞いてから他の品物にも眼を移して見た。

「でもねえ、日本から来た当時は何でも安いと感じていましたが、住み着いてみると、あそこが安い、ここが高いと、結局は考えの基準がここになってしまえますから一緒ですけれどね。比べる事は日本が対象じゃなくなりますから。」

最後に、はははと笑いながら香山が締めくくった。

「さて、いよいよ恐竜に向かいましょう。」

と香山が車を走らせ、彼の山小屋の有るといふダルビーへと向かった。

「ここから約300キロあります。途中ツウンバと言う大きな内陸の町がありますが、その手前のガットンと言う町で小休憩をします。野菜類が安いんですよ。丁度中間地点です。」

ブリスベンまで続く8車線のモーターウェイを北上し、途中から4車線のイプスウィッチ・モーターウェイに方向を変えた。

「オーストラリアでのハイウェイは大抵無料ですが、ここを含めて3箇所だけに有料道路があるんですよ。まあ別に橋の有料なんかも入れるとまだまだ増えますが。でももうすぐ判りますけれど通行料金は日本に比べると本当に安いんですよ。」

話す内に香山は車のスピードを落とし、初めての料金所へと入った。続いて走ってきた数台の車が右側車線をスピードも落とさず料金所を走り抜けていく。香山は平然と料金所のおばさんに挨拶をしながら小銭を手渡した。

「たった80セントですか。70円弱。本当に安いですねえ。」

小野原がビックリしたように言った。

「そうですね。でももう一箇所ありますからね。そこはもっと高いですよ。確か1ドル80セントだったかな。」

香山が笑顔で言った。

「それにしても安い。ゴールドコーストからダルビーまで300キロでしたよね。その通行料金が2ドル50セントとはねえ。料金所のおばさんの給料が払えるのかな。」

小野原が計算しながら感心したように言った。

「ははは、それは心配ないですよ。」

「ところで、我々の車よりうしろから来た車が料金を払わなくてそのまま走って行きましたがあれはどうなっているんです？」

「どうも気になっていた事だが、聞いても旅の恥はかきすてだと小野原が聞いてみた。」

「あっ、あれはねえ、前もって登録して前金を払っているんです。あのゲートをくぐった時にコンピューターがどの車かを選別して残高から引き落としてくれるんですよ。僕も使おうかなと思っただんですが、そんなに回数を走る訳でも無いから必要ないと思ってやめたんです。」

「へえ、そんな事ができるんですか。世の中、進んでいるんですね。」

え。」

小野原は説明を受けても実際には理解ができないのだが、コンピュータの勉強を初めてからと言うもの、その便利な使用方法を色々々と話に聞く度に感心させられる事ばかりであったので、これもその内の一つと考えた。

途中で耳の中が幕を張ったようなツーンとした感じを受け、車はいつの間にか大きな町の中を走っていた。

「今走っているところがツウンバと言う街ですよ。内陸部の町ではオーストラリアで一番大きな町です。人口も周辺を総て入れると20万人も住んでいますよ。途中で耳がツーンとしませんでしたか。」
香山が町の説明をしながら聞いた。

「ええ、しましたねえ。」

小野原勉は香山も同じ事が起こったんだと安心して返事を返した。
「ここはね、海拔700メートルぐらいのところにある町なんです。途中で気圧が変化して三半規管を圧迫されますからねえ。地図で御覧になったことが有るかも知れませんが、クイーンズランド州の東部を縦に分断しているようにあるグレート・デバイディング・レンジと言って大きな山脈の上にある町なんです。今はその町の外側を走っています、町中に入ると結構大きな町だと実感出来ますけれどね。そろそろ町はずれになります。そこから見渡したところに箱庭みたいに見える景色があります。わたしの一番好きな景色なんです。出来たら景色の見渡せるところに家を建てたいのですが、なにぶん貧乏ですから希望だけですかね。」

車がちょうどそう言う景色のところを走っている。
「この景色ですか。素晴らしいですね。空が大きくて、空気も綺麗ですね。こんなところに住んだら長生きしそうですね。」

小野原勉も感動して最後の方は自分自身につばやいた。

「そうそう、小野原さんは独身と言ってましたが結婚はされなかつたんですか？あつ、こんな事を聞いてはいけなかつたかな。」

香山が前方の景色に目をやりながらふと聞いた。

「そんなことはありませんよ、これから長いお付き合いをして頂かなくてはなりませんので知っていただいた方がいいのです。実は一度結婚はしたのですが、すぐに逃げられてしまいましたよ。まあ、仕事が忙しすぎたのが大きな原因だったのです。」

小野原勉が応えたのに呼応して、以後の車中はお互いの身の上話に終始した。

「まあ、女性に優しさがあつたと言つのはもはや伝説ですな。夫婦が共に過ごす長い時間に比べて婚前の交際は余りにも短い、巡り合うまでは赤の他人だった二人が、一瞬とも言える短い時間にそのパートナーを決めるのですからな。特に見合いの場合は、最初に結婚という契約を交わし、夫婦として同じ屋根の下で生活を続けるうちに愛が生まれることを期待するわけでしょう。男と女は一つ船に乗って長い航海に出ると言う結婚式での仲人さんの月並みな言葉と同じ事ですな。わたしの場合、妻が宗教ホリックでしたから、失敗したと気づいたとき、心の根底に彷彿と沸き上がったの憎しみだけですか。それも夫婦が怠惰になると憎しみも希釈されますが、同時に相互の関心もなくなりまして、ただ同じ屋根の下に起居してるだけでした。まあそれが大きな原因で、オーストラリアなら遠いから大丈夫だろうと、それまでの仕事も総て諦めてこちらへと住まいを移したのですが、宗教という物はどこまでもついてきて結局は総てをむしり取られてしまった訳です。ある日2週間程、留守にする仕事から家に帰ってきたら、家財道具から総て無くなって、家まで寄付されてましたからねえ。裁判で随分と戦いましたが貧乏人が裁判で勝てる筈もなく。結局、弁護士費用の未払い分として200万円ぐらいの借金が残っただけでした。」

香山が眼の奥をうるませながら淡々と話す事を聞きながら、小野原勉は自分に起こった同じような事よりも彼自体の方が深刻だと思つた。自分の場合、家具類が無くなっただけで家も預金も、退職金

すら残っている。それでもやはり女は恐いと今更ながらに感じた。

「大変でしたね。でもそれから生活はどうされていたんです。」

小野原勉も人ごとではなく思い、心配して聞いた。

「まあ、つまらんことを話してしまいましたな。忘れてください。

お金の事はね。その当時、友人でボブつてというのが銀行の支店長をやつていました。勿論彼はわたしの事情を知つていましたよ、住宅も生活資金も全く無いのですから、可哀想に思ったのでしよう。あの日こんな家があるから買えと言つてきまして、わたしが金もないのに買えるものかと否定しますと金は何とかしてやると言つんです。家を買うとなれば家具も必要だし云々言ひまして見積書を書き増したり色々と手を使つてくれて家の購入資金と弁護士未払い金総てをクリアーしてくれたのです。毎月の支払いなんか数ヶ月間は融資金の残りで支払いされていましたが、収入もない預金もない。最初から不良債権ですよ。でも数ヶ月後に売りに出しますと結構相場が上がつてまして500万円程が手元に残りました。その金で又次の家を買つて売り、又次の家と言うふうにして何とか今後の生活が出来るとな蓄えを作ることが出来ました。御陰でこんな田舎ですが土地も買ひ小さな小屋も建てる事が出来て恐竜掘りが始められたのです。まあ国からの補助も月額3万円ほどありますからね。」

香山が立ち上がつて

「コーヒーでよろしいかな。」

と聞いて、食卓の隅に置かれたパーコレーターに水を入れ始めた。

ここ香山の小屋と言われて来てみたが、平原の中の小さな森の中だから山荘と言つてもいいだろう。

最初に車2台分のガレージを建てた時に、内山耕太君と言う若い人が手伝いに来てくれた以外は総て、香山さんが一人で建てたそうだ。その建物に台所やトイレなどを順次増築していったそうで、トタン貼りの所や板張り、ログ組みなど材料も工法もバラバラでまともではないが、80平方メートル程の室内と60平方メートルのベ

ランダがある。3メートルもの柱の上で梁を通すときなど、ロープで片側を持ち上げ、反対側を担いで梯子を昇り、釘付けをしていくそうだが、梁を柱へと釘打ちする段階で固定できていない柱が傾き、梁が落ち共に香山さんも落ちた事などを含めて3度も最高の高度から道具と共に落ちた。一時期落下してきた幅6メートル高さ2メートルの鉄製屋根枠で臍を打ち、右足が痛みで動かず、しかもその時食料の買い出しに左足だけでマニユアルギア車を運転して町まで40キロを往復したなどを聞き、小野原勉もビックリさせられた。

コーヒーの良い香りが室内にたゆつてきた。

「わたしもコーヒーには目がなくなりまして、最近ではブルマンの細引きを愛飲しているのですよ。この香りはよく似ておりますね。」

小野原の言葉にうなずきながら香山が言った。

「わたしも昔は結構銘柄やメーカー、粗挽き、細引きと、色々凝ったことが有りましたが、最近ではインスタントよりましかなと言った感じのものしか買えませんから。さてお口に合いますかな。まあそれでもこちらは日本に比べたら五分の一程でコーヒーなんかは買えますから、入れ方によればインスタントより安く飲める場合もありますからね。さあどうぞ。」

テーブルに香山が二つのマグカップを置いた。そのカップから立ち上るほのかな湯気に釣られて立ち上る芳香が何とも言えない雰囲気醸し出す。

「どうです。これは本当に安物のブレンドですが、案外いけますよ。」

「香りはいいですね。じゃあ頂きます。」

「ところで、ずっとわたしの事が大半話しのぼりましたが、小野原さんは警察官退職前から恐竜には興味を持たれていたのですか。」

マグカップを両手ではさみ、その暖かさを楽しむようにして香山が聞いた。

「いえいえ、警察官なんて24時間勤務みたいなもので、ましてわ

たしらの時代は最初の頃はがむしやら時代で、あとになると警視庁も方針が変わり、グループ行動や機械化が進みまして、いわゆる科学捜査と言うものですが。捜一、捜査一課の事ですが、昔のように足で稼ぐという事が少なくなりまして、でも基本は足なんですけどね。ただ犯人を追及して足を棒にして歩くのです。事件を担当した段階から実質24時間勤務に入りますから趣味何てものには全く縁が無い仕事でした。餌をやる暇も有りませんが。わたしの場合は一もまあ、家族持ちは飼っている人もおりますが。わたしの場合は一人ですから何も出来ませんし、そんな事を考える事もしませんでした。だから恐竜なんて全く無縁のもんですよ。たまたま、暇つぶしに恐竜展を見に行つて興味をかき立てられた訳で、知識のかけらも持つてはおりません。インターネットを始めて約1ヶ月の間、香山さんを始めいろんな人からの聞きかじりですからね。でもね最近の子供達は凄いですねえ。子供達から学ぶことが大きかったですよ。わたしも今になって子供の一人ぐらい有ってもよかったですかなと思います。」

小野原が最後の言葉を濁すように言った。

「又々、我々の話は最後には家庭や妻の愚痴に落ち着きますなあ。よしませう。さあ、明日は早めの出発ですから、それを飲んだら休んでください。」

香山がベッドを片づけて寝られるようにセットをしてくれた。さすが独身者だ、手際が良いと小野原勉はマグカップを片手に、それを眺めていた。

「小野原さん、言い忘れましたがウイントンはここより遙かに寒い所ですから、ベッドの下に敷いていた電気毛布を取り外して持つていきませう。貴方の分はやっていただけですか。」

朝食が終わり、食器を洗っている香山が肩越しに言った。

「そんなに寒いところなのですか。判りました。」

小野原がそれを外し丸めて車にと積み込む。移動が多いので出来

るだけ少ない荷物にしてくれと香山氏に言われていたので、日本を出るときに用意したバッグを整理して、寒さ対策を施し、それも車へと積み込んだ。香山氏は朝食の残りを含めて、2週間を留守にするので食料を整理し、途中の弁当を作っている。

「随分と器用なんですね。」

小野原がうしろに立って言った。

「まあね。こんな所じゃ、好きなものを好きな時に食べられるようなレストランなんか有りませんからね。しかも貧乏ですから外食は論外ですよ。3食確実に自分が作りますから料理の要領だけはお手の物になりました。これも逆に考えれば愚妻を持った成果ですか。いかに、いかに、またこの話しになる。」

香山が頭をかきながら言った。

「まあ良いじゃないですか。ところでわたしの分は全部積み込みました。香山さんの分も言ってくれば車に積み込みますよ。」

「ああ、ありがとう。でもこの弁当ぐらいで、恐竜掘削の7つ道具はいつもトランクに入れてますから、そうそう、冷凍庫から凍っているペットボトルをその発泡スチロールに入れて後部シートの床にでも置いてください。冷蔵庫の中の飲み物も総てな。貧乏がうたい文句のわたしですから、不要なものに金は出せません。電気も切って行きますから。」

小野原は香山の言葉を聞いて、徹底した儉約をしているのだと実感した。自分はと考えてみた。こうやって半月も出掛ける為に、冷蔵庫の中は勿論空っぽ。でも電気まで切っては来なかった。そういう意味ではまだ、香山氏に比べて生活のゆとりはある。でも彼のこの優雅なゆとりを持つての生き方は、大きなゆとりではないだろうか。見渡す限りの土地が彼の物だし、家も一人で生活するにはゆとりがある。時間と共に生きてきた自分には無い何かがここにはある。いつそのこと俺も真似をしてこちらへと移り住んでもいいな。日本で居ると未だに誰を見ても犯罪者に見えるし、考えてみればここへ来てそんな自分の目がうせている事を知った。

「さあ、出来ましたよ。これを積み込んで終わりです。じゃあ、ちよつと着替えて行きましょう。」

と香山が言つて厚手の衣服に着替え、同じような物を無造作にバッグに放り込んだ。その間小野原は言われたように総てを積み込み山荘の前でタバコを出した。オーストラリアへ来てから吸う本数が極端に減っている。これも身体には良いかもなとつぶやいた。

「さあ、ここからはずっと片側1車線ですが、かなり飛ばしますよ。」

香山が言つてエンジンをかけた。

「本当はねえ、こんな乗用車じゃなくて4WDが一番良いのですが、そんなお金は逆立ちしても出ませんからねえ。」

「舗装道路を走っていると4WDなんか要らないのじゃないのですか。」

「いやいや、今からウイントンまでは完全舗装道路ですが現地へ入る道が約100キロほど未舗装なんです。まあそれよりか、世界中どこでも舗装道路添いになんか恐竜は寝て居ませんからね。」

「ははは、なるほどそうですね。」

香山の運転は安定したものはあるが、何しろスピードが速い。交通量も少ないのだが150キロぐらいは平気でアクセルを踏む。

「香山さんは日本でも運転していたのですか。」

小野原がスピードの違和感を抱いた時に聞いてみた。

「ええ、だいたい毎日乗っていましたね。東京に居た最後の1年、車を持つてはいましたが電車の方が便利が良いし、その間だけですかね、乗らなかつたのは。」

香山が前を向いたまま答えた。

「そつだ、ちよつと聞いていいですか。もしわたしがこちらに住みたいと考えたらどんな手続きを踏んだらよいのでしょうか。」

車は順調に目的地へと向かつて近づいている。その日も夕方が近くなつてきた。小野原は頭の中で醸成していた考えを言葉に出して見た。

「それはねえ、色々と難しい問題を含んでいますよ。でもまあ、小野原さんの場合はリタイアメントビザの申請が出来るかも知れませんがね。外国ですからビザ無しでは住めませんからね。この旅行が終わったら一度、ブリスベンかゴールドコーストの弁護士に聞いて見るのが良いですよ。わたしは専門家じゃありませんから。そろそろ今日のねぐらを決めなくてはなりません。次の町で泊まりましょうか。」

香山が言った。

「ええ、それはどこでもいいですからお任せします。なるほどビザが必要なのです。忘れていました。2週間後にもう一度ゴールドコーストへ帰ってしばらく研究してみます。」

車が一軒のモーターの駐車場へと入った。

「こんな時期ですから、部屋は有ると思いますが、とりあえず聞いて見ますね。」

香山が言うやいなや、ドアを開けて出ていった。

「参ったなあ、一部屋しかないそうなんです。次のモーターまでは約100キロですって。どうしましょう、相部屋でもかまいませんか。」

車の外側から香山が小野原に聞いた。

「なんのなんの、良いですよ。ここにしましょう。」

香山がインフォメーションと書かれた事務所へととって返したので、小野原はバッグなどの荷物を取り出した。

恐竜発掘現場と言っても普通の牧場だ。馬小屋か倉庫を改良したように見えるロッジに車は停まった。既に数台の車が先着して停まっている。

「とりあえず着きました。お疲れさまでした。荷物は部屋が決まっていますからにしましょう。」

と言って香山が先に立ってロッジに向かって歩き始めたので小野原が慌てて続いた。そこには既に10数名の小野原勉から見たら外

人の姿が見受けられた。それぞれが相手を見つけてビールを片手に賑やかに話している。香山がロτζジのオーナーに手を挙げて近づいた。

「はい、エリオット。今回もよろしく。彼がミスター・小野原です」と紹介された。伸ばされたごつごつした大きなグローブ見たいな手を握り返し、小野原も勉強したてでうる覚えの英語で挨拶を返した。

「まだ、アレックスは来ていないのかい。」

香山がエリオットに聞いた。

「彼は、たぶん、今夜の夜中に着くと思うよ。まあ明日から頑張つてね。さあ、そこにある飲み物もビールも食べ放題飲み放題だからそっちも頑張つて。二人ともね。」

エリオットに言われて二人はテーブルに近づき、それぞれと挨拶を交わしてビールを手にした。

「小野原さん、さつき結構綺麗な英語で挨拶されたじゃないですか。ゴールドコーストで不動産屋にウソをつきましたね。」

香山がからかうように言った。

「えっ、あの時は心の準備もない時に、急に声をかけられたのだから仕方が無かったのです。」

「でもね、あの時、わたしは英語を話せませんって、英語で言ったでしょう。うそつきじゃあないですか。ははは。」

「あっ、そうか。そう言えば英語でしゃべっていましたねえ。そうなることやっぱりわたしはうそつきなんですかね。」

「まあ、この2週間は出来るだけ一人行動をして言葉の勉強もしてくださいよ。今回は全部で20名が掘削の手伝師だから、わたしを除いた18名が無料の英会話教師ですからね。あっ、でもドイツから来ている人なんかがいきましたね。残念少し先生の数が減りましたね。」

香山がビールで顔を赤らめながら言った。

「そうですね。言われたように頑張つてみます。じゃあ手始めに、

特攻隊員として食料の調達に行つて参ります。」

小野原勉が気持ちを引き締めるように背筋を伸ばしてテーブルに歩み寄つた。早速数人の人から声をかけられて、伸ばした背筋がゆるむのを香山が笑みで眺めた。

「香山さん。おはようございます。いやあ、昨夜は凍え死ぬかと思いましたよ。今朝も寒いですね。」

洗面所で小野原が言った。

「そうでしょう。言つたとおり電気毛布が必要だつたでしょう。今朝はクック博士が掘削の注意などを食事時に話しますから、わたしの横に座つてください。説明しますから。」

香山に言われ、小野原は歯ブラシをくわえたままうなずいた。

「今日からこの農場の一部で恐竜掘削を開始するのですが、毎日地べたを眺めているのも飽きてくるので、途中でウイントンの恐竜足跡化石を見に行きます。と言つたのです。」

朝食時のミーティングで香山が小野原に説明した。

「あああの香山さんのホームページで紹介している足跡の化石ですね。世界一って書いてましたね。楽しみだなあ。」

小野原勉が言ったがクック博士の言葉は続いているので、香山はアレックスの方を向いたままだった。

「具体的な掘削に関しての注意事項などの話ですから、当初はやはりわたしのそばでやり方を見てください。化石の一部にでも行き当たつたら大小に関わらず博士に連絡して鑑定してもらつようと云つてます。今回は少し新しい場所を狙っているようです。慣れた人達は現在の掘削場所を継続します。2日間はその手伝いみたいに作業をしますが、我々のように素人は別のグループに分けられて、少し離れた所を掘るらしいですよ。」

香山がその都度横で説明をしてくれる。実際クック博士の言葉は100パーセントの確率で小野原勉の頭には入つてこなかった。食事が終わつて香山に言つと

「カタカナで覚えた恐竜の名前なんか使えませんからね。専門用語もふんだんに入っていますからそれは仕方がないですよ」

と、言い切られた。小野原勉は何とかして英語の勉強をしたいと心の奥から思った。

「この二日間はきつかった。こんなに体力が落ちているとは思ってもしなかったですよ。それにしても昼間の暑さは夜の寒さからは考えられませんね。」

小野原がウイントンの恐竜足跡化石見学に向かうマイクロバスの中で言った。実際、この二日間は土運びに終始したようなもので、金を払って土方をさせて貰っている感じだった。

「まあそんなものですよ。でもねもし、何か発見したらその疲れなんか一度に吹き飛んでしまいますから、楽しみに続けましょうよ。今日一日観光みたいなものですから、明日からの宝探しに期待をしましょう。」

香山が慰めるように言った。

「それにしても、本当に骨が出るんですね。自分でも信じられないぐらいですよ。二日間で50ぐらいは掘り出したでしょう。」

「そうですね。結構掘り出していますね。もう、あのブラキオサウルスは1000パーツぐらい出ているのじゃあないかな。あっ、もう着きますよ。」

車が大きく傾いて方向を変えた所で香山が言った。

小さな小山の上に駐車場が作られていた。そこに入場券売り場とトイレが造られていた。建物はまだ新しい。その入場券売り場から真っ直ぐに少し昇り勾配気味の長い陸橋が付けられてメインの大きな建物へと導かれている。雰囲気は万博などの通路を小さくした感じだった。客は我々の団体だけだった。

クック博士を先頭にして我々はそろそろと歩いた。天井の高いパビリオン風の建物の中へ入ると暑い外気が遮断され、ややひんやり

と肌を感じる。揭示されている物を見ながら小野原勉がそつと香山に聞いてみた。

「こんなに大きな建物に客も無いのに冷房しているんですね。」

「あつ、ここは冷房じゃないんです。途中で説明を受けますが、日本の土壁方式と同じなんですよ。うまくできてますね。だから一年中だいたい26度ぐらいで安定しているそうですよ。」

全員を二組に分けて、我々は後発組で内部へと入った。500坪程の内部で3300もの足跡が思っていたよりも鮮明に残っていた。説明に依ると、このウイントンでの恐竜足跡化石は1960年代にクイーンズランド博物館と陸軍によって発掘され、この足跡化石は世界最大のもので学術的にも評価を受けておるそうだ。3300もの足跡は4種類200体以上の恐竜達のもので、この足跡化石から9300万年前の恐竜達のドラマが考えられると言うのだ。小さな足跡が3種類と大きな足跡が1種類。3種類の恐竜足跡が一番顕著で、一番小さな足跡はコルロサウルス(*coelurosaur*)で、お尻までの高さが13~22cm。一番多くの足跡を残しているのがニソポッドダイナソア(*ornithomimidinosaur*)で、これのお尻までの高さは12~70cmだそうだ。そして3番目の大きなタイプは肉食恐竜ティラノサウルスで、足跡の大きさは60cmもある。だからお尻までの高さも2.6mもあったと推定される。敷地の傾斜角から言って水際に小さな恐竜達が水を飲みたに団体で来ている所へ大きな肉食恐竜が襲って来たと言いた。足跡の間隔と足跡前部のへこみ程度から走るスピードが判るそうなので肉食恐竜に襲われている光景が判るのだそうだ。

小野原勉は考えていたより遙かに感銘を受けている自分を感じた。その後10日間程は右も左も判らないなりに、小野原は楽しみながらあちらこちらを掘り、みんなが話している内容もかなり判るようになってきた。いよいよ明日は帰らなくてはならないと言つ日、今夜は全員がロビーに集まり、お別れパーティをする朝食時に言われた。この時、小野原勉は香山の通訳無しに聞き取れた。

「香山さんが言われるとおり、言葉って慣れですね。」

「どうしたのです。何か良いことでもありましたか。」

小野原勉が香山の掘っている現場の横へ来て言ったのに香山が答えた。

「ええ、今朝のミーティングはかなり言ってる意味が判りました。考えてみたらもう2週間英語ばかりだったからねえ。そうそう、今日は最後の日だからちょっと新しい所に挑戦してみますね。」

「それはよかったね。」

と言う香山の言葉を背に小野原勉は数歩そこから離れたところで石につまづいた。

「こんな小さな石につまづくなんて、俺も歳かな。」

小野原がつぶやきながらしゃがんでその石を見た。この2週間で何かそれらしき物を見ると必ず観察する習慣が身に付いたようだ。

「あれっ、小さくないな。根っこがはえているな、この石は。」

小野原勉がつぶやきながら、ホツキングハンマーでその石の周辺を掘り始めた。周辺を掘ると言っても土は乾燥して砂漠化しているから深さ10センチ程は、いとも簡単に砂を取り除くことは出来る。

「これは、みんなが掘っている骨の化石じゃあないのかな。香山さくん、ちょっと見てくれますか。」

小野原勉がつぶやきながら、最後には近くに居る香山を呼んだ。

「どうしたのですか。何か見つけましたか。」

香山が近づいてきて腰を降ろした。

「これって、骨じゃないですか。」

香山が小野原勉の指さす石に目を移した。小野原が見ている内に香山の顔に赤味がさし、

「やった。やったじゃないですか。小野原さん、これは骨ですよ。しかも、みんなが掘っている場所からかなり離れていますから、確実に別の恐竜ですよ。」

小野原の肩を叩き、手を握って言葉を繋いだ。

「何かを見つけたら必ずクック博士に連絡をする事になっていますが、もう少し探して見ましよう。もつと出てくるかも知れませんが、僕も手伝いましよう。」

そう言つて香山は自分の道具を取りに行った。

「よく見てみたら、あそこにも何か出つ張りがありますよ。」

小野原が帰つてきた香山に1メートル程先を指さして言った。

「そうですね、でもとりあえず最初のこれの表面を見てみましよう。」

と言つて香山がブラシで周辺の掃除を始めた。

「小野原さん、これはブラキオサウルスの尻尾の骨ですよ。この角度から言つと結構深い方向に続いていますね。とりあえずこのまま左右の砂を取り除いてください。私はデジカメを取つてきますから。」

香山が現場事務所かわりに設置されているキャラバンカーの方へと走つていったので、小野原は言われたように骨の流れに沿つての砂の取り除きを始めた。

香山が帰つてきて骨の撮影と記念撮影をしてくれた。

「1メートルぐらい離れたあれも掘つてみますか。この方向から言えばあれも尻尾の続きかも知れませんか。」

「そうだなあ、でもこの角度から考えると下に向かつているから何か違う物かも知れませんが、やってみて下さい。わたしはもう少しこちらを掘つてみますね。もう少しやってみたらクック博士に連絡しましよう。」

香山が掘り始めたので、小野原も思つた所を掘つてみた。

「香山さん。やっぱり同じ物ですよ。続いているんです。」

「じゃあ、尻尾は土の中でS字を書いているんだな。方向はそつちに向かつて胴体があるみたいですよ。よしこれで新しい恐竜がここに眠っている事が確実ですよ。よかったですねついにやりましたよ。小野原さんおめでとうございます。」

香山に言われて小野原にも感激が沸き上がってきた。

「さあ、博士に言っただけで来て下さい。私は続きを掘っていますから。」

「えっ、私が行くのですか。」

「そうですよ。小野原さんが発見者ですからね。」

「でも、何て言えば良いんですか。英語でしゃべらなくちゃならないでしょう。」

「何を言っているんです。さっき英語は慣れだつて言っただけでしょう。大丈夫。新しい骨を見つけたと言えばいいだけですから。」

香山に言われ、それもそうか、とりあえず行ってくるかと小野原は博士を捜して走り出した。

キャラバンカーに行くと言ったので、近くの仲間にも聞いた。言葉はよく判らなかつたが指さす方向に数人が作業をしているのが見えた。

小野原は一生懸命、博士に説明する。ミスター香山がブラキオサウルスの尻尾だと言うのを説明するのだが、何故か通じていない。新しい骨だと数回繰り返し返して、自体の重大さが感じられたのだろう。博士が立ち上がって行こうと言ってくれた。

「おっ、やったな。ロングラッチュレーション。おめでとう。」

と一目見て博士が小野原勉の手を握ってくれ、抱きついてくれた。そのご博士は出せる限りの声を張りあげて言った。

「おゝい、新人が新しいブラキオサウルスを見つけたぞ。みんな集まれ。」

その声を聞いて全員がゾロゾロと集まってきた。

「やったね。」

「おめでとう。」

「凄いな。」

「ラッキーボーイだ。」

みんながそれぞれの言葉で賞賛してくれ握手責めにあつた。女性からは総て抱きつかれ一人の女性からは頬にキスマで受けた。

「さあ、みんなも今日が最後だから、この小野原さんの手伝いをし

よう。」

博士の提案で全員が一旦それぞれの持ち場に帰り、道具類を持ち寄って手伝いにやってきた。本格的な掘削現場に成り変わった感じだ。香山は至る所から写真を撮っている。

「私は何をしたらいいんでしょう。」

20人も集まったので小野原はする事がなくなってしまった。香山が近づいてきたので聞いてみた。

「そうですねえ、じゃあ、写真は撮りましたから、あなたはこの紙に骨が土の中にある状態で写生をしてくれますか。重要書類になりますから。」

香山がキャンバスとグリッドラインが引かれた紙を手渡してくれた。これも初めての経験だ。

夕食時は小野原勉を中心とした祝賀パーティーだった。先に掘っているブラキオサウルスは26メートルもあるが、今回小野原が見つけたものは比べると少し小さくて、博士の言葉では21メートルくらいだろうと言う。

名前を付けると言われたが、先輩達をさしおいてでは、はばかれるとおもいそれは断ったので、博士の名前を付ける事になった。御陰で博士が小野原を賞賛する声に力が籠もっていた。

「それにしても、よかったですねえ、初めての参加で新しい恐竜を発見するなんて。羨ましいなあ。」

かえりの車の中で、香山が余韻を奥に残したように言った。

「本当にラッキーでしたよ。あんな所で、つまずかなければ見落としていましたからねえ。犬も歩けば棒に当たる、私が歩けば恐竜につまずくですか。でも、やっぱり英語は勉強しなくっちゃいけないですね。今回でよくわかりました。」

小野原も実際、昨夜のパーティーから余韻が引き続いている気持ちを持って余しながら言った。

「ははは、小野原さんが歩けば恐竜につまずくですか。こりゃあいや。」

香山がハンドルを握りながら苦笑しながら言った。

「今回生まれて初めて外国で半月間を生活し、生まれて初めて恐竜掘りに参加し、更にそこで新しい恐竜に巡り会えるなんて、私にとつてここオーストラリアが第二のふるさと見たいに思えてきました。そこですね。香山さんの山荘で話したようにやっぱりこっちへ住みたいと思うんです。私は独り者ですから、自分で決定が出来ますからね。そこでビザや住宅なんかの世話を香山さんをお願いしたいのです。お願い出来ますかね。」

小野原が言った。

「それは良いことですね。わたしも日本人で恐竜仲間が増えるのは大歓迎ですよ。でもね東京の大会から一挙に我が山荘のような所に住むというのは、100パーセント無理ですよ。日本のK大学から送り込まれた学生なんか研修で来ても1日しか辛抱できませんでしたからねえ。だから、家を持つのはゴールドコーストにした方が小野原さんの為には良いのではと思いますよ。ゴールドコーストなら結構日本人がおりますから、中には頼りになる人も居るかもしれませんよ。」

香山が言ったが、その言葉に少し不審が残った。

「なんですか。なかには頼りになる人がおるかも知れないと言うのは。」

「ああ、わたしも結構長くゴールドコーストに住んでいましたので良いも悪いもだいたい判つてきましたね。日本人と言う人種に辟易する事が多々ありましたからねえ。だから私の友達は現地人ばかりで、1、2人の日本人しか付き合っていないから。」

「そんなものですか。誰でも香山さんのように親切な人ばかりかと思っていました。その辟易つてのは少し、参考に聞かせて貰うわけにはいきませんか？」

小野原が真剣に聞くので香山も一応聞かせて置いた方が良いと判

断して話した。

「まあ、隠す事なんて無いのですが、実際、日本人というのにはねたみ、そねみ人種ですし、うわさを作る技術に随分と長けておりますからね。まあ問題と言えばそんな単純なものですがね。小野原さんみたいに金持ちだと、通訳や弁護士に騙されないようにしてくださいます。言葉が判らないと見られたら奴らは何をするか判りませんからな。」

「へへ弁護士って言えば、それなりの人がそれなりの頭をもっていて、思っているつもりでしたが、そんな人間もいるのですか。」

「まあ、中には居ますと言うことです。ある大学が経営難でつぶれかけた事がありました、その時多額の寄付金を出して、論文だつて金で買ったと聞くような息子を卒業させて貰ったという人間がおりまして、こちらの大学で法学部を卒業したら弁護士ですからね。英語も余りうまく話せない弁護士ですから。でもこちらじゃ法廷弁護士と事務弁護士と言うのがありまして、彼はもっぱら事務弁護士ですが、親が金を出して弁護士を数名雇った弁護士事務所を出しましたから。今じゃ堂々たる弁護士ですよ。まあ一つの例ですけどね。」

「そんな事が出来るのですか。まあもっぱら日本では医者の子にそんな話を聞きますがね。じゃあそれは参考にさせてもらいます。その香山さんの友人を紹介して貰う訳には参りませんか。」

小野原もそんな話はあると納得した。

「ええ、それは問題ないと思います。でもその人はごく最近にリタイアメントビザでこちらへ来た人ですから、ビザの事を聞く事が出来る程度ですよ。小野原さんを送ってわたしもゴールドコーストまで行きますからその時に会いましょう。ところで小野原さんは車の運転はできますか。」

「ええ、パトカーの運転はしていましたから。替わりましょうか。」

「それなら、いっそのこと2000キロを交代で走り続けましょう。宿代の節約ですよ。どこかで夕食を摂って、そこからお願いします。」

ね。」

香山が言った。

「ええ、良いですよ。ところでその香山さんの友人は何をなさっておられた人ですか。」

「佐々山さんと言つて、ある大会社の役員さんだった人ですよ。どちらか言つと経営肌の人じゃ無くて、技術肌の人で堅い人物です。信頼のおけるひとです。わたしは自分の会社を切り回して居ましたから人間が経営肌の方に変わってしまったんですが、元々は大学も電気を出ていますから技術屋なんです。まあだからと言つて訳では無いのですが、柔らかい考え方をするようになりましたねえ。」

「そうですか、それは楽しみだなあ。」

「そうそう、昨夜はドンチャン騒ぎで眠られなかったでしょうから、イスを倒してちよつと休んでください。あとで運転を代わつて貰わなくちゃなりませんから。」

香山に言われて、かみ殺していたあくびをして小野原はそれじやと軽い寝息を立てた。

「やっぱり二人で交代の運転だから早かったねえ。ウイントンを出たのが9時過ぎだったから20時間でここまで走つてきましたよ。もう1時間程でゴールドコーストに着きますよ。」

香山がハンドルを握りながら小野原に言った。

「2000キロを20時間ですか。平均時速で100キロ。日本じや考えられませんね。最初、香山さんが一息に走りましょつて言われたとき冗談かなと思つた程でしたが。」

「でも、わたしは更に400キロぐらい離れたリッチモンドと言う町まで化石を掘りに行きました。帰りに2400キロを26時間で一人で走りましたからね。泊まっても泊まらなくても距離は一緒にガソリン代も一緒でしょ。ゴールドコーストの家に帰れば寝られる。途中で泊まると宿代が要る。貧乏は強いですよ。ははは。そうそう今度SBSテレビではNHKのニュースをやっていますから、佐

々山さんは起きていますでしょう。6時に終わりますから電話を入れて、彼等の予定を聞いてみましょう。すみません、後ろのわたしのバッグから携帯電話を出してくれませんか。」

香山に言われて小野原は後部座席に身体を乗り出し、言われた携帯電話を取り出した。

「そうだ、わたしも一つ持った方が良いですね。」

「それは言えてますね。ここは広いですから絶対に必需品ですよ。それに車も絶対に必要です。レンタカーと言う手も有りますが、その都度では経費もかかりますし、ちよつと買い物や出掛けるにしても、ここは電車も無いですしバスはいつ来るかも判りませんからね。あと、住まいですが、外人の場合は中古住宅は買えませんから新築しか手は有りません。新築となるとサーファーズ近辺のハイライズか20分程車で走るあたりの新興住宅地の分譲ぐらいしかありませんから。どちらにしても電話と車は必要です。あつと、6時になりましたからちよつと電話を入れてみますね。」

香山はそう言ってモーターウェイの端に車を寄せた。

「あつ、佐々山さんおはようございます。はい、香山です、今、そちらへと向かっている最中ですが今日の予定はなにかありますか。」香山が電話に向かって話している。しばらく話し終わって小野原に向かつて、

「小野原さん、今日は何も予定がないそうで、今から来れば朝食に間に合うと言われましたので急ぎましょう。」

一般車線に車を戻しながら言った。

「えっ、わたしも御一緒するのですか。」

「何を言ってるんです。貴方に合わせるために走って来たのじゃありませんか。さあ急ぎましょう。メニューは何かな。彼の奥さんの料理は最高ですよ。わたしはいつも言うんです。佐々山レストランってね。」

「へえそれは楽しみですね。」

話しているそばから馴染みになったゴールドコーストのビル群が

見えてきた。車はその一つの駐車場へと滑り込んだ。

「あつと、腰が立たない。あ痛たたた。」

香山がつぶやきながら腰をさすりさすりして運転席から降り、ドアに持たれて屈伸運動をし始めた。小野原も真似をして屈伸運動をした。背伸びをすると空に高くそびえるハイライズの偉容が眺められた。中頃の階のベランダから人が顔を覗かせている。数えてみたら15階程だ。と言う事はこのマンションの高さは30階以上ある事になる。

「長時間運転席に座ったままだと今のように腰が立たなくなるんです。やっぱり歳かなあ。さて、腰も治った事だし行きましようか。」

香山が先に立って腰を叩きながら玄関へと歩き始めたので小野原も従った。

「朝早くから押しかけてきて申し訳ございません。奥さん、すみませんねえ、朝ご飯まで無理をお願いしまして。」

佐々山邸で二人が食卓に着いて香山が佐々山氏と台所に立ってみそ汁を温め直している奥さんに等分に声をかけた。

「で、この人は小野原勉強さんと言いました、佐々山さんと同じく東京の方です。今度日本からこちらに住みたいと希望されていますので、先輩の佐々山さんにお引き合わせをしておいたら、色々話を聞かせて貰えるのじゃないかとお連れしたんです。元警察官で今年退職されて時間を持て余しているらしいんです。まあそれは佐々山さんと同じですがね。ははは。」

香山が紹介してくれたので小野原が丁寧にお辞儀をして言った。

「何しろつぶしの利かない仕事でしたから、全く趣味とか遊びとか知りません。でも最近恐竜に取り憑かれまして、今回香山さんの薦めで恐竜掘りに参加させていただいたのです。」

「そうそう、小野原さんは初めての参加で、早速新しい恐竜を発見したのですよ。」

横から香山が話した。

「へえ、それは凄いわね。大きな恐竜？」

奥さんの貴子さんが、みそ汁の碗を配りながら言った。

「そうなんですよ。なんと体長が21メートルですよ。」

香山が答えた。

「そりゃあすごいや。そんなのを発見したのは日本人じゃ貴方が最初じゃないですか。」

佐々山が箸をとめて、ビックリしたように言った。

「そうなんですかねえ、まだその実感が湧かないんです。何しろ歩いていてつまずいたのがその恐竜の骨なんですから、笑ってしまえますよ。」

小野原が恐縮して言った。

「いやいや、そんなに謙遜するものじゃありませんよ。快拳ですよ。そうですか。ところで香山さんは何度も出掛けているのにそんな話を聞きませんねえ。」

佐々山が言った言葉に、みそ汁を喉に詰めたようにせき込んで香山が言った。

「何なんです。急に痛いところをついて来ないでくださいよ。見てくださいって見られないか。みそ汁が鼻に入ったじゃないですか。」

「汚いわあ。はいティッシュ。」

奥さんがティッシュを箱ごと手渡した。

「参ったなあ、わたしは昔からくじ運に見放されていますから、なかなか歩いていてもつまずかないんです。そうだ。判った。」

香山がふてくされたように言いながら急に顔を上げて言ったので全員がビックリして

「何です。ビックリするじゃないですか。何をわかったのですか。」
佐々山が聞いた。

「いやね、最近歳の所為だとばかり考えていたんですが、歩くときの視点が足下から2メートルぐらいのところなんです。昔は100メートルも1キロも向こうを見ていましたかね。そうなんです。だからつまずかないんです。」

香山が説明した。

「そんなことで大騒ぎをしないでくださいよ。」

「いやいや、これは非常に大事な事なんです。恐竜が見つからない見つからないって言う気持ちばかりで、どこを歩いていても、車で走っていても、地面や道路工事で切り取られた斜面の壁ばかり見ているんです。最近どこへ行っても景色が記憶に無いのを思い出しましたよ。特に今は乾燥期という訳でも無いのですが、雨が降りませるので川底を毎週歩いているんです。穴掘りよりか手っ取り早いですからね。川底から見上げる壁は高さが10メートル、底は凸凹だから足下ばかり見て、時たま側壁を観察して骨が突出していないかを見るんです。前を見るのは1パーセントぐらいかな。逆にこれだけ自分の周辺を観察しているとまずいて恐竜を見つける事は出来ない。だからわたしには恐竜を見つける事が出来ない。これが結論です。」

「なんですか。長い話の割には、結論は自分が恐竜を見つけられなかった事に対する言い訳じゃないですか。」

佐々山が箸で香山を指さして言い全員揃って笑った。

食事のあと、日本茶が出た。

「あつ、こりゃいい。ここ半月間はコーヒーばかり飲んでいまして、お茶が飲みたかったんです。嬉しいな。」

小野原がいかに嬉しそうに茶碗をとった。

「あつ、そりゃあ一緒に行った人が悪い。香山さんはコーヒー通だから。何しろこの人はご飯を食べなくてもコーヒーで糖分を補給して生きている人だから。」

佐々山が小野原に楽しそうに言った。

「何を言うんです。わたしだって食事はしますよ。まあコーヒーがぶ飲みはしますがね。まだ知り合って間が無いんですから、先入観を植え付けられないでくださいよ。」

香山がこれもおどけて笑いながら言った。

「香山さんの山荘に泊めて貰ったときに、本当にうまいコーヒーを

御馳走になりましたから、それは判っていたんです。」

小野原が言った。

「えっ、貴方は香山さんの山荘にお泊まりになったのですか。知らなかったなあ。あそこはまだ人間が住める所じゃないと思っていたのに。」

「まあ、ひどいことをおっしゃる。」

佐々山の言葉に、奥さんが制するように言った。

「本当にひどいことを言いますなあ。じゃあ住んでいるわたしは人間じゃ無いみたいじゃないですか。」

香山が口を尖らせて言った。小野原は楽しい会話からこの人達の性質や性格をつかんだ。

「さて、わたしの事を少し話させてください。実はわたしは独身なのです。勿論、一度は結婚しましたが、1年と持ちませんでした。

それ以後は浮いた話しも無く、結局、今まで独身を通してきまして、退職してみても趣味も興味を持つ物も何も無い事に気づきました。でも今更結婚を考える歳でもないの、何かをやりたい、まあ時間つぶしを最初は考えていたのです。でもちよつとしたきっかけで恐竜に興味を見つけ、その御陰でインターネットも始める事になり、今は充分充実しているのです。でもまたこのまま日本へ帰ると同じ事の繰り返しになる気がします。そこでせめてビザのある3ヶ月間をここで住んでみて、将来を見つめる目安を立てたいのです。佐々山さんがリタイアメントビザで来られたと香山さんに聞きましたので、その手続きや方法をまずはお教えいただきたいのです。」

小野原勉が一気に話した。

「そうですね。でも少し先にこちらに来て住んでいるだけで、実際の事は香山さんにお願ひしたら良いのじゃないですか。」

佐々山が言った。

「また、そう言う事を言う。只でさえわたしが恐竜を見つけられないと馬鹿にするくせに、更にその時間をつぶせと言うんですな。」

香山が佐々山に向かって笑いながら言葉を繋いだ。

「いや本当にわたしがゴールドコーストに住んでいるならお世話をしたいんですが、その都度ここまで300キロを走っては来られませんかからねえ。だから佐々山さん。あんたの役目です。先輩なんだからよろしくお願いしますよ。」

「まあそう言うのなら。でもわたしの知ってる範囲は日本人だけですよ。」

佐々山が小野原に向かって言った。

「それは問題ありません。わたしは日本語は得意ですから。」

小野原の言葉に全員が笑った。

「そうそう、まあそれはお二方で話して貰うとして、3ヶ月の残りをこちらで住むと言ってもホテル住まいじゃ大変でしょう。いつそのこと短期で借家を借りられた方が生活を実感出来ますし、費用の節約にもなると思いますけど。」

香山が小野原に向かって言った。

「そうですね。それが一番いいでしょう。でもそんなに簡単に探せますか。」

小野原勉の言葉に佐々山が先に反応した。

「ああそれは簡単。大丈夫ですよ。ちよつと待ってください。」
と言って佐々山がパソコンのスイッチを入れた。

「これ、ご覧なさい。お手軽なのが幾らもサーバーファーズでありますよ。勿論家具付きですよ。これ、これ、それとこれ。」

佐々山がパソコンからプリントアウトした資料を食卓に並べ全員が覗き込んだ。

「これなんかいいんじゃないですか。」

「でもこちらの方が安いよ。」

それぞれが言うのを聞いていた小野原が

「わたしには場所が判りませんから、選んでください。」
と言った。

「いやいや、そういう訳には行きませんよ。じゃあ、佐々山さんこのプリントを下さい。二人で見に行ってください。もし帰って来る場

合は電話を入れますんでよろしく願います。」

香山がテーブル上のプリントを手際よくまとめて立ち上がった。

「今日は本当に突然伺いまして申し訳ございませんでした。懲りませんと今後ともよろしくお願い致します。」

小野原勉も立ち上がって佐々山夫妻に丁寧な挨拶をして、香山に従って辞去した。

ついに滞在がビザ期限ギリギリまでとなった。外国で始めて過ごすクリスマス、迎える新年。何もかも新しい経験だった。

小野原はしばらく住むうちにこの国の人間を分析してみた。勿論歴史が200年しか無い国なので、よその国からの移住者が大半だが、やはり英国人が未だに20パーセントを占めているようだ。だから基本的に英国風の性格が強い。言葉においてもわかりだが、本物の英語とは少し違う。実際小野原勉が日本の学校で習った英語という物は英語のアメリカ方言だから違うのも当たり前の事だが、例えば友達のことをメイトと言わないでマイトと発音する。日にちを現すデイはダイ。小野原の頭の中がこんがらがってしまった。大きなDIYショップへ入った時に山と積まれている品々を見る内に随分と細分化された項目に別れている事を感じた。肉を買うにも種類が肩肉、腹肉、もも肉、尾肉、更に分類されていて随分と迷った。鳥肉にしても鶏から色々ある。日本じゃ鳥肉と言えば鶏を指す。鶏肉と言う言葉はレストランのメニューぐらいしか見なくなった。チキンと言う英語を輸入しカタカナで表示して使う。日本ではこれが完全に定着している。チキンと言う言葉は死んで肉になった鶏の事だが生きている鶏はヘンだったかな。でもDIYショップで聞いたらチキンネットと言う。色々な人と滅茶苦茶な英語で話しているうちにドイツから来たという人間も、フランスから来たという色の黒い人も総ての人がユダヤ人を嫌う。小野原がキリストはユダヤ人じゃあ無いのかと言葉を振ってみたら共に言葉を濁してしまって、話題を変えられてしまった。清濁併せのむのがこの国の性質なのだ

と解釈し半ば納得した。ある日ショッピングセンターで買い物中に佐々山夫妻とばったり出くわした。

「小野原さんも面白い物ですか。」

「ええ、独身者ですからね。」

「僕はこつちへ来てから女房の忠実な運転手に成り下がりましたから、毎回こつちやって荷物運びまでやらされております。丁度よかったです。ちよつとそこの喫茶店でお茶でも飲みませんか。少しはさばらせて貰わないとやっていけませんからね。」

佐々山が誘うので一緒に喫茶店に入った。

「僕はここでお茶を飲んでいるから、君は好きな物を買ってきなさい。」

佐々山さんの奥さんは、にこにこそれじゃあと言い残してスーパーマーケットの中に消えた。

「どうです少しはこちらの生活に慣れましたか。」

佐々山が聞いてきた。

「ええまあ慣れるのには早い方ですからね。でもやっぱり言葉は難しいですねえ。毎日どこかで誰かを捕まえて話をするように心がけておりますから、度胸だけは人一倍付きましたかねえ。覚えた筈の単語が会話になると出てこなくて、別れたあとで思い出したりします。やっぱり歳のせいですかねえ。」

小野原はかなりの自信を身に付けはじめていたが、やはり日本人同士となると謙遜して言葉を選ぶようになる。

「へえ、毎日英語で話しているのですか。凄いですね。僕らは夫婦ですし、仲間が日本人会ですから毎日日本語で話しますので全然英語がうまくありませんよ。ところで香山さんとは連絡をとられておりますか。」

「ええあれから二度ほど連絡をしました。ビザが取れ次第に香山さんの土地に小さな小屋を建てさせて貰う話をしようと思っっているのです。まあビザがどうなるかは判りませんのでねえ。佐々山さんに紹介された熊谷弁護士が力を入れると言うのですがお金の話ばかりか

りでどうも信頼がおけないのです。まだ書類にサインをした訳でもないのですが不安なのです。」

「香山さんもあの弁護士は駄目だと言つてましたが、僕は彼しか知りませんからね。まあ僕も最初に会つた時は彼が弁護士だと言うのを信用しなかつたのは事実です。実際、日本での僕が知つている弁護士、と言つても会社が使つている者ですが、にはあのようなタイプはいませんでしたから。まあ2年間かかりましたがビザを貰えたのでまあ良しとしましたが。それにしても香山さんのところに家を建てるのは良いことですね。彼は僕と同じ年なんですがあんなへんぴなところで一人住まいをしているので心配してましてね、毎週電話で生きてるか確認しているんですよ。」

佐々山がすまなさそうな声で小野原に弁明した。

「別に佐々山さんに文句を言っている訳じゃないんです。以前の仕事柄、どうもああ言う人間を見ると、どちらか言つと丸暴に見えるんですなあ。これも職業病ですよ。」

「でも小野原さんの元の職業も彼には判つているのですから、変な事は貴方にはしないでしょう。あつ、家内が帰つてきましたから、これで失礼します。たまには遊びにお越し下さい。では」

佐々山が入り口に立つた奥さんに手を挙げて立ち上がり言った。

小野原は佐々山夫妻の後ろ姿を見ながら

「いい夫婦だなあ。あんな奥さんなら結婚するのもいいだろうな。」

と、つぶやきながら席を立ててスーパーマーケットの店へと向かった。

小野原が熊谷と会つたのは、初めてゴールドコーストへと香山に連れられて来た時に会つた佐々山から電話番号と住所のメモを貰つた二日後だった。

小野原がブリスベンの熊谷弁護士事務所を訪れての事だった。電話では随分と忙しそうに話していたが事務所の中は閑散としていた。不動産屋で見せられた受付の爽やかで可愛い笑顔はここには無かつ

た。部屋の空気もどんよりとしているように小野原には思われた。

カウンターのの上にプッシュ式のベルが置かれていた。用件の方は押してくださいと日本語と英語で書かれていたので小野原が押した。二度目にベルを鳴らした時に奥の部屋のドアが開き、ずんぐりした体型の丸顔の男が顔を出した。少し釣り上がった寝ぼけ目の細かい目だけが相手の値踏みをしているように上下する。小野原は警備員か用心棒のように感じたが、弁護士事務所に用心棒は必要ないだろうと思ひ直し、

「電話で連絡させて頂いた小野原です。先生はおいででしょうか。」と聞いた。

「ああ、貴方が小野原さん。わたしが熊谷です。お待ちしております。どうぞこちらへ。」

熊谷の顔が営業用の笑顔に変わり、別の部屋のドアを押した。

「随分と静かなオフィスですね。」

小野原がイスに腰を降ろしながら言った。

「ええ今日は全員が裁判所の方へ出掛けておりますので、今は僕だけです。ところでリタイアメントのビザを申請なさりたいと聞きましたが、既にリタイアはされたのですか。」

「はい、今年4月で退職しました。」

「そうですね。と言う事は退職金などは既にお手元に入っておられますね。ビザは居住許可だけで労働許可は受けられませんから生活資金などには問題はないでしょうね。それから住宅資金はどの様に計画されていますか。」

熊谷の矢継ぎ早なお金に対する質問に、小野原は少し違和感を覚えた。しかしそれもビザを申請するのに必要不可欠な事だろうと考え、

「まあ独り者ですから。生活するのに必要以上の預金もありますし、恩給も付いていますから。住宅はもし購入するなら東京の家を売っても良いと考えています。」と答えた。

「そうですねかお一人ですか。失礼ですが、以前のお仕事はどのような職業だったのですか。」

「一応、地方公務員でしたが。」

小野原は最初から警察官だったなどというのはどうかと考え地方公務員と答えた。

「あっそう、公務員さんだったのですか。お住まいは東京とお聞きしておりますが、地方公務員と言えば東京都庁にお勤めだったのですか。」

小野原勉は最初に会ったその時から違和感を持っていたので、ひよつとしたら香山さんが言っていた弁護士に当たってしまったかな、失敗したなと思ったが、折角ここまで来たのだから一応聞くだけ聞いても損は無いだらうと

「いえ、警視庁ですが、丸の内署に勤めていました。」

と言った。一瞬、熊谷の目が戸惑ったように揺れたのを小野原はみのがさなかった。

「あっそ、そうなんですか。警察の方だったのですか。」

熊谷が少し考えて言葉を繋いだ。

「警察官のリタイアビザは申請したことがありませんので、色々と難しい事を言われるかも知れません。でもとりあえず申請書を提出してみますか？」

「どうして警察官が難しいのです。別に職業の差別はないでしょう。」

「いや、そうですね、公安だとか、え、スパイだとか色々詮索されるのじゃないかと思っただけです。」

小野原の言葉に、熊谷はうろたえながら答えた。

「そんなことは、共産主義国でもないオーストラリアで考えられるものじゃ無いでしょう。」

「えっええ、それはそうですね。とりあえずこの書類をお持ち帰りになって記入してください。戸籍謄本と無犯罪証明も必要ですから、あっ、無犯罪証明なんてのはお手の物ですね。まっ、とりあえ

ず書いてある通りの書類も揃えて提出してください。担当は山中と言つ者が致しますので、今後は彼と連絡を取り合ってください。こちらの費用も彼がお話しますのでよろしく願ひします。僕もこれから裁判所へ出掛けなくてはなりませんから、今日は一応これまでと言つことで、今後ともよろしく願ひします。では」

熊谷が言つただけ言つてそそくさと立ち上がったので、小野原は質問する暇さえ与えられずに、手渡された封筒に入った書類を持って開けられたドアから弁護士事務所を出た。

「何だつたんだあれは。」

小野原勉はつぶやきながら腕時計を見た。

「随分と早く終わったな。ゴールドコーストへとんぼ返りと言つのも能がない。ちよつと時間つぶしにプリズベンの町でも観光するかな。」

と、歩き始めた。プリズベン川の畔で対岸に見たことのある建物を見つけた。

「あつ、あんな所に博物館が有つたんだ。よしもう一度行つてみよう。」

「バブルが裂けて久しいと言つのに毎日銀行が来て、金を使つてくれとつるさい程です。あまりつるさいので今日なんか、こつちが銀行に金を貸してやろうと言つたぐらいです。」

久し振りに会社へと出社した早川浩一に財政を担当している専務の吉田が言つた

「結構な話じゃないか。まあ君の御陰で早川建設の方も今年はかなりの実績を挙げる事が出来たからねえ。感謝しているよ。」

早川が吉田に少し頭を下げて言つた。

「社長にそう言つて貰えると、金沢君を社長の会社から引き抜いた甲斐がありました。彼は今、現場へと行つておりますので、昼過ぎまでは帰つて来ませんが、それまでどうぞゆっくりしていつて下さ

い。」

吉田の言葉に期を通じて女性秘書がコーヒーを運んできた。

吉田も早川の前に座り、コーヒーに手を伸ばしながら、

「実は、新しい事業も計画を始めました。まだまだ計画段階ですが、具体化したらお知らせします。」

と言った。

「ほう、そうかい、君がやることなら間違いは無いだろう。事業分野はまさか建設なんて事はないだろうね。」

「それは社長に失礼ですから、絶対に踏み込まない分野と心得ております。それは御心配には及びません。一口に言えば通商分野で、輸入販売事業です。まだ何を輸入するかの検討中ですが、幾つかの商品候補はもっております。この分野は一応わたしが担当しますので明日からちよつとオーストラリアへ行く予定なのです。」

早川が冗談のように言った言葉に応えて吉田が言った。

「ほう、オーストラリアね。今、わたしの息子がゴールドコーストの大学へ通っているんだよ。最も姓が違うがね。まあしかし、わたしにとっては一人息子だからゆくゆくは跡継ぎにするつもりではいるんだ。その母親にそこで日本食のレストランをやらせているから、もしゴールドコーストへ行く機会があれば立ち寄って様子でも見せてくれるといいがなあ。」

早川が言った。

「そうですか。それではゴールドコーストへも足を伸ばしてみましよう。まあブリスベンへも行きますから近くですしね。お届け物でもあれば持参しますよ。」

「そうだな。別に品物は無いが、金を1000万円程渡してやってきてくれないかな。すぐに会社へ電話して持ってこさせるから。」

早川が少し考えて言った。

「そんなことならお安い事ですよ。お金のことは御心配には及びません。既に4億円程向こうの銀行に仕入れ資金として送っていますから、そこから立て替えておきます。ちよつとわたしはその用意も

しなくてはなりませんから出掛けますが、どうかごゆっくりしてください。あとは先程の秘書に申し付けておきますので何でも御用は言ってください。では」

吉田が腰を折って出ていったので、早川は少しゆっくりするかと応接イスに横になった。

「社長がお見えになっております。」

金沢が帰社したときに秘書が耳元でささやいた。

「えっ、いつから来られているのだい。」

ビツクリして金沢が聞いた。

「はい、朝、金沢常務が出掛けられてからすぐでしたから10時半頃です。専務さんと30分程話していてそれからは、社長室から物音一つ聞こえないのです。」

秘書の言葉を聞き、金沢は慌ててドアをノックした。しかし返事は無い。ドアをそつと開けてみた。気持ちよく小さなびきを立てて早川は眠っていた。

「気持ちよく眠られているから、もう少し寝させておきましょう。その間わたしは用事を済ませてきます。もしわたしが来るまでに起きられたら連絡してください。」

金沢は秘書に言い残して自室へと引き上げた。

その後、1時間程でその秘書から

「早川社長がお目覚めです。常務にお越しになるようにとの事なのですが、ご都合はいかがですか。」

と電話があった。

「判りました。すぐ伺います。」

金沢は広げていた資料をまとめ小脇に抱きかかえ社長室へと入った。

「おう、すまないね。忙しいのに。」

早川は金沢に自分の前のイスを勧めて言った。

「先程帰社しましたときに社長がぐっすりとお休みでしたので遠慮

していたのですが、実はこれを御覧下さい。」

金沢は小脇の資料を広げて言葉を繋いだ。

「会社の仮決算書ですが、わたしは専門ではないのでよく判らないのですが、どうも変な気がするので一度社長に聞こうと思っていたところだったのです。」

「どれどれ、これが。」

早川が手を伸ばしてその部分を取り上げた。

「別におかしいと言うのは見あたりませんが。」

しばらく眺め数字を目で追っていた早川が顔を上げて金沢に言った。

「はい、でも実際この数字より多くの出資があるはずなのです。それがどこかへと途中で消えている気配があるのです。じつは数日前一人の出資者から電話を貰いまして、聞きました数字と食い違いがあるのです。勿論出資証券はその方の手元にはあるそうなのです。ですから、出資者からの資金がどこか違う部門へと横に流れたのか、担当者が出資証券を偽造しているのか、問題が問題ですので、今のところは僕の腹の中だけで調べていたのです。」

金沢の言葉に、先程聞いた吉田専務の言葉が早川の脳裏によみがえった。

「そうそう、さっき専務が言っていたが、新規事業で輸入をやるから既に4億円程オーストラリアへ送ったと言っていたがそちらへ廻っているのではないのか。」

「ええ、それも考えてみました。実際、それ自身も顧客はマンシヨンへと投資しているのですから問題は残るはずで、僕は反対したのです。」

「なるほどね。しかし、会社が順調な時に保険として異分野、異業種に手を伸ばす事は、必要な事でもあるし。専務もそれなりの事を考えているのではないかね。」

金沢の口調を和らげるつもりで早川が言った。

「それはそうかも知れませんが、輸入販売などは誰も経験の無い分

野ですから。」

「まあ、それは一応専務に任せて、どうかねこれからの建設発注はどのくらいわたしの方へ来そうかね。」

「はい、都内はある程度市場的に蔓延した感じがしますし、大臣免許も取得できましたから、いよいよ他県に向かって市場開拓を広げます。さしあたって社長の独壇場の千葉県と神奈川県。それに吉田専務の出身地の岡山県へと広げる予定です。千葉県の物件は既に設計段階で4棟がスタートしております。これは数日内に図面をお届けできます。」

「ほう、そうかね。一つは岡山県か。これはわたしの所では大坂支店管轄になるが、距離からして無理かもしれんな。」

早川がつぶやくように言った言葉を受けて金沢が

「あつ、岡山県の方は専務の親戚で建設屋があるそうで、そこにやらせたいと言っていたので社長に相談しようと考えていたところです。」

と言った。

「そうか、まあ顔を立てる事も必要だろうが、当初の約束があるから、わたしの所で受けて下請けとして指名する方法にするしか無いだろう。」

早川が言った。

「そうですね。そうして戴ければ専務の顔も立ちますから。どうかよろしくお願いいたします。」

金沢が頭を下げた。

「それもそうだが。千葉県で計画するなら、うちが持っている使えない土地。君も知っているのが幾つかあるだろう。あれをその計画地として考えてくれないか。実はね息子が大学を卒業する事が出来るようになったから、本格的に弁護士事務所を構えさせてやろうと考えて、不要な土地を整理した金を送ってやりたいと思っているんだよ。」

早川が言った。

「それはおめでとございます。いよいよ征次君が弁護士になるのですか。凄い事ですね。それなら土地の方はお任せ下さい。全部整理させていただきます。」

「それは助かるなあ。土地図面なんかはあとで届けさせるからよろしく頼むよ。」

早川が金沢に頭を下げて言った。

「任せてください。さしあたって習志野の土地は良く判っていますから、すぐにでも建築図面にしましょう。千葉市内にある土地は全部、こちらで買い取ります。でも富里と印旛の大きな土地は私どもの計画には合いませんから、でも何か考えてみます。あと市原にもありましたね。富津市の山中峠でしたか、農地は駄目ですね。」

金沢が務めていたときに知った知識で早川に言った。

「富里の600坪は売ってしまったから考えなくても良いけれど。」

御宿にも海岸線に近い場所で400坪程あるよ。」

「えっ、それは知らなかった。それはすぐ計画に乗せます。実はリゾートマンションもそろそろ計画するべきだといつ先日の役員会議で決まった所なんです。」

金沢が身体を乗り出して言った。

「そうか、ただ少し値段が張るから今まで売れなかった物件なんだ。海を眺められて物件としては良いんだよ。」

早川は少し言葉のトーンを落として言った。

「社長も御存じのように、価格の調整はどうにでもなります。建築費に土地代金を組み込ませる事でもすれば、土地の表面価格を下げることも出来ますし。まあ任せてください。明日中にも契約書を揃えます。でも裏契約は無しですよ。税務署はイヤですからね。」

「ははは、裏契約を結ぶ程、利益の出る土地ならこんな事は言わんよ。そうか、それならすぐにでも図面を届けさせるから頼むよ。」

コーヒー茶碗に手を伸ばし冷めているのに気が付いて、

「コーヒーを飲むのも忘れて話し込んでしまった。君の時間をつぶさせてしまって悪かったね。じゃ、わたしは千葉の方へ帰るとする

か。」

早川が立ち上がりながら言った。

「判りました。総て御心配の無いようにうまくやりますからお任せ下さい。」

社長室から二人で出て、玄関の専用車まで送り届けた金沢は書類を抱えて自室へと引き上げた。

「社長にも判らない操作をしているなんて、やはり全体から見つめ直すしかないか。10億ともなると小手先の操作では出来るはずはないからなあ。」

手にした書類の束を見ながら金沢はつぶやいた。あるきつかけからあるべき筈の10億円と言う金額が影のように消え失せているのを発見した金沢が、不得意な経理帳簿を繰り始めたのだった。

「まずいな。恵子から言つて来たのだが、金沢が色々帳簿を探り始めたそうだ。」

「社長が送り込んで来た奴はうまく排除する事が出来た。あれはよかったが、金沢が始めたとなると、更に地下に潜った方法を探らなければすぐに見つけられるぞ。」

山口が中村の言葉に返した。新宿の高層ホテルの人影の少ないバーの一角である。

「上河取締役みたいに追い落とす方法は無いかな。」

「待て待て、中村君、それは非常時の事にして、その恵子ってのは社長の秘書だろう。どんな書類を金沢が引き出しているか詳しくは判らないか？」

「うん、今のところは仮決算書とか契約リストの一部を調べているだけだそうだが、先日社長が来たときにも仮決算書を社長に見せていたそうだ。」

「社長の反応はどうだった。」

「実際、恵子がそこに居た訳ではないそうだが、彼女の感觸では社長は何も見つけられなかったそうだと言っていた。」

「そりゃあそうだろう。あんな仮決算書なんかでは判るはずはないんだ。金沢はどこから何を嗅ぎ出したのか。まずそれを調べる。それから今のところで、全部で幾らになる。」

山口が聞いた。

「だいたい50億までは届いている筈だ。」

「目標までにあと30億か。」

ブランドーグラスを持ち上げ山口がつぶやいた。

「そうだな。あと2ヶ月で終われそうだ。」

「まあ、金沢が何を見つけだしたか。それを探るのが先決だ。ある程度判ればもう一度ここで話をしよう。会社の中では今まで通り、君と僕とはそりの合わない取締役どうしだからな。」

「もし、金沢が金額でも知ったらどうする。」

中村が気の弱いところを見せて言った。

「何を言っているんだ。そんなのが判るはずはないだろう。あいつは決算のけの字も知らないんだぜ。今、あいつが居なくなると建築の方でパニックが起こるだろうし、社長から我々が睨まれるのはまずい。特に吉田がオーストラリアから帰ってくるまでは、俺が言ったとおり、調べることをしる。しかし、それにお前が前に出ては駄目だぞ。あくまでお前の可愛い彼女に探らせるのだな。」

山口はそう言って立ち上がり胸ポケットから鱈皮の財布を出し、1万円札を5枚程半折りにして中村の前に放り投げ言った。

第十章 2004年12月

第十章 2004年12月

紆余曲折の内に申請してから1年間でリタイアメントビザが手に入った小野原勉は、ゴールドコーストで新築の家を買った。退職金の半分も使わないで土地が250坪、建物が50坪も家が買えたのにはビックリした。しかも新築だ。車も香山氏に言われたように4WDを買った。何もかも新しくなったので気持ちも一新して、本格的に恐竜に取り組もうとゴールドコーストへ来た香山氏を招いて数日間を泊まって貰った。

「なんか小野原さんに無理矢理に拉致されてるみたいで怖いなあ。」
「モーターを予約していると言う香山氏を口説いて引っ張って来たのだった。」

「何をおっしゃる。まだ充分には家具類など揃ってはいませんけれど、折角、遠いところからゴールドコーストへお越しの香山さんをわたしの家へと招待しない訳には行きませんからね。それに今日は香山さんにお願ひしなければならぬ事もあるのです。」

「何でしようねえ。小野原さんから頼まれごとなんて。」

「まあねえ、それはあとでの楽しみにとっておいて、今夜は香山さんにわたしの料理を賞味して貰わなくっちゃ。今まで香山さんには御馳走になりっぱなしでしたからねえ。」

「そうだ、小野原さんも独身だから料理には問題なかったのですねえ。忘れておりましたよ。じゃあお言葉に甘えて御馳走になりましょうかな。でもお願いと言つのが気になってせっかくの料理が味わえるものなのでしょうか。」

「ええ、そんな心配するようなお願い事ではありません。佐々山さ

んも良いことだと言っておりましたから。」

「そんな良い事なら隠さないで早く教えてくださいよ。」

「まあ今日はゆっくり出来るのですからビールでも飲んでいてくださいよ。」

小野原が台所へと入ったので、香山は応接間で新しい深々と座れるイスに腰を降ろし、出されたビール瓶の蓋をねじって口を付けた。「やっぱりこんな家があったら、こちらへ来てもゆっくり出来るが、モーター住まいでは金の心配もしなくてはならないし、ゆっくりと落ち着けるものではない。でも買うお金も無い。夢、夢。」

香山が心の中でつぶやきながらビールをグイと飲んだ。「うまい。こうやってゆっくりと落ち着いて呑むビールはうまいですねぇ。」

小野原が料理の一部を持ってテーブルの上に並べだしたので香山が言った。

「そうでしょう。モーターじゃ落ち着けませんからね。まあちよつとゆっくり呑んでください。あと2品作ってきますから。」

「これはこれは、凄い料理ができますなあ。うしろに新しい奥さんでも隠しているんじゃないやありませんか。」

香山が冗談で言った。

「ははは、お褒めにあずかりまして恐縮ですな。残念ながら隠している女性はいませんよ。まあ、ちよつと待ってください。」

小野原勉も笑いながら言い台所へと消えた。

香山はビールを片手に庭を眺められる窓際へと歩いた。綺麗に整備された芝生の庭が広がり、その奥には新しく植え込まれた樹木が塀に緑を濃く映している。香山はつい自分自身に置き換えて思いを巡らせた。こんな家の1軒や2軒、宗教狂いの妻さえいなければ難なく買えたのにと、今更ながら妻を迎えた事の愚行を振り返ってくやしい思いを深めるものだった。これだけは一生消えそうも無い思い出だった。今の香山にはゴールドコーストへ借家を借りる金さえ持っていない。仕事をするにも高齢で探すことすら難しい状況だ。

対外的にはゆつたりとした感じを見せてはいるが、内実は政府からの微細な援助だけでの生活から離れることが出来ない。しかしダルビーでの恐竜探索だけに生涯を費やす訳にもいかない。実際、自分の土地から恐竜が発見されさえすれば生活は一新することが出来る筈なのだ。しかし資金難から機材も失った今、その機会は遙かなものとなった。収入を得るチャンスはやはり人口のある所でしか見いだすことが出来ない。出来るだけここゴールドコーストかブリスベンへと来る事を考えなくてはならない。しかしそれには旅費と滞在費が必要だ。そこまで考えた時に小野原が台所から料理を運んできて言った。

「どうです結構庭作りもいいでしょう。でもこの暑い最中に植えたものですから、ちゃんと根付くか心配しているんです。」

「今年は雨が少ないから、ちよつと可哀想かもしれませんがね。でもこうやって眺めると落ち着けますね。いやあ、小野原さんが羨ましい。」

香山が言いながら席へと戻った。

「そう羨ましがらないでくださいよ。まあいつでもこちらへ来たときには自分の家のように来てください。まっ、お願いと言うのもその事なんですがね。とりあえずビールからにしましょう。」

テーブルに料理を並べ、小野原勉がビールを持ち、乾杯をして言葉を繋いだ。

「この前佐々山さんと会ったとき、香山さんの話題で持ちきりになりましたね。香山さんもゴールドコーストへ帰って来れば良いのにと言っていましたよ。」

「まあね、でもやっぱり先立つものが手元に無いのでは、どうすることも出来ませんからなあ。」

香山がビールの泡を髭に付けたままで言った。

「そこです。わたしは恐竜に興味を持っておりませんが、ゴールドコーストからではどこへ探索に出掛けるにしても距離が遠すぎます。香山さんの居住地のダルビーからなら数百キロの距離を節約できま

す。まあこれは香山さんもそのつもりでダルビーへと移った訳でしょうが。さあそこで香山さんへのお願いなんです。香山さんはゴールドコーストへ来ることが度々ありますね。その都度これからはこの家を使って欲しいんです。そのかわり、そのかわりですよ。香山さんの大きな土地の端っこにわたし専用の小さな山小屋を建てさせて欲しいんです。そうしたらわたしも恐竜掘りをやるときにベース基地として香山さんに迷惑をかけないで使えますから。」

小野原勉が料理を箸で小皿へと取りながら話した。

「なあんだ。そんな事なら、たいそうに言わないでも何の問題もありませんよ。いつでもどこでも好きな所に建ててください。材木も庭から切りだしても良いですよ。勿論、道具類はすべて揃っていますから。どうぞそれも使ってください。いやぁいいなあ仲間が増えて身近に住んでくれるなんて楽しみだなあ。勿論、大歓迎で建設の手伝いもしますよ。」

香山も顔をほころばせて身体中で喜びを表して言った。

「やつ、それはよかった。契約成立ですな。じゃあもう一度乾杯。」

小野原がビールを持ち上げて言った。

「ははは、乾杯！」

「佐々山さんも本当は行きたいようなのですが、あの人、あんまり車の運転に自信が無いそうで、400キロ走るのが怖いそうなんです。実際、東京に住んでいますと車は要りませんからね。でも香山さんが一人で住まわれているのを随分と心配されて、この話を少ししてみたら大賛成してくれましたよ。まっ彼の言うのには、香山さんの管理人が出来ると言う事ですがね。」

小野原勉がおどけて言った。

「ははは、わたしも老化ですからなあ。でもこんな素晴らしい家を使わせて貰うなんて、そのの方が心苦しいですよ。」

香山が室内を見回して言った。

「新しい家と言うだけですよ。そうそう。」

小野原勉が言って、ポケットをまさぐって

「じゃあ、これを渡しておきますね。契約成立の証拠です。あとで香山さんの部屋を決めましょう。」

と言つて家の鍵を、香山に手渡した。

「本当にいいんですか。なんかわたしの方が得をするみたいなんですかねえ。」

香山がすまなさそうに言つて鍵を受け取つた。

「何をおっしゃる。香山さんがここへ来るとき、わたしにとっては専用の通訳を使えるという事にもなりますし、それに、わたしの方こそ人様の土地に家を建てさせてくれと言つているのですから、厚かましいのはわたしの方ですよ。それはともあれいかがです。わたしの料理は。」

「そうそう、小野原さんがこんなに料理が出来るなんて考えませんでしたよ。味付けもうまいし。そろそろ、うしろから絶世の美女が出てくるんじゃないですか。」

小野原の言葉に香山が応えた。

「ははは、まだ言つてる。いつでも家の中を搜索していただいても結構ですよ。」

小野原も笑いながら小皿を手にして料理へと箸を伸ばした。

二人で話が尽きないままに時間が過ぎ香山が立ち上がり言った。

「これは、これは随分と長居をさせていただきました。モーテルに帰らなくっちゃ。」

「えっ、香山さん酔いましたね。今日からここに泊まると言つ事になつたじゃありませんか。まあ座ってください。」

慌てて小野原も言つた。

「あっ、そう言うことでしたな。いやいや。」

香山が揺れる身体を、その揺れに任せて頭をかきながらイスに腰を落とした。

「以前香山さんに聞かされた例のストラマトライトを見に行こうと準備を始めたのですよ。」

小野原勉が酒の酔いでこころよさそうにしている香山に言った。聞いたとたんに香山がシャキツとして

「えっ、ストラマトライト。行くんですか。」
と言った。

「そうですね。出来たらすぐにも行きたいんですが、この家の事もありましたから伸ばしに伸ばしていたのです。もうビザも取れませんでしたから何の問題も無く、ゆっくりとオーストラリアを一周出来ませんからね。」

「なんと、直接飛行機で飛んで行くのかと思いましたが、一周旅行もされるんですか。いいなあ。出来ればわたしも一緒に行きたいなあ。でもまあ今は資金難だから無理です。でも気を付けて下さいよ。自然は良いけど結構恐いですからね。」

小野原の言葉に香山が応えたものだ。

「香山さんもお一人で廻られたんでしょう。わたしも語学力のためですから、全部一人で廻るつもりです。それに香山さんから聞いている恐竜の発掘地点めぐりもしてきますから。ところで香山さん、今回のゴールドコースト滞在は何日までですか。」

小野原勉が聞いた。

「明日、税理士の所へ行くだけですから、終わったらすぐダルビーまで帰るつもりです。そうそう、日本食品も少し仕入れて行かなくっちゃねえ。……」

香山が言つて、酔いに耐えきれず身体を横たえてしまった。

「ありやありや、香山さん、そしたら部屋へ行きましょう。」

小野原が香山の背中に手を回らせて起こし立ち上がらせた。

「ハイハイ、わかりました。わかりましたよ。行きますよ。あつと、車のキー、キーっと。」

寝ぼけてキーを探す香山の背を押して小野原が言った。

「キーは置いておいて、ベッドへ行きますよ。はいはい。」

小野原に押されるままに香山は足をすすめてベッドに倒れ込んだ。

「さて、片づけて用意をするか。」

応接間に戻った小野原勉がつぶやいて残った料理や皿などを台所へと運び始めた。

「小野原さん、昨夜は色々ありがとうございます。久し振りに良い話とうまい料理を楽しませていただきました。そろそろ税理士事務所も始まるでしょうから行きます。で、そのまま少し買い物をしてからダルビーへ帰ります。本当にありがとうございます。」

朝食後、台所で、皿を洗い終え濡れた手を拭いながら香山が言った。

「いえいえどういたしまして。毎回香山さんからは勉強させて頂いてますから。わたしの方こそ嬉しかったです。香山さんが出掛ける時にわたしも一緒に出掛けますから。そこまで御一緒しましょう。」

小野原も用意したものを車へと積み込みを始めた。その荷物を見て香山が聞いた。

「凄い荷物ですね。どうするんです。」

「なに言ってるんです。昨夜言っただじゃないですか。一周旅行に行くんですよ。」

小野原勉の言葉に香山は目を大きく開き、ビックリして言った。

「えっ、あれは本気だったのですか。それにしても数時間前に聞いただけですからねえ。コースなんか考えておられるのですか。」

「まあ行き当たりバッタリの旅にしようと思っっていますから、全く何も考えていません。地図も香山さんのシヨップピングに付き合っただけで本屋さんで買っていこうと思ってるぐらいですから。」

小野原勉が言った。

「いやあビックリですな。わたしも無計画の計画を楽しむ人間ですが。小野原さんは遙かわたしをしのいでいますよ。本当に気をつけて行ってきてください。もし何か問題でも出来ましたら電話を下さい。出来ることならお手伝いしますから。」

香山が本当に感心した顔で言った。

「ええありがとうございます。でも香山さんに言われたように、出

来るだけ英語で過ごそうと考えていますので、しばらくの間は行方不明になるつもりです。まあ便りの無いのが良い便りと思っ
ていてください。」

小野原勉がランドクルーザーのドアを開けて乗り込み、

「そうそう、忘れていましたが、わたしの不在の間、この家は自由に使ってください。窓も開け閉めしなくちゃなりませんから。」

と言葉を繋いだ。

「それは任せてください。少し遠い所に住んで居ますがこちらへ来る度に管理人になりますよ。女を連れ込むような事は100パーセントありませんから心配しないで言ってきましたください。」

香山も笑いながら言った。

「じゃ、帰ってきたら電話を入れますからその間よろしく。あっ、ショッピングセンターまで一緒に走りますから。」

小野原が言うので香山が

「なら、税理士は後回しにして先にショッピングセンターの方へ行きますから、ついてきてください。」

と言ってエンジンをかけた。

第十一章 密談

第十一章 密談

「良いことを考えたぜ。吉田がオーストラリアで調べてきたそうだが、社長の息子が大学を卒業して弁護士になるそうだ。」

山口が言った。

「待てよ、あの社長にそんな良い息子がいたのかい。」

中村が首をひねりながら言った。

「ところが残念な事に、あの2号に産ませたぼんくら野郎が弁護士様だとよ。まああとから吉田も来るように言つてあるから来たときに聞いて見るよ。それにやはり馬鹿な息子ほど可愛いという奴で、社長はほとんど金を送つてやっているそうだ。その金も金沢が俺達の金で社長の売れ無い土地を買い上げてやっているそうだ。既に数億円を送金したそうだぜ。」

山口がバーテンにヘネシーを注文して言った。

「でも、それでリゾートマンションにも手を出せたじゃないか。」

「そうそう、それよ。御陰で又々違う方から資金提供を受ける事が出来るようになったから、考えてみたら金沢様々だよ。ははは。」

ブランデーグラスを高々と持ち上げて、乾杯、と言いながら山口がほくそ笑んだ。

「そうですね。市原のマンションも地元の何て言いましたっけ。あの大口投資家。ほんと4億円を投資するんですからねえ。都内だけじゃなく近県へと手を伸ばしたのもまんざらじゃ無かったですね。」

横で中村が水割りのグラスを手で包み込むようにして言った。そこへ大きな身体を揺するようにして吉田専務が来た。

「やあやあ、すまん。遅くなっちゃった。」

「まあ仕事をしている大会社の専務さんだから仕方がないか。早速だが中村に社長の弁護士息子様の事を話してやってくれ。」

山口がせかせるように吉田に向かって顎を突き出して言った。

「そう専務、専務と言わないでくださいよ。そりゃあ俺は体型だけは貫禄がありそうに見えるけれど。山口さんが発案者で年上だし、頭も良いし。たまたま話の上で専務になり、山口さんが一番下の取締役になったというだけでしょ。」

「何を今更、そんなことを言うんだ。専務さんは専務さんでいいんだ。御陰で俺も仕事がいよいよだから。映画の配役見たいなものだ。まあそれもあと1ヶ月程でハッピーエンドだ。その間せいぜい俳優ごっこを楽しむこつた。」

ブランドーグラスを手の中で弄びながら山口が言った。

「ええっ、あと一ヶ月ですか。」

吉田が重そうな身体を山口に向けて言った。

「そうだ。中村があと10億で予定終了打ち止めだと言った。」

それを聞いて身体を中村の方へと向き替えて

「もう、そこまで進んだのか。中村君よくやった。」

中村の手を握り吉田が言った。

「そこでだ。仕上げを考えている。吉田。中村にほんくら弁護士の話を聞かせてやれ。」

吉田の後ろから山口が言った。

「そうそう、何しろあのぼんくら息子が弁護士なんだぜ。何という世界になったのだとビックリした。オーストラリアへ出掛ける前に社長からちらっとそんな話を聞いた時は、別に息子がいるのかなと思っただが、会ってみてビックリだ。あのぼんくらだよ。しかも以前と全く変わっていない。まあ社長の裏金で大学も入学し、卒業もしたのだろう。何しろビックリしたものだ。」

「そこでだ。吉田の話は長いから、俺が話す。」

山口が声をかけた。

「そこでだ。社長は可愛い息子が弁護士様に変身した。紛れもない弁護士様だ。でも息子の実体は身にしみて判っている。だから、普通の弁護士を雇って、弁護士事務所を開いてやるうとしている。そうなれば対外的にも仕事こそしない弁護士様だ。しかも事務所のオーナー。俺はこれに目を付けた。」

ここまで言っつて山口は又タブランデーグラスの壁を愛おしそうになでこすり眺め、

「我々の役割を社長に担って貰う事にした。」
と言った。

「どういうことなんです。山口さんの話は突飛だから僕らには理解できません。」

カウンターに身を乗り出して、吉田の身体を避けて中村が聞いた。「簡単な事だよ。今から社長が売りに出している土地が売れて、手にする金が約30億。勿論会社の物件もあるし、個人名義のものもある。しかも、早川建設の実体は談合の発覚で公共工事から総て降ろされたも同然で、仕事と言えば我々が大口顧客だ。今我々が発注を止めれば確実に死滅する会社だ。我々の会社はあと一ヶ月でこの世から消える。必然的に早川建設も消える。そうなると彼はどうすると思うか？」

「そりゃあ、息子を頼ってオーストラリアへ逃げるでしょうな。」
吉田が言った。

「そこでだ。我々の金の大半は既にスイス銀行に収まっている。一ヶ月後の我々はヨーロッパのどこかで優雅な生活を享受している頃だろう。どうだ、投資家の目はどちらを捜す？」

「なるほど。我々の罪を社長が背負ってオーストラリアへ飛んでくれると言っ事だ。」

吉田が山口の言葉に大きくうなずいて言った。

「そうしたら、今の内に社長の売り物件に関しては大いに協力をした方が良い訳ですね。」

中村も言った。

「そうだ、だから送金も堂々とあからさまに手伝ってやれ。総ての金がオーストラリアに向かって送金されたと見えるようになる。それから吉田。あのオーストラリアに送った4億円はどうした。」

「はい、あれは言われたように、支払代金として香港に作った我々の口座に送りました。」

「それならよし。この際、いつそ捨ててしまってもいいかなとも考えたのだ。」

山口が言ったので

「どうしてなんです。折角我々の金として出来上がった資金なのに。」

吉田が口を膨らませて言った。

「考えてもみるよ。その金の方向が判れば、総ての金額が何らかのかたちでオーストラリア国外へ出されたと見られるだろう。でも香港に支払いたとなれば実体を掴まなければ問題は無いだろう。」

その香港の会社の役員はどうした。」

「それは抜かりはありません。現地でフラフラしている日本人を捕まえてサインさせましたし、現地人役員は港でたむろしている浮浪者に背広を着せて銀行の手続きをさせて来ました。勿論受け取った金はスイス銀行へと自動的に送金されるようにはなっておりません。もう既に我々の口座の奥深く眠って居るはずですよ。」

山口の問いかけに吉田が胸を張らせて言った。

「そうなれば、あと目標に達するには5億円弱です。」

中村が吉田の後ろから言った。

「そうから億程度なら、これからは無理をしなくてもいいな。」

「例の金沢はどうします。」

「心配するな。今からなら何を知ってもどうする事も出来やしないさ。当たり障り無く今までどおり付き合っただけがいいさ。」

山口が言った。

「そうですか。では放っておいていいんですね。」

「そうだ。心配することはない。それよりか、社長がうまく逃げる

算段をしてやらなくてはならない。中村。お前は今まで以上に社長におべっかを使って、土地の買い取りや販売の手伝いをしてやれ。営業はお前が指揮を執らなくてもいい程に動いているからな。それに吉田も経理関係はもう重要な時期では無くなった。今月中にもう一度オーストラリアへ運ぶ金の手伝いをしてやれ。お前が元居た銀行もふんだんに使って、ついでに借金もさせてやれ。勿論それもオーストラリアへと送らせるのだ。目標として40億。うんそうだ。40億円を送金させる。そこまでの金額に膨らませれば、我々の100億がオーストラリアへと行ったと思わせられるからな。」

「なるほどねえ。よく判りました。さすが山口さんだ。」

二人が感心してうなずいた。

「それに、社長がオーストラリアへと飛んだあと、吉田には重要な役回りがあるんだ。」

山口が言ったので吉田は次の言葉を待った。

「一番の適役がお前だからな。まず行方不明の社長を捜す振りをしろ。勿論俺達も参加する。そこでお前は臨時株主総会を開催して株主に不明金の発表をするのだ。勿論新聞記者なども集まるだろう。一世一代の演技をそこで見せてくれ。俺達は社長の被害者なのだからな。」

「そりゃあ、最初から予想はしていましたが実際にここまで来ると足が震えます。まあ任せてください。映画俳優顔負けの演技をお見せしますよ。」

吉田が山口に向かって言った。

「そうか頼もしそうだな。そして会社運営上かなりの支障があるので会社を解散させると発表する。勿論ケンケンガクガクの総会になるだろうよ。そこで株主の中から我々の解雇動議を提出させるように俺が手配する。勿論、我々はそこで解雇され、無一文になって放り出される訳だ。中村なんかその壇上で泣け。それもお前の役割だ。俺達は退場する。どうだ。そのご俺達は行方不明になり、ヨーロッパのどこかで優雅に暮らし始める。3ヶ月前に俺がヨーロッパ

へ行った時に既にバーレーンで大きなマンションを一つ買ってあるから、成田や関空から別々に飛び立って集合地点はバーレーンとする。

「へえーさすが山口さんだ。そこまでシナリオが出来ていたのですか。明日からは社長様に御奉仕をしなくちゃなりませんねえ。バーレーンって僕は行った事無いですけど良い所らしいですね。なんか1ヶ月先が楽しみになりました。」

中村がはしゃいで言った。

「よし、決まった所で、銀座へ繰り出して一杯いこうかと言いたい所だが、ここは慎重に今までどおりここで解散する事にしよう。君達もバラバラに出て帰るもよし、呑みに行くのも良しとしよう。まず俺から帰るとするか。」

山口は言って立ち上がり、内ポケットから100万円の束を二つ無造作につかみ出し、カウンターの上に放り出した。山口の後ろ姿を見送った二人は同時にその札束に手を伸ばし顔を見合わせてにつきりした。

第十二章 弱気

第十二章 弱気

「社長、おめでとうございます。いよいよですか。征次君も弁護士。日本に居た時の征次君からは考えられない事ですが、外国へ出した御陰で本当に変わったのですね。いや、これは少し言い過ぎました。申し訳ございません。」

ある日、社長室へ来た早川浩一に金沢が言った。

「ははは、まあな。まあ、君が言うとおりだよ。俺もまさかあいつがそんな風になるとは考えてもみなかったよ。でもなこれは秘密だが、君が言うようにあいつの頭では卒業なんか考えも付かなかったし、入学さえもおぼつかなかったものだった。まあ運が良いというか、大学自体が経営難の時期だったから、寄付金をはずむだけでそれぞれの時期をうまく乗り切ったのが実状で、今でもあいつが弁護士として仕事が出来るとは誰も考えてはいないさ。」

早川が誰もいないその部屋であるが、一段と声をひそめて金沢に言った。

「それでも弁護士ですから、勝てば官軍ですよ。」

「そうだな。しかし、免許や資格を握っただけでは意味が無いから。いつそのこと本当に勉強して卒業した同期の人間で日本人がいたら、それを雇って弁護士事務所を出させてやろうと考えているんだ。」

金沢の言葉に早川が応えた。

「そうですね、それは良いことですね。そうすれば堂々と弁護士様で通りますね。」

「うん、それで君に色々と土地の事で動いて貰った訳だが、あと10億円程を作りたいんだ。どうかなあの吉田専務に言って、早川建

設が持っている土地社屋その他を担保にして銀行から借りだしても
らえんだらうか。個人的な事だから俺から言っても良いけれど、君
から言つて貰えたら助かるが。」

早川が身体を乗り出して言った。

「なんだ、そんなことはお安い事だと思えますよ。でも僕は社長の
ところの借金や抵当権などの事を知りませんから、一応僕からこん
な話があると彼に伝えますから、社長の方で詳しく話してやって下
さい。あと1時間程で帰ってくる予定になっておりますから、帰社
次第こちらへ来るように言つておきます。」

金沢が言った。

「そうだな。じゃあそうしよう。ま、君も忙しいだろうから仕事を
してくれたまえ。僕もそれまでに抵当関係を少しまとめておこう。」

「はい、判りました。所で僕は今から新幹線に乗り、京都の物件を
見に行きます。だから途中で吉田専務の携帯電話に今の内容を話し
ておきます。では、失礼致します。」

「おう、そうか頼むよ。」

社長室から出ていく金沢に早川浩一が言った。

「さて、今の状況では早川建設はおぼつかないな、ここからの発注
だけではいつかは・・・情けない事だ。この会社だといつまでも
投資家を集められる筈もなし、・・・いつか金沢が不明金があると
言っていた事など考えると、長くは続かないだろう。」

金沢が部屋を出てから早川は応接イスに深々と身体を埋め、冷め
た日本茶に手を伸ばし一口すすりながらつぶやいた。

事実、早川建設は談合の発覚から公共工事の指名を外され、完全
に民間工事だけを受注する建設業者に成り下がっていた。しかも早
川が社長を引き受けたこのエムパツクインベストメント株式会社と
言うマンション投資会社だけが早川建設を生き延びさせる糧を稼ぎ
出す元なのだ。

「いっそ、征次を全面的に助けて俺もオーストラリアへと逃げるか。」

「早川はふと心に浮かんだ事を言葉に出した。」

社長の扉がノックも無しに突然開き、吉田専務が大きな身体を覗かせ、

「あつ、社長。こちらでしたか。」

と言いなから入ってきた。

早川は今のつぶやきを聞かれたかと驚いたが手を挙げて自分の前に座る様に示し、

「忙しいのに又々呼び出してすまん。」

と言った。

「いやいや、社長の事ですから、どんなことでもお役に立たせて頂きますよ。金沢君から聞いてはいますが、具体的にお聞かせ下さい。確か10億円でしたね。」

吉田は大きな身体をひねる様にしてイスに座りながら言った。

「10億円は大きな金だから、半分でも良いかは考えているんだ。まあ、自社の持つ土地建物を評価して第一抵当やその他を差し引いたら10億と言う数字になったと言うだけだからね。さしあたって必要では無い金だが、オーストラリアの息子に弁護士事務所を開設させてやろうと考えているところだ。金は有れば有るほど良いと考えただけだからね。」

早川が言ったところへ秘書がコーヒーを二つ持って入ってきた。

「おつ、恵子ちゃん。いつ見ても美人だねえ。丁度コーヒーを飲みたいなと思っていたところだよ。」

テーブルにコーヒーを並べている秘書に吉田が声をかけた。

「まあ、専務さんはいつもお口がお上手だから。」

秘書は言って部屋を出ていった。

「あのこはいい子ですね。話しに入ってきて来ないし、秘書としては最高ですな。僕もあんな秘書がいたら会社が楽しくて、外へ出る事が少なくなるでしょうな。」

吉田が早川に笑顔を見せて言った。

「そうだね、でも実際わたしの仕事なんてこの会社では無いのと同じだから、可哀想な気もするがね。」

「いやいや、これから社長にも頑張って貰わなくちゃなりませんよ。会社の拡大策は色々と着々と進んでおりますからな。所で話を戻しましょう。資金の目的は会社では無く、息子さんの弁護士事務所開設資金として考えればよろしいのでしょうか。そうなれば金額のところで少々問題が出てくると思いますし、海外送金の問題も有りますから、いつそ社長の別荘用地取得と建設と言う事にされた方が銀行としても稟議書が書きやすいと思うのです。それともいつそのことと弁護士事務所ビルディング建設としましょうか。」

早川が少し弱気になっての言葉に、吉田が発破をかける様に言葉を発した。

「それは、君に任せるよ。実際の所は息子の事業援助と言う事だから。しかしこれは君の内に秘めてもらってでもいいから。知っていてくれたまえ。」

「はい、それは良く判っております。それでしたら早速手続きを始めますので、総ての対象物件に關しての権利關係に關する書類のコピーを揃えて戴けますか。それがわたしの手元に届き次第銀行と交渉してみます。別に金利に關しての希望などはございませんね。」

吉田が念を押した。

「ああそれも総て君に任せるよ。」

「そうですね。それでは書類が揃い次第わたしの方へお届け下さい。」

吉田は言つて立ち上がった。

「そうそう、一度、ゆっくりと息子さんにお会いにオーストラリアへ旅行されるのはいかがです。長いことお会いにならてはいないのでしょう。大きなスポンサーであるお父さんが見に来られると息子さんも発憤されるのではないでしょうか。」

吉田がドアへと歩きながら振り返つて早川に言った。

「そうだな。考えておくよ。」

早川が答えたと同時に社長室のドアが閉まり、吉田はその影に消えた。

「そうだな、吉田君もたまには良いことを言ってくれ。この話が済んだら一度征次に会いに行くとしようか。」

吉田の出でいったドアを見つめて早川がつぶやいた。

「そろそろ何とか連絡があっても良い頃だと思っんですがねえ。佐々山さんの方にも連絡はありませんか。」

ある日ゴールドコーストでゴルフに同行した香山が佐々山に聞いた。

「もう6ヶ月でしょう。小野原さんも意思の強い人ですねえ。たぶん香山さんの英語浸けと言う言葉を守りとおしているのでしょうか。そろそろ日本語が恋しくなっていると思うのですが、まあわたしには真似が出来ませんね。」

「本当にねえ。どこかで化石でも見つけたら連絡ぐらいあると思っていたのですが、これだけ無しのつぶてとなると心配になってきますよ。あつ、あそこのラフに佐々山さんの球がありますよ。」

香山が佐々山の打球を探しながら言った。

「参ったなあ。あんな深いラフで。仕方がない7番ぐらいでフェアウェイに出しますか。」

佐々山が7番アイアンを抜き出し、1度素振りをして打った。

「おつ、素晴らしい。さすが佐々山さん。これ2打目ですよ。参ったなあわたしの3打目よりか前ですよ。えーっと右ドッグレッグか、もう一度刻んでおくか。」

香山がつぶやきながら9番アイアンを取り出そうとした。

「何言ってるんです。もうグリーンは目の前ですよ。香山さんなら7番で充分届きますよ。」

佐々山が言うので香山もそうかなと思いつ番アイアンを手にした。「よし、佐々山さんの意見を入れてチャレンジしますかな。でもわ

たしはスライス名人ですから恐いなあ。」

言いながら打った香山の打球は素直にグリーンへと吸い込まれた。「いいじゃないですか。プロ並みの打球ですよ。まあ2打目だったらすけれどね。」

「あつ、ひどい言い方だなあ。じゃ佐々山さんの打球も見せて貰いましょうかな。」

「まあわたしも3打目ですから大きな事は言えませんがね。」

と言って佐々山が打った。球はグリーンのパールに吸い込まれていった。

「おつ、さすが佐々山さん。もうプロですね。2打目だったら。」

「ははは、きつと思うと思った。ははは。」

佐々山が大笑いしながらグリーンの方へカートを引きながら歩き始めたので香山も続いた。

「小野原さんはどの当たりを徘徊しているのでしょうかね。」

ホールに球を収めて佐々山が言った。

「もう6ヶ月だから幾らゆっくりでも一周は終わってる筈なんです。が、まあひよっこりたたいまって帰ってくるんじゃないですか。」

香山もホールから球を取り出して言った。

第十三章 早川浩一逃避計画

第十三章 早川浩一逃避計画

「お前、真面目に仕事をやっているのか。もう昼じゃないか。今からプリズベンの事務所へ行っても働く時間なんか無いじゅないか。」

浩一が寝ぼけ眼で二階の寝室から降りてきたパジャマ姿の征次に向かって言った。

「なんだよう。仕事はちゃんとやってるぜ。今日はたまたま午前中の客が無いし、社員が全員いるから俺はいいんだ。まあ飯を食ったら出掛けるから心配しなさんな。」

征次が台所のドアを開けながら振り返って言った。

浩一は全くどうしようも無い奴だどつぶやきながら立ち上がって開け放たれた窓をとおして広いカナルを横切って走るクルーザーの雄姿を眺めた。

「俺も、もう歳だし、息子がこれだから、今の内に誰かに会社をバトンタッチしてから引退し、こつちへと来て、あんなクルーザーを買って太平洋のど真ん中で釣りでもしながら暮らすってのも悪くはないな。」

早川浩一が考えている後ろから

「親父、お袋はどこへ行ったんだよお。」
と征次が声をかけた。

「ガキじゃあるまいし、いつまでもお袋お袋と言っんじゃねえ。美容院へでも行ったんだろ。」

「ちえ、仕方ないなあ、飯抜きで仕事に行くか。」

浩一の言葉で征次は寝室へと引き返した。

「何だよ。あの馬鹿親父。来たら来たで、文句ばかり言いやがっ

て。奴は俺達に金だけ渡していりゃいいんだ。今でも数十億も振り込んできているくせに全部自分の口座に入れちまって。くそつたれだ。」

征次はつぶやきながら背広を着て、ベンツ500のキーを握った。

征次の運転するベンツ500は、彼の事務所が有るブリスベン方向の北向きとは正反対の南向きに走り続けている。

「馬鹿親父め。会つと毎回小言しか言う口を持って無いのかよ。このベンツを見たときでも、何だこんな奇妙な色の車を買って、バカヤロウだもんな。どこが悪いんだよアンバーカラーでいい色じゃねえか。」

つぶやきながらカジノの駐車場へと車を滑り込ませた。

「あら、いらつしゃい。どうしたの昨日は来なかつたじゃないの。」

カジノの入り口に特別に設けられたエレベーターに会員用のカードを挿入して乗り込み、7階のVIPルームへと入った征次に、日本人担当の女性マネージャーが目敏く征次を見つけて言った。

「うちの馬鹿親父が来てるんだ。ここに通っている事がばれたら又、何を言われるかも知れないからね。たまにはお休みしないとなあ。」

「へえ、大変なのね。さつきから陳さんが貴方を捜していたわよ。バーに行つてご覧なさい。でもあの人と余り付き合わない方がいいわよ。」

女性マネージャーが征次の耳元でささやいて離れていった。ほのかに香る芳醇な香りに征次はつかの間酔いしれて、彼女の後ろ姿を眺めていた。

「おう、征次。今日は遊ばないのか。昨日は来なかつたじゃないか。」

バーへと入った征次を見つけて、早速、陳が立ち上がり近づいて言った。陳は香港から20年も前から移住してきている。顔立ちは典型的な中国人顔をしているが征次とこうやって話していると周囲の人間からはよく、兄弟かと聞かれる。その都度陳のいないところ

で俺は日本人だと憤って説明する。陳は容貌からみてもたいして大金持ちには見えないのだが、カジノに来る客に対してその資金を貸し付けている。カジノでは御法度の事だが、今のところ問題も無いので公認されたように振る舞っている。実際このフロアーで居る限り食事も飲み物も総て無料であるから、見た感じではゲームにも見られる。聞くと数億円の金を客に貸し付けているらしい。先月、征次も負けが込んだ時に1万ドルを用立てて貰ったことがある。100万円程だが、その時はその金で倍程度の金を稼ぐ事が出来たから。外へ出て陳に日本食レストランで奢ってやった。

「今日は親父が来ているので遊ぶ金が無いんだ。だから飯だけ食いに来た。」

征次もこの程度の英語は話せる様になっている。

「それは可哀想な事だなあ。そんな飯だけに来るなんて寂しいじゃないか。少し貸してやるから遊んでいけよ。」

陳がそう言つて100ドル札の束を征次の手に握らせた。

「そうだな。じゃあ、ちよつとやって行くか。」

誘惑に弱い征次がいつものバカラテーブルに座った。

「どうですか、出目は？」

隣に座っている日本人の出目メモを覗き込んで征次が聞いた。

「いやあ、駄目です。さつきからわたしの張る反対ばかり来るんです。今日はついてません。」

あつ、熊谷先生じゃないですか。お久しぶりです。ここへは良く来られるのですか。」

征次の顔を見たその客が言った。しかし征次には見覚えの無い顔だった。

「ええまあ、たまには生き抜きも必要ですからね。」

征次は言いながら、彼のメモを見て、バンカーサイドに1000ドルを張った。それを見て

「今回は絶対にプレイヤーサイドですよ。」

と、その日本人が言って同じく1000ドルチップをプレイヤーサイドのボックスへと置いた。

ディーラーが手さばきも見事にカードを配り、バンカーサイドで一番大きな額を張っている征次の前にカードを配った。いつものように征次は配られたカードを覗き込むようにして端を少しだけ持ち上げ1枚をめくった。ハートのキングだった。

「よし、」

と声を出し、残る1枚のカードも同様にして見た。

「よし、」

再度声を出しそのカードを表に返して強くテーブルに打ち付けるように置いた。

プレイヤーサイドはテーブルの向かい側で座っている中国系と思われる2万5000ドルのチップを賭けている人物が受け取り開いた。そのカードが示した数字は合計で18だった。

「よし、」

征次は大きな声で叫んで、ディーラーが積んだ1000ドルチップを手元に戻した。

「やっぱり、わたしの感は駄目ですなあ。今日はこれまでにしますかな。」

と言って隣の日本人が席を立ったが、征次は返事も返さなかった。続いてのカードは征次の前を通り過ぎ、2つの席を挟んだ中近東系の人間へと配られた。征次がそのカードに注目していると、彼は無造作に2枚のカードをめくり「ちえ」と言葉を出した。カードの合計数字は17だ。プレイヤー側は18を引いた。征次の負けは1000ドルだ。ここで引き上げれば陳さんに利息だけを払えば良いのだが、ゼロで帰るのも癪だし、家に帰ってもうるさい親父が居るだけだからと、次のゲームに2000ドルのチップを積んだ。

「陳さん、最初の方はうまく勝ってたんだけど、最後の読みで目が変わってしまったんだ。あと2万ドルだけ貸してくれないか。」

征次がバーで飲んでいた陳の側に寄ってきて耳元でささやいた。

「いいよ。ノープロブレム。征次さんならもつと貸しても良いですよ。じゃあちょっとこっちへ来てください。」

と言つて先に立つて歩き始めたので征次も続いてトイレへと入った。

「じゃあ、これ。4万ドルあります。さっきの1万ドルも合わせて合計5万ドルの1日分の金利だけは引いてありますからね。」

と言つて陳が封筒に入つた現金を征次に手渡した。

「へえ、随分と用意のいいことだね。」

と中身も見ないで背広の内ポケットへと征次はしまい込んだ。

テーブルに戻つた征次は、負けを取り戻そうとの意気込みで1回のゲームに5000ドルずつ賭ける事にした。

翌日、家を出るときには親父にブリスベンの事務所へ行くと言つて出たが、10時に征次はカジノへと出勤した。毎日の日課としてここへと来るものだから、自分でもどちらが職場かも判らなくなるほど錯覚を覚える。しかし、親父への手前、現金を掴んでの出かけには、事務所へ出掛けると言つ言ひ訳は通用しない。だから今日も手持ち金はゼロでVIPルームに入った。バーを見ると陳さんが早くからワイングラスを傾けていた。

「朝早くから飲んでいるんですね。」

征次がうしろから声をかけた。

「ああ、ビックリした。なんだ征次さんか。どうしたんです。今日は早いじゃないですか。」

陳が振り返つて愛想のいい笑いで言つた。

「親父がまだ日本に帰らないので夜は出て来られないからなあ。不便な生活だよ。所で今日も少し貸してくれないか。親父は一週間もしたら帰る筈だから、そうしたらすぐに返すよ。」

「まあそんな事でしたら、気にする事じゃ無いですよ。前にも言いました。征次さんなら幾らでも貸して良いとボスからも言われていますからね。じゃ、連れシヨンにいきましょうか。」

陳は相変わらずの笑顔で言つてトイレへと向かつた。

「少しずつじゃ気持ちも小さくなって、大きな勝負が出来ないでしようから今日はこれだけ持つていてください。」

と言つて大きなずしりと重い封筒を征次に手渡した。

「幾ら入っているんだい。」

重さを確認した征次が言つた。

「たった20万ドルですよ。勿論、昨日の5万ドル分の金利も引いてありますから、気にしないで賭けてください。もし必要なら1億円分ぐらいは1時間も時間をくれたら用意をしますよ。聞くところに寄れば征次さんはもう1億円ぐらいこのカジノにつき込んでいるんでしょう。いつそのこと大きく賭けて取り戻しちやいなさいよ。簡単でしょう。1億円を1回のゲームに賭けて勝てばすぐ元の損は取り返せるんだから。1万ドルや2万ドルをちまちま賭けていても1億円を取り戻すのには大変な時間が必要ですからね。まあ、頑張つてくださいや。」

そこまで言つて陳は出ていった。征次は陳の言つた言葉を反復しながら小部屋に入り、便器に腰を降ろした。

「それもそうだ。あいつの言う事はしごく尤もな事だ。1億円稼ぐには1億円賭けて一発勝負をすれば瞬間で今までの損を全部取り返せるじゃないか。なんで今までそれに気づかなかつたんだらう。よし、やつてくるか。」

と、つぶやいて征次はトイレを出た。

昼を少し過ぎた頃、陳を見つけた征次が言つた。

「やっぱり陳さんが言つた様な賭け方をしないと負けた分は取り返せませんね。出来たら明日、1億円分を用意してくれませんか。」

「そうですね。征次さんみたいにあんな賭け方をしているのは絶対に1億円もの損は取り戻せませんよ。判りました。明日の昼過ぎ、丁度この時間に来てください。それまでにカジノの征次さんの口座に1億円を入れておきますから。」

征次は腕時計を見て時間を確認してうなずいた。

「じゃ、明日は征次さんの一世一代の博打を見せてください。待っていますよ。」

陳の言葉を背に征次はVIPルームを後にした。

翌日2時頃まで時間をつぶした征次がVIPルームに顔を見せると、陳がいつもの笑顔で近づいて来た。

「言われた様にちゃんと1億円分のお金をドルで征次さんの口座に振り込んでいますから、あそこの窓口でバウチャーを発行して貰って来てください。」

と言った。バウチャーとはカジノで使える金券のようなものだ。

征次は言われたように1ミリオンドルのバウチャーを発行して貰った。

テーブルに座るといつになく人が多い。ディーラーも今まで見たことの無い中年の男だ。ハゲ上がった頭に一目見ただけで判るカッラを乗せていかにも年齢でサバを読んでいると言った感じの男だった。征次が座ると同時に新しいカードを総て扇状に並べ、ゲームに参加している客へと確認させたのち、総てをバラバラにかき混ぜ、一纏めにして大きく二つに割り、その一つを何度もシャッフルした。続いて残る一山のカードも同じようにシャッフルし、二つの山をまとめてカードホルダーへと収めた。

ディーラーが手には何も細工をしていませんよとも言うように両手を広げ、手のひらを客全員へと見せ、ポンと手を打って、カードホルダーから数枚のカードを引き抜いた。引き抜いたカードは全員に見せられてテーブルの穴から捨てられた。いよいよゲームの開始だ。

征次はディーラーの前に1ミリオンドルのバウチャーを投げ出した。それを受け取ったディーラーはテーブルの上の所定の位置に横向きで置き、その横に25万ドルチップを4個置いて、フロアーマネージャーの確認を待った。寸秒も置かずマネージャーが来て、視

認し「オツケイ」と言い、征次にウィンクをして消えた。

征次は受け取った4個のチップを一度に賭ける度胸がまだ無い。4ゲームほどを他のプレイヤーが楽しむのをタバコを吹かしながら見ていた。今までのゲーム進行過程では自分の予想を総て満たしていた。いわゆる今までの4ゲームをバンカーサイドに賭けていれば4億円を稼いでいた勘定だ。でも次に来るのはどちらかが判らない。征次は25万ドルチップをディーラーの手元に放り投げた。それを受け取ってディーラーは1万ドルチップに替えて、そのチップの山を親指と小指を立てたげんこつで征次に押し返してきた。

征次はその中から10枚のチップをバンカーサイドのボックスへと積んだ。いわゆる1000万円を次のゲームに賭けたのだ。征次の手元に2枚のカードが配られた。いつものようにカードの上を軽く叩き、下の一枚を抜き出しカードの端を折り曲げるようにして見た。絵札だ。続いて残る1枚のカードも同じようにして見た。征次は二枚のカードを重ね裏返したままディーラーへとテーブル上を走らせる様にカードを投げた。受けたディーラーが表に返し、プレイヤーサイドのカードと並べ、バンカーサイドの勝ちを告げた。

「よし、幸先はいいぞ。」

征次はつぶやいて、勝ち金として掛け金の横にディーラーから積まれた10万ドルを前回は賭けた掛け金の上に重ねた。いわゆる次のゲームは同じバンカーサイドに20万ドルを賭けると言う意思表示だ。いよいよ考えていた1億円には及ばないが2000万円の博打だ。

ディーラーが「よろしいですね」と、掛け声をかけてカードを配り始めた。今回のカードはバンカーサイドが強よしと考えた数人の客の内、征次より多くの金額を賭けた客へと配られた。

「よし、やった。」

その客が表に現したカードを見て征次が大きく叫んだ。征次の前には更に20万ドルが勝ち金として積まれた。征次の声や勝った客の大声に周辺にいた人々が徐々にその位置を替え、征次の後ろ側に

集まってきた。勿論勝っている客を応援するためだ。征次はその勝ったチップを更に上に積み上げた。一つのタワーが建ったみたいだ。観客のざわめきにふと気がついた征次が振り返って見回すと数十人の観客が征次の掛け金に驚いて声援を送ってきていた。ふと征次は閃いた。

「待てよ、今までで何回バンカーサイドが来ている？1、2、3、
・・6回か。よし。」

征次は手を伸ばして総てのチップを手元にと引き寄せた。数えてみると1、3ミリオンドルになっている。少しはディーラーにチップとして引き算されているから1億2500万円ぐらいであろうか。よし今度は絶対にプレイヤーサイドに来る。征次は確信した。よし一世一代の博打だ。征次は持っている総てのチップをプレイヤーサイドのボックスへと押しやった。後ろでは「うわー」と言うざわめきが流れた。征次は注目されている自分を背中を感じていた。ディーラーが又々フロアーマネージャーを呼んで掛け金を確認させた。そのフロアーマネージャーは軽く「オツケイ」と言っつて、テーブルの横に立った。

カードが配られた。プレイヤーサイドに賭けている客は征次だけで他は総てバンカーサイドに掛け金が積み上げられている。

「ふふふ、見てろよ。みんなから巻き上げてやる。」

つぶやいて征次はいつもの様にカードの上を軽く叩いた。下側のカードを見た。折り曲げるのが少なくてカードの隅に有るはずの数字が見えない。もう一度折り曲げ幅を広げて見た。何とハートの2だ。最低のカードを引いてしまった。でもまあ次のカードで7を引けば合計9になる。次のカードは更に慎重に折り曲げて見た。そんな馬鹿な。絵札だ。

「ちくしょう」

言葉と共にディーラーの手元にカードを投げつけた。バンカーサイドのカードは合計で17のステイ。よし、あと1枚。ディーラーから配られた。

「7以上になればいいんだ。5でも6でも、7なら最高だ。プレイヤースイドのあとから配られたカードは7だったから、必ず小さなカードが続いて居る筈だ。よし来い。」

ディーラーの前に並べられているカードを見て、征次はつぶやきながら手元に配られた1枚のカードに手を伸ばした。

「よし、来たぞ」

征次がカードの隅を持ち上げて、数字が見えない事で、思った通り小さな数字が来た事を知って言葉を吐いた。

「うわー・・・」

後ろで大きなどよめきが起こった。征次が引いたカードはクロールバーの3だった。そのどよめきをかき分ける様にして征次はVIPルームをあとにした。

翌日、征次は弁護士事務所で陳からの電話を受けた。

「どうしたのです。今日は真面目に仕事ですか。」

「昨日はくやくして眠られなかったよ。今でも最後のカードが目の前をチラチラしているよ。どうだい、もう一度復讐戦をやりたいたいが今夜にでも1億円を用意してくれないだろうか。」

征次の答えである。

「そうでしょう。あそこまで勝ち進んでいたのに残念でしたね。でももし最初の2回のゲームにわたしが言った様に賭けて居たら今では2億円の大金持ちでしたよ。」

陳が煽るように言った。

「そうなんだよ。あそこで失敗だった。今夜はじっくり見極めて勝負をしたいんだ。」

「わかりました。早速ボスに連絡を取ります。では。」

と陳は言っただけで電話を切った。しかしその返事は征次が弁護士事務所を出るまで無かった。

8時きっかりに征次はVIPルームに立った。見回したが陳の姿が見えない。仕方なくバーへと行き、夕食を摂っていなかったので

積み重ねたサンドイッチを両手に掴んで座るべきイスを探した。

ウエイトレスが飲み物の注文を聞きに来たので征次は口にサンドイッチをほおばりながらビールを注文した。そのビールが届けられたところで陳がエレベーターから出てくるのが見えた。征次は声を出さず、陳に向かつて手を振った。

「昨日は残念でしたな。」

陳が真向かいのイスに座って、ウエイトレスにヘネシーを注文してから征次に言った。

「まあね。うまく行くと思ったんだけどなあ。でも今日は陳さんの言うようにやってみるつもりだよ。」

早く金のお話をしると言うように征次が返事を返した。

「そうそう、その事なんですけど、今日あれからボスの所へ行ってきましたよ。ボスと言うのにはね、貴方に貸すのは1億円をリミットとわたしに言ったそうなんです。だから今は貴方に2500万円も余分に貸してしまっていると怒られてしまいました。少し返して貰えますか。」

陳が決まり悪そうに言った。

「待てよ。それは無いぜ。まだ親父がゴールドコーストに居るから、金を動かす事は出来ないんだ。それは陳さんにも言っただじやないか。」

征次が少し慌てて言った。

「ええ、それはよく判っているのです。でもわたしはボスの言う通りにしないと命がなくなりますから。お願いしますよ。」

「そんなこと言われても、今すぐなんて出来ないですよ。」

「まあ。わたしも征次さんの言う事はよくわかるのですが、ちょっと待ってください。電話をしてきます。」

陳が言っただけで電話ボックスへと入った。数分出てきて言った。

「ボスと言うのですが。明日、ブリスベンの事務所の方へ朝10時頃お伺いしますとの事です。必ず居てくださいね。もし居なかったらわたしは貴方がどうなるかは知りませんからね。最初から命まで

は取りませんが、手や足の一本ぐらいは覚悟しててくださいね。
では明日10時に。」

征次の返事を聞こうともせずには陳はエレベーターへと消えてしま
った。

「えっ、先生、今日は早いですね。」

弁護士3人が共有して使っている秘書の内田遥香が朝の挨拶も忘
れて言った。

「うん、今日は10時にお客が来るからね。来たらず僕の部屋へ
通してくれたまえ。お茶は、うーん、コーヒーでもいいか。コーヒ
ーを頼む。お客が来てから人数分を隣の喫茶店に注文してくれ。そ
れにしてもみんな来るのが遅いね。もう9時半を過ぎているよ。」

征次が返事を返した。

「ええ、今朝は皆さん裁判所の日ですから。」

遥香が答えた。

「あっ、そう。じゃ、頼むね。」

征次は腰を挙げて自室へと入った。

「先生お約束のお客様が参られました。お通ししてもよろしいでし
ょうか。」

デスクに向かったままうつらうつらしていた征次はハツとして立
ち上がった。

「どうぞ」

入ってきたのは陳を先頭にして70歳程の白髪の紳士だ。続いて
のっそりと部屋に入りドアを閉めてそれにもたれかかる様にして立
った大男を征次は見て震え上がった。

「じゃあかけさせてさせて貰いますよ。」

征次が座れとも言わないので、白髪の紳士がそう言って、征次の
机の前にある、総革張り製の豪華な応接イスの一つに腰を降ろした。

「いかがです、貴方のイスですから遠慮なくお座りになったら。」

その言葉で征次はおずおずと腰を真向かいのイスに降ろした。

「まあそんなに堅くならないで、別に貴方を食べに来た訳じゃありませんから。まっ、端的にお話をしましょう。そうですね、この陳からの話では既に1億2500万円を私もからお使い頂いて居るそうでありがとうございます。ただ、私どもの貴方へ供する金額の上限を1億円としておりましたが、この陳が間違つて多くを貸し付けてしまいました。だから、昨夜はこの陳に少し痛い目をして貰いました。おい、陳の背中を見せてやれ。」

征次に言いながら、首を大男に廻して紳士が言った。大男が陳のうしろに廻り着ていたシャツを無造作に引き上げ、その身体を征次に見せた。一瞬征次の目は陳の背中に釘付けにされたが、気持ちを振り払う様に顔を背けた。

「昨夜、陳さんにも言いましたが、まだ親父がゴールドコーストの家に居るのでお金を動かす事ができ無いのです。数日中に日本へ帰りますからそれ以後でしたらすぐに返済出来るはずですよ。だからもう少し待つて欲しいのです。」

征次が震える声を抑えながらその紳士に言った。横から大男が大声の中国語で叫んだ。

「バカヤロウ、何をくだらねえ事を言つてやがる」

とでも言つたような感じに征次は聞こえて又々震え上がった。その時扉の向こうでガラガラガツチャンと大きな物音がした。ドアを開けて陳がウエイトレスに言った。

「お嬢さん、飲み物は要りませんから外へ出ていてください。」

その声を聞いて征次は又々震え上がった。

「まあね、先生。別に先生をどうこうするなんて事は考えておりませんから、そう堅くならないでお話をしましょう。先生だつてこんな大きな弁護士事務所を経営なさつておられるのですからこんな1億円少々のお金なんてはした金じゃ無いんですか。とりあえず、わたしが今日こうやって出てきたのですから、今用意出来るだけの金額は持つて帰らせてくださいよ。いかがです。ちよつと事務員さんをお呼びしましょうか。おい。」

征次には優しく話し掛けるのだが、最後に大男に向かって指図する顔は親分顔丸出した。遥香が呼ばれて部屋へと入ってきた。

「お呼びでしょうか。」

遥香も部屋の雰囲気を感じて客を見ないで征次に向かって聞いた。

「うん、今現在現金では幾ら銀行にあるのかい。」

征次が聞いた。

「えっ、よろしいのですか。こんな所で言っても。」

遥香が焦って聞いた。

「ああ、お嬢さん。私どもには気兼ねなく、先生に聞かれた事は素直に話してあげてください。」

その紳士が優しく言った。

「はい。昨日確認致しましたが残高は120万円と少々です。」

「何だっつて、そんな物しか残っていないのか。他の口座はどうなんだ。」

征次が遥香の答えに動揺して聞いた。

「他の口座と言いましても、別会社の方は完全にマイナスになったままですし、信用口座には亀川様からの入金が5000万円程あるだけです。」

遥香が答えた。

「何だ、有るじゃないか。それを全部降ろしてきてくれるかい。」

征次がホツとして言った。

「えっ、でもこれは信用口座で私どものお金ではありませんよ。」

遥香が慌てて言った。

「なに内田君言っているんだい。その口座も僕の口座だろうだったら何も問題が無いじゃないか。出して。出してきてくれ。」

征次はイライラしながら遥香に言った。

「あのお、先生。信用口座ですから、先生のサインだけではお金を出すことは出来ないんです。」

遥香がこんな所で先生に信用口座の解説までしなくてはならない

のかと思つた所へ、

「先生、信用口座と言うのは先生を信用してお客様が一時期口座を借りているというわけだから先生のお金じゃ無いんですよ。でもその本人のサインが入つた委任状があれば出すことが出来るのですよ。委任状はお持ちですか？」

その紳士が言葉を繋いでくれた。

「へっ、そうなのか。でも亀川さんのサインを貰つた白紙は有つたな。」

征次が遥香に聞いた。

「はい、確か亀川さんが会社を設立なさるときに必要な事が有るかも知れないから余分にと、白紙にサインをしていたいただいたものが数枚有ると思います。」

遥香が答えた。

「よし判つた。それを一枚持つてきなさい。」

遥香はしかしと、言いたそうな顔だったがドアを開けて出ていき数分後に一枚の白紙用紙を持って入ってきた。

「じゃあそれに委任状としてタイプしてくれたまえ。」

征次が言つた。

「えっ、あのうわたしには出来ません。」

遥香が違法行為に携わるのはイヤだと拒否をした。

「何を言っているんだ。委任状を書くだけだろう。」

征次が強く言つた。

「でも、イヤです。わたしには出来ません。」

「まあまあ、二人ともそんなことは言つてないで、先生直々に書かれるのが筋道じゃあないので、先生直々に書か

紳士が遥香に助け船を送ってくれた。

「でも、先生は書けませんもの。」

遥香が紳士に言つた。

「えっ、弁護士の先生が委任状を書けないのですか。」

とビックリ顔で征次に向かつて言つた。征次は下を向いたままだ。

「おい陳。お前が草案をペンで別の紙に書け。そのパソコンで打ち込んで貰うのは先生にやって貰う。パソコンぐらいは打てるでしょうね、先生。」

紳士が聞いた。

「はい。少しぐらいは・・・」

征次が、しおれた花がいつそうその茎をしおらせた様につぶやきながら頭を下げた。

「よし決まった。陳、その先生の机を使って書け。そうそうお嬢さんその間に日本茶が有りましたら、この爺さんに一杯入れてくれませんかね。」

紳士は陳に言ったその顔を遥香へと向け替えてやさしく言った。

第十四章 大陸一周旅行

第十四章 大陸一周旅行

「いやあ、香山さん1年は難しいですね。あつちろろろ、こつちろろろして時間をつぶしても車で走る分には時間が過ぎ去るより先に目的地に着いて、時間が余って仕方が無かったですよ。」

8ヶ月を経過してゴールドコーストへと帰ってきた小野原勉が香山に言った。

「そうでしょう、幾ら広大なオーストラリア大陸と言えども、自動車と言う文明の利器を使えば早ければ1ヶ月で走り抜けられますからね。所で恐竜の発掘はどこかでやってみましたか。」

「はい、走っていると結構何かを掘った跡地みたいなのが見受けられましたので、その都度いちいち車を寄せて穴へと入って行き調べてきましたよ。香山さんに聞かされていたパースの博物館で館長さんにも会えましたし、2週間程毎日通いました。あそこは凄いですね。毎日行つて飽きませんでしたからね。それにしても、やっぱりオーストラリアは広いですね。実感しました。香山さんに聞いていた地平線や、三角道路の話は実際のところ想像が出来なかったのですが、現実に行つて見るとやはりビックリしました。ブルームで月の階段なんかも見てきましたよ。あそこは結構日本人が居ますね。月の階段を見ている時に、日本人の若者男女5名がみすばらしい車に乗り合わせて来ていました、わたしの泊まっているモーテルの庭でバーベキューをして久し振りの日本語を楽しみました。日本で生活していると全く縁の無い事が非常に多くて、数限りないファーストエキスペリエンスを経験させてもらいました。」

その後、延々と小野原勉の体験談が繰り広げられ夜の明ける頃、

それぞれの部屋へ入り眠りに就いた。翌日、2台の車を連ねて香山の山荘へと向かった。

「ゴールドコーストも良いですけど、オーストラリアを一周してきてから見たこのダルビーは身近に親しみを持つ事が出来ます。楽しみだなあ。いよいよ本格的な建設と恐竜探索が楽しみですな。」

山荘に着いて改めて乾杯の時だ。小野原勉がしみじみと言った。

「さあ明日から材木の切り出しに裏の森へ入りますよ。裏の森はワンダーフォレストと名付けましてね。約5万坪程あるのですが、何度入っても方角を間違えるものですからワンダーフォレスト。つまり不思議の森ですな。あとで長いこと使っていないチェンソーのチェックもしておきます。」

いよいよ小野原勉の山荘を香山の山荘のある敷地内に建てる作業に取り掛かるのだ。小野原勉は子供時代、学校の遠足を待つ前夜のような気持ちでベッドに入った。

第十五章 大船碓禎治

第十五章 大船碓禎治

大船碓禎治は千葉県を基盤にしたやくざで、非構成員も入れると500人を越える組織の長である。元々テキ屋の親分として代々続いてきた。そこへ全国組織の暴力団から参加の手が伸びてきて、大船碓禎治の代になってその傘下に編入された。今までは自分が一番であったはずだったのが上に何段にもわたった親分衆が出来、それなりの義理を果たさなくてはならない立場へと変わった。その全国組織暴力団の舎弟、中沢組の中沢が大船碓禎治の上に付いた。中沢の女が千葉市内で小さな料亭を開いている。女の名前は川島晴美と聞いた。小股の切れ上がった、顔の小さい、気さくな美人である。年の頃は30を少し越えた頃だろう。大船碓禎治も中沢に気を使って会合などには必ずこの料亭を使っていた。

「姐さん。」

「姐さんはやめて。お願い晴美って呼んで。」

そんなある日、ふとした事から二人の間に関係が出来てしまった。常に関西へと出掛ける中沢では満足出来ない晴美の方から近づいたものだった。

大船碓禎治にも妻とは別に2人の女がいて、それぞれに1人ずつ子供があった。亀井靖子には千葉市内で小料理屋をやらせている。その息子が今、ゴールドコーストへ行き、大学で勉強をしながら不動産に手を伸ばし、随分と金を稼いでいる。勿論その元になる金は大船碓禎治が送り与えたものだ。

「こんな事を続けていると、いつかはばれる。その時は靖之の所へでも逃げるか。」

晴美の腹の上で大船碇禎治は考えていた。

「ねえ、何を考えているのお。もつと、もつと強く。お願い・・・」
晴美が声を絞らせて言った。

「親父、昨日銀行から電話があつた。なんの金だよ。2億円なんてビックリしたぜ。送つてくるときは何とか連絡ぐらいくれよな。」

久し振りにオーストラリアの靖之から電話が入つた。

「こつちにあつた山が少し売れたから、今更使い道も無いからそつちへ送つたんだ。土地でも買う資金にしてくれ。」

大船碇禎治がタバコに火をつけながら言った。

「そつなんだ、オツケイ、じゃあ遠慮無しに使わせて貰うよ。」

電話の向こうから靖之の弾んだ声が聞こえた。

「それからな、少しずつ金をそつちへ送るから、定期預金でも作つて置いてくれるか。俺も歳だから、そつちへ行つてゆっくりしたくなつたんだ。こつちじゃどこに居てもうるさいからな。買った家もまだ見ていないしな。」

大船碇禎治が少し物思いに耽つた感じで言った。

「おいおい、どうしたんだよ。親父らしくないぜ。もし俺が必要なら帰つても良いんだぜ。」

電話の奥で靖之が心配そうに言った。

「まあな。こつちはこつちで色々と面倒な事があつてな。たまには俺でも弱気になる事もあるさ。まあその時は頼むわ。おつと誰か来たよつだ、じゃ、頼むぜ。」

それだけ言つて大船碇禎治は受話器を置いた。

第十六章 身代わり

第十六章 身代わり

「おい、ちょっと出掛けてくるぜ。」

大船碓禎治が玄関の式台に立った。

「あつ、親分。どちらへ。」

そこにいた若衆が驚いて聞いた。

「どこでもいいじゃねえか。携帯電話は持っていくが、2時間ぐらいはならすんじゃねえぞ。」

「へい。じゃ車を回してきます。」

若衆が飛び出そうとするのを大船碓禎治は制して言った。

「待て待て、今日は俺が運転していくから誰も付いて来なくていい。」

大船碓禎治は靴を履いて敷地内の駐車場へと歩き、セルシオにキ―を差し込んだ。V8のエンジンが快さそうに力強く回転の振動を大船碓禎治の身体に伝えてきた。

着いたところは住宅街に埋もれたひっそりとしたモーターだった。電話で聞いていた部屋番号へと車を進め、そのガレージへと入れた。部屋へ入ると既に風呂を済ませ妖艶な姿態にバスタオルだけを巻き付けた晴美が迎えた。

「遅かったわねえ。もう待ちくたびれたわよ。お詫びに思いっ切りかわいがってもらおうよ。」

「馬鹿、俺だつて忙しい身体なんだ。はいそうですかっつて出掛ける訳にはいかないんだぜ。それよりか、お前の方で気が付いちゃいないか。中沢がどうも俺達の事に気づいた様子があるんだ。」

大船碓禎治はすがりつく晴美を押しよけるようにしてイスに腰を

降ろしタバコを取り出し火を点けながら言った。

「えっ、どうしたのよ。そんな事ないわよ。わたしの所へ来ててもそんな事何も言わないし。忙しそうにしているだけよ。」

晴美も大船碇の横に腰を降ろして言った。

「ならいいんだ。でもやっぱり気になる。そろそろ俺達もおしまいにしなくちゃなあ。」

「どうして、どうしてなのよ。そんなのいや。イヤよ。」

大船碇禎治の言葉に晴美が驚いて立ち上がり、すがりついて言った。

「なあ考えてもみるよ。俺達の事が中沢にばれた時の事を。俺達はどちらも生きては居られないんだぜ。」

大船碇禎治は晴美の両肩を握ってその身体を揺すりながら言った。「でも、イヤ。別れるなんて。」

晴美は目に涙を溜め、か細い声で首を大きく振りながら言った。

「よしよし、もう泣くな。俺は風呂に入ってくる。」

大船碇禎治は晴美の身体を離して立ち上がり風呂場へと行った。

タオルに石鹸を塗りつけて自分で身体を流し始めた時に、後ろの扉がそろつと開き、

「背中流しましょうか。」

と晴美が入ってきた。

「おう、じゃ流してもらおうか。」

と伸ばされた晴美の手にタオルを大船碇が渡した。晴美は渡されたタオルを手にしたまま、大船碇禎治の背中を見つめた。

「おい、どうしたんだ風邪を引くじゃねえか。」

大船碇禎治の言葉にハツとした晴美が

「あっ、ごめんなさい。」

と言って大船碇の背中をこすり始め、すぐその手を止め背中にむしゃぶりついた。

「いや、別れるなんてイヤ。」

「そんなこと言ったってしょうがねえだろう。お前は姐さんだし、

俺は傘下の組長だぜ。見つかったらそれこそお終いだ。いつまでもめそめそしてねえで。俺は風呂に入るぜ。」

背中の晴美を振りほどいて大船碇は浴槽へと入った。

「じゃ、本当に今日が最後ね。だったら思いつ切り愛してちょうだい。」

晴美が洗い場で下を向いたまま言った。

「よしよし、じゃあこちらへ入いな。」

大船碇は浴槽に晴美の入る余地を作ってやって言った。

「いいの、いいから首のここを絞めて。ああいい、来て、もっともっと…強く。駄目もっと強く、うっ、うっ、いいわあ。」

大船碇禎治は今までの晴美から、聞かされた事のない注文に一瞬ドギマギしたが、首を少し絞めた時に晴美の下半身に起こる痙攣に自分自身も大きな高揚を受け今までに無い快感を享受し、

「おう、こんな事誰に教わったんだ。」

つい言葉で聞いてしまった。

「いや、そんなこと聞いちゃ。もっと続けて。いい、いい。もっと強く。」

「おっ、おっ、待てよ、これじゃ俺も早くからいつちまっじゃねえか。」

大船碇禎治が手を離して言った。

「駄目よ。離しちゃ。いっても良いから、続けて。そう、強く、駄目。もっと強く。グフツ。いい。いい。いいわあ。」

「よし、なら、これでどうだ。」

「ぐふっ、ぐふっ。いい…いいわあ。ぐふっ。」

「行く、行く。いくぜえ。」

大船碇禎治が大きく射精をしたのち、晴美の身体から離れた。

「今日のお前は凄かったぜ。こんな遊びが有るなら何故もつと前に教えなかったんだ。」

大船碇が背を向けて言ったが、晴美は黙ったままだ。ふと大船碇

が振り返って晴美を見た。彼女の胸の動きが見えない。大船碓は慌てて抱き上げてみた。晴美の手は引力に逆らうことが出来ない様に垂れ下がったままだ。

「おい、どうした。おい。」

大船碓は晴美を何度も揺すった。しかし目も閉じられたままで身体の総てから力が抜けきっていた。大船碓禎治は焦った。今ここで救急車を呼ぶわけには行かない。それに晴美は完全に死んでいる。殺意が有って殺した訳では勿論ない。事故なんだ。でもそれを言っても誰も聞いてはくれないだろう。これで俺の組も俺自身もお終いだ。

何て事だ。

大船碓禎治は自分で自分の頭を叩いた。そんなことをしてもどうなる事でもないのだ。考える。考えて何らかの打開策を見つけてせふとテーブルの上に乗っている携帯電話を見た。

「そうだ、誰かを身代わりにすればいい。誰だ。誰がいい。」

大船碓禎治はつぶやいた。舎弟の名前を順番に考えて行った、続いて代貸し。

「そうだ、坂本だ。あいつならやれそうだ。」

指名する人間を見つけたし、電話機を取り上げた。しかし、まだ気持ちが悪く揺れている。大船碓は冷蔵庫からビールを取り出し、一息に飲み干した。

「おう、俺だ坂本はいるか。」

大船碓禎治が組に電話を入れた。

「おう、坂本か。今から俺が言う通りにしろ。判ったな。側に誰かいるのか。」

「いえ、俺だけです。」

組長から直接声をかけられた坂本が電話の向こうでおどおどした声で言った。

「そうか、よく聞くんぞ。お前、今からリンカーンを転がして、山上町の桜山モーターの前に停める。そうだと良く聞け。そして車を

ロックして3号室のドアを3回軽く叩け。そうしたら俺が出る。判ったな。誰にも言うんじゃないぞ。どこへ行くと聞かれたら俺を迎えに行くだけ言え。判ったな。今すぐ出る。」

「はい、判りました。」

電話が切れてから15分ほどでドアが打ち合わせどおり叩かれた。

「よし、入れ。」

ドアを開けて大船碇禎治が坂本を入れ、ドアの外へ顔を出して周囲を見た。誰もつけている奴はなさそうだった。

「よし、ちゃんと通った通りにしただろうな。」

「はい、誰にも何も聞かれませんでした。」

坂本は組長直々の呼び出しでまごつきながら答えた。

「それならよし。まあそこへ座れ。」

大船碇禎治は応接イスを指さし自分もその向かいに座った。

「おう、お前を男と見込んで頼みが有る。俺の頼みが聞けるか。」

「はい、な、何でも聞きます。」

坂本はここからどこかへと鉄砲玉として送られるのでは無いかと思いい、ビクビクしながら返事を返した。

「そう堅くなるな。お前に楽しい思いをさせてやろうとしているのだ。もし俺の言うことを聞けば、お前を舎弟に迎えてやろう。いや、兄弟としてやってもいい。しかもシマも持たせてやるぜ。どうだ気分がいいだろう。」

大船碇禎治が言った。

「は、はい。そんな大それた事が俺に出来るんですか。」

「なに、お前が考える程大それたことじゃあねえ。ちょっと2年ほどムシヨ暮らしをしてきてくれればいいって事だ。約束通り帰ってきたらハク付きでお前は俺の兄弟分よ。どうだ出来るか。」

大船碇禎治の言葉を聞きながら坂本は考えた。話の内容から考えて命がなくなる事は無さそうだった。しかし話が余りにもうますぎる。断ればこの世界では生きていられないだろう。どんな話しても乗るしかないと思った。

「はい、判りました。組長の為なら何でもさせて頂きます。」

「よし、それでこそお前は男だ。心して聞けよ。お前は女をここへ連れ込んだ。そうだ女を連れ込んだ事にするんだ。そうして普通にあれを楽しんでいるあいだに、女が首を絞めてくれと頼む。そうすれば気持ちがいいからだ。そこで誤って強く絞めすぎて気が付いたら相手が死んでいた。そこでモータールの事務所に電話をして救急車を呼ばせるのだ。勿論さつがくる。そうしたら今俺が言った通りに言うんだ。間違つて殺してしまったと言うんだぞ。そうしないと過失と殺人とは大きな違いが出る。それはお前でも判るだろう。どうだ。」

「へい、わかります。」

「そうなればせいぜい2年で出てこられる。弁護士は最高のを俺が付けてやるから安心して行ってこい。判ったな。」

「はい、判りました。その女と言うのは誰ですか。」

坂本が聞いた。

「バカヤロウ。まだ話の途中じゃねえか。良く聞け。その女はこのベッドで寝ている。俺が出ていったあと、お前は裸になって風呂でも入れ。そうしてやりたければその女を犯してもいい。それから俺が先に言ったようにしろ。これがセルシオのキーだ。お前のリンカーンのキーをよこせ。それから女の事だが、お前の知らない女だ。道で引っかけた事にしろ。判ったな。」

「はい、判りました。組長よろしくお願いします。」

坂本が立ち上がり頭を下げた。

「よし、あとは任せておけ。頼んだぞ。」

大船碇禎治は立ち上がり坂本の手を握り言い、キーを受け取り部屋から出ていった。ドアを開けるときもモータールから出るときも廻りを見回し、誰もいないことを確認してリンカーンのドアを開け、運転席へと座った時に大船碇禎治は全身の力が抜けるのを感じた。しばらくイスに身を任せてからキーを差し込みエンジンを始動させた。快い振動が大船碇禎治の身体を包んだ。

「これで俺は安泰だ。」

大船碇禎治はつぶやいて車を走らせた。モーターの影から密かに
見ている者のあるのを知らずに。

第十七章 崩壊

第十七章 崩壊

そんなある日、江沢会の江沢卓也から大船碇禎治は電話を受けた。「久し振りやのう。景気はどうだ。ちよつとお前さんに相談事が出来ちまつてなあ。久し振りに会わねえか。」

江沢卓也は関西から進出してきた全国組織の山脇会から送り込まれた、いわば後発傘下の大船碇組などの目付役だ。いつも真つ白なスーツに身を固め、廻りに10人程のボディガードを引き連れている。サングラスを外したのを見たことが無いので本当の顔を見た千葉県内の組長はいない。それぞれの組内部で不穏な動きなどを見つけたらいち早く本部へと注進するスパイのような奴だ。

その上、本部から千葉と言うシマを自分が貰ったかのように、常に大船碇禎治などの上に君臨したかのような振る舞いをする。虫の好かない奴だが、本部の人間である以上無碍に断る訳にもいかない。「そうだな。久し振りだから銀座へでも足を伸ばすか。」

大船碇禎治が答えた。

「いやいや、そんな時間は勿体ない。ちよつと話したい事があるので、おやつさん一人でリンカーンを運転して俺を迎えに来てくれなしか。パークホテルの玄関で3時。この時間なら無理はねえだろう。ほんの10分程で済む話だ。待つてるぜ。」

大船碇禎治が次の言葉を出す前に電話は一方的に切られていた。「なんだあの野郎、勝手なことばかりほざきやがって。俺一人で来いだと。何様だと思つてやがる。それにしても、今時奴から電話をしてくるなんて薄気味悪い事だ。別に組の中でトラブルがある訳でもなし。廻りとも仲良しクラブごっこをしているし。」

受話器を見つめながら大船碇禎治はつぶやいた。

それでもその薄気味悪さが勝り、大船碇禎治は1時間程時間つぶしをしたのちにリンカーンを運転してパークホテルの玄関へとつけた。同時にドアボーイではなく、いつもの白いスーツに身を包んだ江沢卓也が運転席のドアを開け、

「おやっさん、俺が運転するから、そっちへ移ってくれませんか。」
と言って、身体を運転席へと入れた。仕方なく大船碇禎治は助手席へと移動した。

「へへっ、こんな話は車の中が一番なんでね。まあ行き先は任せてください。」

江沢は慣れた手つきでリンカーンをホテルの玄関から滑り出させた。

「聞くところによると、おやっさんの息子。何て名前でしたっけ。あのオーストラリアへ行っている。そうそう頼之さんでしたな。随分と稼いでいるそうじゃないですか。まあ結構なことですけど、ちよっと相手を見て商売はしてもらわな困りますぜ。」

助手席の大船碇禎治に目を配りながら運転を続け江沢が言った。

「何の事だ。」

事実息子がやっている商売に関しては全く知らない大船碇禎治が聞いた。

「おやっさんも御存じの関西の親分が姐さんに買ってやったゴールドコーストの別荘なんです。おやっさんの孝行息子が売りつけたらしいんです。まあそれまでは商売だから何も問題はありませんが、しかし、その売りつけた値段があとで問題になりました。何でも、聞いた話ですが8000万円程度の家に1億6000万円も払わせられたそうです。ちよっと玉取れなんて話になったそうですが、騙された方も悪いと本部の方で留めたそうです。」

聞いて、大船碇禎治は靖之ならばやりそうな事だと思ったが、
「靖之が売ったと言うのは不動産の仲介だけじゃあないのか。」
と聞いた。

「へへへ、そう言うと思つてましたよ。ちゃんと俺が行つて調べてきました。それがなんと売り主はおやつさんなんですよ。厳密に言えばおやつさんの作ったオーストラリアの会社なんですがね。」

車は静かな住宅街をゆっくりとした速度で走っている。

「待て、俺はオーストラリアなんかで会社なんか持つていないぞ。」

大船碇禎治が言った。

「そうですね。会社の登記関係は登記所のコンピュータで閲覧できますけど、書類関係は税理士の所に保管されているんです。まあその税理士まで行ってきましたよ。その書類には素晴らしい筆跡で大船碇禎治と書かれていましたぜ。でも俺にはピンと来ました。これはおやつさんじゃあ無いとね。だつておやつさんは英語なんて書けやしませんよねえ。と言う事は、おやつさんの名前を使って作った会社を利用して中抜き取引をしているのは息子さんじゃありませんかねえ。」

江沢が車を停めて、大船碇禎治に身体の向きを変え言った。

「江沢さん良く判つた。近々俺がオーストラリアへ行って靖之から一切を聞き出してくるぜ。」

大船碇もこれ以上とぼけられないと考え言った。実際、近々にオーストラリアへとは行くつもりだった。

「じゃ、この話は終わりにして、もう一つの話ですわ。」

「何だまだあるのか。」

「へい、俺もあつちこつち走らされて結構ふところが寂しくなってきたので、おやつさんに助けてもらおうと思つているんです。」

江沢が言葉は丁寧だが、強い押しつけを感じた大船碇禎治が言った。

「待てよ、上納金は間違いなく納めているぜ。その上に何がいるんだ。」

「いやいや、上納金なんかの事じゃ無くて、俺自身のふところ具合の話しなんです。」

江沢が背広の襟を持って内ポケットが見える様に広げて見せた。

「ふざけんじゃねえ。何で俺がてめえのふところを満たしてやらなくちやならねえんだ。」

大船碇禎治が怒気を含んで言った。

「まあまあ、おやつさんそう怒りなさんな。ところで、1ヶ月前でしたかなあ、お宅の坂本君でしたか、中沢ンとこの姐さんを殺して刑務所へ行ったのは。そうそうそのモーターって確かここでしたよね。」

大船碇禎治は言われて、外の景色を始めて見た。なんとそこは桜山モーターの前だった。しかもリンカーンが停まっている所は、大船碇が乗り換えた場所である。大船碇禎治の顔が硬直した。

「あの坂本君は可哀想な事をしましたねえ。いや、そんな話は別にして、おやつさん、ちよつと1000万程都合をつけてはくれませんか。俺は使い走りばかりやらされているのでシマを持っていないみたいなもんで、若い衆養うにも苦しいんですわ。何とか助けてやってください。」

大船碇禎治の硬直した頭には江沢の言葉も入ってこない。

「ね、親分。1000万。いつ頼めますかい。」

江沢の再度の催促でふと我に返った大船碇禎治が言った。

「よし、1000万だな。明日昼過ぎに取りに来い。」

「判りました。さすが大船碇組の組長さんだ景気がいいや。」

江沢がそう言っつて窓から合図をすると一台のベンツが横付けされた。

「じゃあ、おやつさん明日またお目にかかります。お気をつけて運転してください。」

と江沢が言っつてベンツの後部座席に身体を移した。

しばらく唾然としていた大船碇禎治だが、

「奴は知っている。奴は知っている。」

とつぶやいた。

第十八章 弁護士事務所の崩壊

第十八章 弁護士事務所の崩壊

数日後、熊谷弁護士事務所の会議室に3人の弁護士と内田遥香が揃った。

「みんなも内田君から聞いただろうが、熊谷弁護士が客の金に手をつけたと言う事はひいては我々の立場にも響いて来るはずだ。亀川さんは熊谷弁護士のお客さんだからとは言え、ここにこうして働いている我々にも飛び火は必ず来る。そこで僕は今日限りでここを辞めようと考えている。今僕が持っているお客さんは30人程だがこれを総て持ってゴールドコーストの知り合い弁護士事務所へと移籍するつもりだ。撲自身の決意は今言った通りだが、みんなの気持ちも聞かせて貰いたい。」

熊谷弁護士事務所では最高の知識と実力を備えている吉川が言った。

「吉川さんは顔が広いからいいなあ。僕なんか事務関係だけだったので、他の事務所との繋がりが無いからどうすることも出来ませんよ。」

内山弁護士がつぶやいた。

「何を言っているんだ。もし君がここに残ったら、委任状を君が作ったなんて言い出しかねない人だから熊谷さんは。そんな扱いを受けてもいいのかい。」

吉川が内山に言った。

「それは困るけど、昨日の今日では就職先も無いし、僕みたいな弁護士のたまごは雇ってくれる所は無いんじゃないかな。こんな事になるなんて考えてもみなかったから蓄えも無いし。」

内山が芯から困ったように言った。

「俺は、吉川君と同じ意見だな。俺も今まで次の就職先なんて考えていなかったから不安は有るが、もし今のままでいたら犯罪者にさせられるかも知れないしな。」

横から河村弁護士が言った。

「よし判った。内山君もすぐに就職先が有れば移りたいと言う事と解釈して良いんだね。」

吉川が内山に返事を求めた。

「そりゃあ、出来たらそれに越したことはありませんよ。僕はここにおいても先輩二人が総ての仕事をするので直接のお客さんを持っていませんしね。もしお二人が出られても知識と経験の無い僕にはあの先生に代わってここを運営する力も有りませんからね。」

内山弁護士が言った。

「よし決まった。既に内田女史には了解を貰っているのです。4人揃ってゴールドコーストへ移籍しよう。そうすれば熊谷先生の2人の客は先生に任せて、それ以外のこの客は総てをそちらへと持っていけるからな。歓迎されるぞ。」

吉川が言った。

「なーんだ。そんな話しになっているのですか。吉川さんも人が悪い。」

内山弁護士が言った。

「それにね、それぞれの宿舍が決まるまでは1軒の家まで貸してくれるそうなんだ。ウォーターフロントの家だそうだ。部屋もちゃんと4つ有るそうだぞ。」

吉川が付け足した。

「えーそれは凄い。そんな話ならもつと前でもよかったのに。」

河村も言った。

「じゃあ、今日でこの事務所は熊谷弁護士だけが残ることになる。それぞれこの用紙にサインをしてくれ。」

吉川が出した書類はそれぞれの名前が打ち込まれた退職届けだった。

た。

「さすが吉川さんだ。用意周到。でもね。熊谷先生がこれを読める
ンでしょうか。」

「内山君、何言ってるんだ、そんなこと当たり前じゃないか。」

河村が言った。

「でも、これって英語ですよ。」

内山の言葉に全員が声を合わせて笑った。

第十九章　　ダルビー警察署

第十九章　　ダルビー警察署

白骨死体発見後、しばらくの間はダルビー警察署からは何の連絡もなく、香山も小野原も二人の会話の中から事件の話題は消えていた。しかしあの事件以来二人は共同して河川底探索に出掛けるようになっていた。そんなある日、香山の携帯電話で殺人課のジェイソン課長からの言葉を受けた。

「その節は失礼しました。早速ですが、例の白骨死体の身許が未だに判らないのです。ただ当地には無いワイシャツのクリーニングマーク様なものと、背広の生地から外国人、特に東洋人と言う感触を得ているのです。勿論、体型などからでも東洋系人だと考えているので、暇な時で結構ですから署まで起こし頂いてマークなどを見て頂きたいのです。いわば協力をお願いしたいのです。」

ジェイソン課長の言葉は丁寧そのものだった。

「ジェイソン課長が小野原さんに協力してくれと言ってきましたよ。」

今日は夕食当番が香山で、メニューは野菜ふんだんの焼き肉だ。

テーブルにポータブルコンロを置き、共に肉や野菜を焼いている時にビールをうまさうに呑んで香山が小野原に言った。

「へー、まだ身許すら掴めていなかったんですね。あれからもうかれこれ1ヶ月が過ぎるでしょう。こちらの警察はのんびりだなあ。」

「じゃ、明日にも行きますか。」

「でもねえ、わたしはあんまり行きたくはないのです。最初に殺人犯と思われただけでも気分が悪いのに。また彼の顔を見ると腹が立つてくるような気がするんですわ。」

香山が気が進まない様な顔で言った。

「それは困りますよ。香山さんが行ってくれなかつたら通訳が無いじゃないですか。」

小野原が肉をほおばりながら言った。

「何を言ってるんです。もう小野原さんに通訳なんか要らないですよ。」

「いやいや、香山さんは治安判事でもあるし、警察用語を英語で出来るじゃないですか。わたしはまだ生活用語だけですからね。お願いしますよ。」

小野原は既に捜査に参加する気である。やはり警察官根性は死ぬまで抜けそうに無い。

「まあ毎日が暇人ですから、良いですけどねえ。」

「香山さんには言ってますませんが、恐竜を勉強している時にわたしは恐竜探偵になってやろうと思ったのです。だからそれが本物の探偵になってもかまわないじゃないですか。ひよつとしたら面白い人生が送れるかも知れませんよ。」

小野原が誘い水を送った。

「ほう、そうですか。じゃあ、小野原さんがシャーロックホームズでわたしがワトソンですな。そう考えたら面白そうですな。」

香山も乗ってきた。

翌日、早朝から車を走らせ、ダルビーの町中でワレゴハイウェイ添いにある警察署へと入った。

既にジェイソン課長も出署しており、二人は案内されて警察署の一番奥にある死体安置室へと足を進めた。そこには白骨が元通り組み立てられてステンレスのテーブルの上に寝かせてあった。

「散逸した人骨を元の骨格に組み立てる方法はね、最初に腰の部分の寛骨と中央の仙骨を組み合わせて骨盤をつくり、これを基にして脊椎骨を一番下の第5腰椎から順に上に並べて行くんです。そしてそれに頸椎をつなげ、その第1頸椎の上に頭蓋骨を乗せるでしょう。」

続いて下肢の組み立てをするのです。骨盤と大腿骨を結合して、その下に頸骨をつける。頸骨の下は足骨を並べるのですが、左右の骨が混じり合っているので一つ一つ見分けながら並べて行き、最後に足首から指先迄の骨を右左確認しながら並べます。そして最後の作業に上肢ですね。腕が終わると手の骨を組み立ててジグソーパズルが完了するのですよ。」

小野原が香山に説明してくれた。

「なるほど、わたしはジグソーパズルの愛好者ですし、恐竜の組み立てに近いものですから何となく判ります。でも人骨のパズルはやりたくないですなあ。」

二人が話している間にジェイソン課長と課員と見られる制服警官が別のテーブル上に白骨死体が所持、着用していたそれぞれの物を並べていた。

「何を話しているのです。」

ジェイソン課長が香山に尋ねた。

「今、小野原さんがこの骨パズルの組み立て方を教えてくれたのです。」

香山が答えた。

「なるほど。じゃ、とりあえず電話で話しましたワイシャツから見てもらいましょうか。」

と、別のテーブルに向きを変えて指さして言葉を継いだ。

「これなんです、この赤い糸で字のような記号があるでしょう。貴方は何だと考えますか。」

香山も小野原も指さされた部分を見て、一目でわかった。実際通訳なんか不要だが香山は小野原に

「このマークを見て何だと思うと聞いていますが、一目でわかりますよね我々には。」

と言った。

「そうですね。100パーセント日本人ですね。しかも左側の小指の第一関節から先がありません。第二関節の先端に刃物跡が見受け

られるので人為的に切断されたものと考えます。日本人でしかも小指が無いとなれば、やくざ。いわゆるジャパニーズマフィヤです。」香山に向かって話していた言葉を途中から英語に換えてジェイソン課長に向かって小野原が話した。

「そうですか。やはり我々も日本人では無いかと考えていたのです。早速インターポールを通じて日本の警察庁に依頼をする事にします。」

ジェイソン課長が言った。

「何でしたら、今から日本の警視庁へ電話を入れてわたしが聞いて見ましようか。」

小野原がジェイソン課長に向かって言った。

「おう、それは良い。ではこちらの電話を使ってください。」

ジェイソン課長が1分でも早い方が良いと電話機を指さしたので、小野原は元の古巣の丸の内署へ電話をした。

「元、1課にいた小野原勉です。山本君をお願いします。」

電話の向こうでは課長が叱咤激励している声が聞こえる。小野原は久し振りに聞くその声を懐かしく聞いていた。1分程で山本が出た。

「珍しいですねえ。オーストラリアへ行ったと聞いていたのですが、帰って来ているのですか。」

「いやいや、今オーストラリアから電話をしているんだよ。みんな忙しそうだね。電話の後ろからピンピン聞こえてくるよ。」

小野原が言った。

「ええ、昨年の暮れから連続殺人事件がありました。一昨日に同様手口で4人目の被害者が出たのです。だから課長が必死になって叫んでいるのが聞こえるでしょう。」

「なるほどねえ。忙しいところ申し訳ないんだが、ちょっと調べて貰いたい事が出来たんだ。実はこの電話もクイーンズランド州のダルビー警察からかけているんだが、こちらでの殺人事件の第一発見者に僕がなって今はその捜査に協力する事になってしまったんだ。」

「へー、小野原さんらしいですね。それで何を調べたらいいんですか。」

「うん、ここ1年ぐらい前からオーストラリアに来て行方不明になっている丸暴関係者がいないかを知りたいんだ。」

小野原が一言一言確実に伝わる様に言った。

「丸暴でも小者は判りませんが、大物が一人おりますよ。」

「なんだと。」

小野原が叫んだ。

「その名前は判るか。」

「ええ、そんなにおおきな声で言わなくても判りますよ。名前はね、えーと、大船碇、確か大船碇禎治って名前でしたよ。千葉の大船碇組の組長です。僕の友人と一緒に呑んでいる時に漏らしたのですが、3ヶ月のビザでオーストラリアへ行っただけで帰国しないと話す話でしたよ。」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。」

小野原が受話器を押さえて香山に言った。

「香山さん、そのネームを見てくれませんか。オオフナトと読めませんか。」

「ええ、言われたらオオフと読めますね。」

香山が答えた。

「おい、山本君。その君の友達に連絡してその人間がわたしの住んでいるダルビーって所で白骨死体で発見されていると伝えてくれ。今、現在、わたしの目の前でその白骨死体が寝ているんだ。」

小野原勉がせき込んで山本に言った。

「判りました。すぐ連絡してそちらに折り返し電話をさせます。」
電話はすぐに切れた。

「この人物の身許が判明しましたよ。名前は大船碇禎治。千葉県のかぐさの親分でした。」

小野原勉が英語でジェイソン課長に伝えた。

「おう、さすが日本の警察だ。素晴らしい。ありがとう。」

ジェイソン課長が小野原の手を両の手で握り頭を下げた。

第二十章 大船碇禎治逃避計画

第二十章 大船碇禎治逃避計画

「靖之、お前がやっている事は関西の方でも見通されているんだぜ。下手なことをすると金だけじゃ無くて、タマまで取られちまうぜ」

オーストラリアへ来て、豪勢なネラング川に面したウォーターフロントの別荘で大船碇禎治が息子の靖之に言った。

「へえ、俺もそんなに有名人になったか。日本に帰ったら親父の跡継ぎで一躍羽ばたけるようになるかもな。」

靖之が親父の消沈に比べて、逆にはしゃいだ声で言った。

「バカヤロウ。お前が俺の跡目を継ぐ線はもう無いだろうよ。」

「なんでだ。親父には俺しか男の子供はねえんだぜ。跡目は俺って決まっていたんだろう。」

靖之は親父のか細い返事に、強く言葉を返した。

「まあな、お前がこつちにいるあいだに色々とした事が有って、そろそろ俺も身を引かなくっちゃならねえ事になりそうなんだ。下手すると俺のタマを取られる事もあるだろうよ。まあそうなっちゃ、お前にまで手が伸びるかもしれねえが。」

靖之は親父がブツブツと言う言葉を逐一かみ殺して聞いた。

「何だよ。何があつたんだよ。」

「まあな。関西のスパイ野郎が俺のまずいところを見つけやがって、ここへくる前にちよつと脅しをかけて来やがったんだ。今のところは1000万円をやって黙らせているが、これからちよくちよく金をせびりに来るだろう。金の有る内は黙らせる事も出来るだろうが、無くなれば俺のタマは無くなる程の事だ。」

靖之の言葉に大船碇禎治が答えた。

「なんだよ。親父。何をやったんだ。」

「別に組をどうとか、山協会に義理を欠いたという訳ではないんだ。まあ個人的な問題だ。」

靖之は親父のその言葉を聞いて、あつ、女がからんでいるなと判断して言った。

「よし、判った。それで親父はどうするつもりなんだ。」

「そうよなあ、金をまとめてこつちへ持ってきて組から逃げ出す事でもするか。」

「なに言ってるんだ。そんなことで解決出来るって問題でも無いだろう。そのスパイ野郎を消してしまう訳にはいかねえのか。」

靖之が言った。

「バカヤロウ。それこそ墓穴を掘るようなもんじゃねえか。」

「そうか親父がそう言うなら・・・じゃ、ここで決めてしまおう。」

まだそうせっぱ詰まっている様子じゃ無さそうだから、親父は一旦日本へ帰る。そうして出来るだけ組の金をこつちへ送れ。明日銀行に別の口座を幾つか作ってくる。そこへありつたけの金を送ってくるんだ。あとはうまい時期を見つけて日本から蒸発しな。親父がどこかを半年ぐらいほつき歩いてこつちへ来た段階で、俺がうまい隠れ家を用意しておいてやる。」

大船碇禎治は期待していた靖之の言葉に満足そうにならずに言った。

「よし、そうと決まれば今夜はうまいもんでも食いに出るか。」

江東区にある早川建設本社社長室に帰った早川浩一は専務の北見を呼んだ。

「北見君、公共工事の見通しはそのごどうなっているかね。」

「はい、国はそろそろ期限が切れるので入札参加が許されると思いますが、まだ都の方は堅くて少なくとも復帰できるまでにはあと3ヶ月は待たなくてはならないと思います。」

北見が答えた。

「そうか、そうすれば営業はとりあえず国関係を重点とした方がいいな。民間の進捗状況はどうかね。」

「民間は社長の関連されている。エムパック社からの受注が順調ですから、昨年度に比べて200パーセントの伸びを示しています。」

「ふむ、エムパック社以外の分はどうかね。」

「そちらの方も最近の建築ブームとマンションの建て替えなどが入り、同じく約200パーセントの伸びです。」

北見の言葉にうなずきながら

「そうか、国関係の工事が復活すれば恐れる事は無くなったと言う事だな。」

早川浩一が言った。

「はい、しかし、これまで3ヶ月間の指名停止はかなり資金的な問題点を残しました。下請け関係は一応、民間工事へとかなり振り分けましたが、半数が縁切れ状態です。」

北見が意見として加えた。

「俺の個人的な話だが、オーストラリアで大学まで卒業して弁護士事務所を始めた息子が、やはりほんくらまでは直っていなかった。そこでだ、実際、俺ももう歳でもあるし、そろそろ引退して息子の応援をしてやろうと考え出したのだ。会社も沈没を免れた様子だし、いっそのこと俺は会長職へと退くから、君が社長をやってはくれな
いか。」

早川の突然の言葉に一瞬ビックリした北見だ。早川に息子が居る以上、自分が社長になれる目は100パーセント無いと諦めていた。それが目の前に手の届く所へと来た。後は手を伸ばして掴むだけだ。しかし、現状で社長を引き継ぐには随分と大きなリスクがある。社長には楽観的な意見を具申したが、実際の所は火の車だった。それでも社長と言うポストには何にも代え難い魅力がある。

「わたしごときの若輩を社長の後継としてお考え下さった事は謹啓に耐えません。もしその様な事になりましたら身命を賭してでも会

社に忠誠を置き、建て直しと進展に寄与したいと思えます。」

北見が机に手をついて言った。

「そうかそうか、了承してくれるか。そしたら早速取締役会を開いて貰おうか。それから臨時株主総会だな。俺としたら早い方が良くからな。そうそう退職金も考えて置いてくれよな。」

早川が最後の言葉は声を細めて言った。

「はっ、それはもう。お任せ下さい。」

翌日開催された取締役会で早川社長退任、会長職就任の決議がなされ、北見社長が誕生した。席上、早川会長に対して50余年間の功績が讃えられ、退職金8億円の支給が決議された。

第二十一章 密謀

第二十一章 密謀

「初恵か、俺もやっと自由時間を持てる様になった。そこで俺はそっちへ行つて住むことにした。こつちの家などの財産は古女房にやつて、来週にはそっちへと行けるだろう。」

早川から初恵の住むゴールドコーストへ電話がかかってきた。

「お父さんが、こつちへ来て住むつて電話があつたわよ。」

初恵が経営する日本食レストランへ夕食の為に立ち寄つた征次に言った。

「えーそれは無いぜ。話が違つじゃないか。こつちは俺達だけが住むつて事じゃなかつたのかよ。」

征次が口を尖らせて言った。

「汚いわねえ、口の中身を飛ばさないでちょうだい。でも仕方がないじゃないの。」

初恵が胸に飛んだ征次の食べかすを手で払いながら言った。

「なんでもかんでもお前は仕方がないで片づけてしまつから、俺が一番苦労するじゃないか。もういいや。」

征次は食事も中途に立ち上がつてレストランから出ていった。親父が日本へと帰つた翌日、征次は母親の留守を好いことに家捜しをして、母親がへそくつていた2000万円の現金と、親父が金庫に入れていた1500万円の現金を手に入れていた。

「馬鹿親ばかりだ。何とか金を作らなくては・・・」

車をカジノへと向けて走らせている最中、ふと亀井靖之の顔を思い浮かべた。そうだ靖之さんに相談してみよう。車を走らせながら

携帯電話からダイヤルした。

「亀井さん、御無沙汰してます。征次です。」

「征次君久し振りだねえ。忙しいんだろう。今日は何だね。」

電話の向こうから元気そうな靖之の声が帰ってきた。

「実は、ちよつとご相談したい事が出来まして時間を作っていただけませんか。」

征次が聞いた。

「どうしたい。弁護士先生が相談したいなんて。反対じゃないのか。いいよいつでも。」

冗談口で靖之が言った。

「今はどちらに居ます?」

「今、今はカジノに居るよ。」

「えっ、そうなんですか。じゃあすぐそちらへ行きますから。」

電話を切ると征次はアクセルを踏んだ。

「どうしたい。それにしても早いねえ。どこから電話をしていたんだい。」

VIPルームのバーへと飛び込んだ征次をいち早く見付けた亀井靖之が言った。

「すぐ前を車で走っていましたのでね。それよりか靖之さんに助けて貰いたい事が出来たのです。晩飯は食べました?」

「どうしたんだい。飯はここで一口ビールを飲んだだけだよ。どこか食べに行くか?」

「ええ、ちよつと静かな所で話したいんです。」

征次が言った。

「静かなところねえ。」

「そうです。どこか知りませんか。」

「静かなところだったって、そんなに流行っていないレストランなんてゴールドコースト中探したって無いぜ。いつそホテルのスイートでも借りて飯を食おうか。」

靖之がアイデアを出した。

「あつ、それ良いですね。じゃ、撲、部屋を取ってきます。」

征次がフロントへと行こうとするのを亀井が制した。

「馬鹿だなあ。何のためにこの会員になっっているんだ。聞くところによれば君は随分とカジノに寄付をしているそうじゃないか。君のカードを貸しなさい。」

征次からカードを受け取って、亀井は手を挙げてウエイトレスを呼んだ。

「君、このカードをチェックしてスイートルームを今から確保してくれ。食事をするだけで宿泊をする訳では無い。ついでに中華レストランから2人分のセット料理を部屋に運ぶ様にしてくれ。」

亀井は言ってカードを渡し、

「部屋さえ空いていれば、ただだよ。」

征次に向かつて、ウインクをして言った。

「へー、そんなことが出来るんですか。」

判らないと言った感じで征次が言った。

「何だ、毎日毎日通い詰めて居るのにそんなことも知らなかったのか。随分とカジノに奉公したものだなあ。3ヶ月毎に君の掛け金額がコンピューターに積算されており、その額に対して何パーセントかを払い戻してくれて、この建物内での利用金額をその範囲内でただで提供してくれるんだぞ。」

亀井の説明を聞いて征次は今までの負け金額を頭に浮かべ、随分と損をした気持ちになった。

「そうだったんですか。考えたら賭と合わせて随分と損をしたんだなあ。」

「ははは、まあその分を博打で勝てば言いじゃないか。」

部屋が取れましたとバーマネージャーが部屋のカードキーと入室確認書を届けてきた。

「じゃ、行くか。」

受け取った亀井がせかすように立ち上がった。

「さて、何の話を聞かせてくれるのかな。」

部屋に入っても雑談だけで酒を酌み交わしていたのだが、中華料理がテーブルにズラツと並べられ二人がイスに座った段階で箸を取り上げた亀井が征次に言った。

「ええ、実は、本当に話にくいのですが、・・・1億円ぐらい貸して貰えないかと思ひまして・・・」

箸を持った手を下ろして征次がうつむき加減に言った。

「何を言っているんだ。君とこころ見たいな財閥が金を貸してくれなんて。どうしてだ。まず理由を聞こうか。」

亀井はフカヒレの入った碗を手にして言った。

「実は・・・この前ちよつと大きな勝負をしまして、その時親父がゴールドコーストに来ていたので、金を持ってくる事が出来なかったのです。だから、陳さんに借りたのです。その支払いが出来ないのでとりあえず亀井さんに借りられないかと・・・」

征次の声がだんだんと小さくなってくる。

「待て待て、そう言う金の借金申し込みなんて誰も貸さないぜ。お前の親父さんは40億もこつちへ送ってきているって、この前君が言っていたじゃないか。その金を使えば何も問題は無いじゃないか。」

亀井が言った。

「ええ、それは本当なんです。定期預金証書も何もかも僕の事務所です。ですから何もかも判っています。でも総て親父自身の名義ですから手の付けようが無いんです。」

今度は征次も顔を上げ、亀井に堂々と説明した。

「ふーん、まあ食べながら考えようや。このフカヒレ。うまいぜ。」
亀井が手に持った碗を持ち上げて征次に言った。

「そうですね。うまいですね。全部ただだと考えたら特にうまさを感じます。」

征次もフカヒレの碗に口を付け一口すすって言った。

「ところで、その定期なんかのサインは誰がしたのだい。」

亀井が豚を焼いて味付けした皮と野菜を小皿へと移しながら聞いた。

「親父は中学しかでていないので英語なんてからつきだから全部俺がしたよ。」

征次が口一杯の料理をモグモグと噛みながら言葉を出した。

「お前も馬鹿だなあ。それなら一番簡単じゃないか。親父は送ってきた金額は全部判っているのか。送金手数料や色んな費用を引き算したキツチリの金額を。」

亀井が持った箸で征次を指さしながら聞いた。

「そんな事は判っている筈はありませんよ。実際、送ってくる度に何億何千万に小さな数字がくっついていいるから、そして何度もだろ。計算もしていないからだいたいこのぐらいだろうと思っっていると思う。俺も正確な数字は、うちの吉川君から聞くだけで40億と言う数字だけしか覚えていないくらいですから。」

「なら、簡単な事じゃないか。明日銀行へ行つて必要な金額を解約してお前の口座に入れて置けば済む事じゃないか。それもあるが、ついでに5億ぐらい余分に引き出して、征次、俺の仕事に投資しないか。今、マンションの建設販売をやるうとしていいるんだ。これは大きく化けるぞ。サーファーズパラダイスはお前も知っているように今、ハイライズラッシュだろう。しかも値段はうなぎ登りだ。もう土地は契約済みだ。最終取引は今月末。この金は俺の親父が投資する。ビルの設計も終わっているからお前に見せても良い。16階建てだぞ。建設費は親父と俺とで出す考えだったが、お前にも分けてやろう。そうしたらその1億円ぐらいは簡単に穴埋め出来るぞ。」

亀井の言葉を感心しながら聞いていた征次だ。

「さすが、亀井さんは違うなあ。その若さで、俺の親父より凄い仕事をしているんだ。一旦親父は日本へ帰ったからしばらくは来ないだろうし、・・・そうだ。亀井さん。明日時間ありますか。一緒に俺の事務所へ行きませんか。」

「あした、明日か。俺も忙しいからな。その親父が使っている銀行

はどこなんだ。」

「ナショナルとウエストだけだ。」

「そうじゃなくって、ブリスベンかゴールドコーストかどちらなんだ。」

「便利が良いようにサーファーズパラダイス支店を使っているよ。」

「なんだそうか。それじゃ、明日ブリスベンまで行ってもこっちまで引き返して来なくちゃならないじゃないか。いつそのこと今から行って証書だけ持ってくる事にするか。」

「そうですね。そうしたら朝一番で銀行に行けますね。」

征次もうなずいた。

「よし、そうと決まればこれを早く食おう。」

亀井は顎で料理を指しながら言った。

「あんなところに車を停めて大丈夫なのか。」

征次の弁護士事務所があるビルまで来て地下駐車場へ入るキーを持って来なかった征次に亀井が聞いた。

「大丈夫、大丈夫。この時間は誰も車の移動なんかしないから。」

征次はそのシャッターの真正面にバリケードを張るように車を停めたものだった。

ビル内へは征次が持つカードキーで問題なく入ることが出来た。

「やっぱり事務所街だな。ゴールドコーストと違って人間がいないや。考えてみたら、こんな夜中のブリスベンなんか来たことが無かった。」

変なところで亀井がしんみりと言った。

「さあさあ、入ってください。今電気をつけます。」

征次は言いながら、電気のスイッチを入れ、横にある警報装置の設定解除用ボックスのカバーを外し、テンキーを素早く押した。手慣れたものだと亀井は後ろで眺めていた。

「お前はこんな夜中によく来るのか。」

「うん、こつちにもカジノがあるからな。家に帰るのが面倒な時にはここで泊まるんだ。」

征次が自分の部屋まで歩き、ドアを開けて言った。

「さすが弁護士先生の事務所だな。随分と綺麗に片づいているな。」
亀井が事務所を眺めて言った。

「なんか今日はいつもと違って綺麗に片づいていますね。いつもは書類が山のように積み上げられているんですよ。まあ綺麗なものいじゃないですか。」

征次は言いながら事務所の隅にデンと置かれている金庫の前まで歩いた。手には自室から持ってきた小さな紙切れを握っている。その紙切れを見ながら金庫のダイヤルを廻し始めた征次に向かって、
「何だ、お前は金庫のナンバーも知らなかったのか。」
と、亀井が聞いた。

「そうじゃないんだけど、こんなのいちいち覚えなくてもいいじゃん。どこかに書いておけばそれを見て廻せばいいだけだから。」

征次が金庫に耳を付けながら言った。

「馬鹿だなあ。それじゃその紙を見たら誰だつてその金庫を開けられるじゃないか。」

「あつ、そうか。でも弁護士事務所なんかへ入る泥棒はいないぜ。書類だけしか無いもんだ。」

征次が答えた。

「社員とか別の弁護士なんかに見られたら困るものなんかはどうするんだ。」

「ははは、そんなの無いって。事務所の中では誰も秘密なんて持っていないから。」

征次が言いながら預金証書の束を取り出し、

「これです。結構あるでしょう。」
ずしりと束になった証書類を近くのデスク上に置いた。

「これ全部がゴールドコーストの支店なんだな。」

「そうですねよ。」

「よし、じゃ、行くか。」

亀井が歩き出すのを征次が止めて言った。

「えー、亀井さんこれ全部持って行くんですか。5億円を選ぶんじや無かつたんですか。」

「お前も馬鹿だなあ。5億円借りるのも40億円借りるのも一緒じやないか。そこに使ってくださいって金があるのだから、使ってあげなきゃ可哀想だろう。」

「でも、もしもの事があつたら・・・。」

心配顔でもじもじしている征次に

「いいから、いいから。行こうぜ。」

と亀井がせかせせた。

「でもちよつと待つてください。俺にしたら大きな金なんです。もし親父に見つかつたら殺されてしまいますよ。」

征次が言った。

「お前は親父を尊敬しているのか？好きなのか？」

亀井は征次に話的をそらせた言葉を吐いた。

「何ですよお、そんな。親父を尊敬？だれが？好き？誰を？今更そんなことを聞かれたって返事は全部ノーですよ。」

征次が力を込めて言った。

「じゃ、親父が居なくなれば、その金は全部お前の物じゃないか。

遅かれ早かれ親父はあの世へ行くんだ。ちよつと早めに背中を押しやるだけで、今お前が必要な金を使えるんだぞ。」

亀井が静かな声で重々しく言葉を征次に吐いた。

「そ、そんな・・・。」

「まあ、考えてもみる。お前は親父がいつ来るかわからんと言つたな。日本へ帰つたからしばらくは来ないと言つただろう。そのしばらくは1ヶ月か、1年か？どうだ、そんな期間でお前がこの中から使う金の充填が出来るのか。もし明日にでも来られて見る、どうするんだ。」

亀井は征次の前に立ち、

「お前も薄々感づいて居るだろうが、俺の親父はお前と同じで姓が違う。千葉でも名づてのやくざの親分だ。今、親父もこっちに住んでいるから、俺がうまいシナリオを書いてやる。俺の言う通りにしろ。心配するな。お前は明日から大金持ちだ。」

「ど、どうするんです。」

「まあ、任せておけつて。心配しないでその束を持って早く出ようぜ。」

征次は迷ったが、亀井を信じて金庫を閉じ、亀井に続いた。

第二十二章 逃避

第二十二章 逃避

「おい、ヤス。この金を靖之へ送ってやってくれ。」

大船碇禎治が組の金を担当させているヤスに言った。

「親父さん、これって、このまとまったやつですかい。」

ヤスが帳簿を示して言った。

「そうよ、その10億だ。」

「だっておやつさん。これは組の金ですぜ。」

「バカヤロウ。組の金でも何でもいいんだ。ちよつと土地を動かして金儲けするんじゃないか。おいヤス。今どき、日本の銀行に金を黙って預けている奴がいるか。考えてもみる。そんなこととして金が増えるなんて事があるか。今、靖之はマンションまで建てて売ろうとしているぐらい羽振りがいいんだ。その尻馬に乗って金を儲けて何故悪い。手前も有り金全部靖之に送れ。儲けさせてくれるぜ。」

大船碇禎治が唾を飛ばしながらヤスに言った。

「へい、判りました。じゃ今日にでも銀行から人を呼んで、送らせておきます。」

ヤスが部屋を出て行ってから、大船碇禎治は考えた。

「これで組の金も大半は送ってしまった。何か売る物はもうねえか。家を売っちまえばみんなに判るし、よし。」

立ち上がって廊下側の障子をガラツと開けた。側にいた2人の若衆がビツクリしたように飛び上がった。

「おい、出掛けるぜ。」

車に乗って若衆の一人が聞いた。

「親分。どちらへ。」

「おうよ。ちよつと中沢ンとこへ着けてくれるか。」

中沢と言えば隣のシマを縄張りとしている組だ。今は抗争など無いが、境界線はいつでも一触即発状態にある。同行する二人の若衆だけでは、何か有った時には親分を守りきれぬものではない。若衆同志で目を合わせた。

「何を考えている。戦争をするつもりで行くのではない。ちよつと話をしに行くだけだ、心配しないで行け。」

大船碓禎治も若衆の考えている事は手に取るように判る。安心させるように言つて車を走らさせた。案の定、中沢組の事務所前に車を停めた時には、ずらつと取り囲まれた。

「おう、中沢はいるかい。ちよつと大船碓が話しに来たと取り次いでくれないか。」

車の窓を開けて、大船碓禎治が言った。

「へい、ではちよつとお待ちを。」

その中でも少しは格が上そうな骨節の強そうな奴が、大船碓を確認して中へと走り込んだ。

「親父が会つと言つてますんで、どうぞこちらへお入りください。」

その若者が大船碓禎治の扉を開けて言った。

「おつ、そうか。では、そうだ。お前達が入つてくると雰囲気がまぶくなるだろうから、迎えは俺が電話をするからそれまではちよつと帰つていな。」

大船碓禎治がついてきた若衆二人に言った。

「それでは俺達が若頭にどやされます。」

「よしよし、それは俺がなんとでも言い繕つてやるから心配するな。早く帰えんな。」

大船碓禎治が車を降りて言った。

「じゃ、おやつさん案内しますから、こちらへどうぞ。」

腰を低くしてドアを開けた中沢の若衆が案内した。

「どうする。兄貴。」

一人の車を運転していた若衆が助手席の若衆に聞いた。

「どうするって言ったって。親分が行つちまつたからしょうがねえだろ。でも外を見てみな。こんな所でじつとしていると余計まざいぜ。」

二人は車の外側をズラツと取り囲んでいる中沢組の戦闘員を見て怖じ気づいた。仕方なく軽くクラクションを鳴らして車を走らせた。

「ほう、どうしたい。珍しい客人じゃあねえか。まさか首でも取ってくれって差し出しに来た訳じゃああるめえ。」

座敷で中沢が出てくるのを待っていた大船碇禎治の前に床柱を背にして中沢がドツカと座った。

「まあ、考えたらそうかも知れませぬ。と言つても斬り合いに来た訳じゃ有りませんから安心してください。もっぱら丸腰でたった一人で来るんだからそんな心配もいりませぬやな。」

横に離れて座っていた若衆連中が、大船碇禎治の斬り合いと言ふ言葉に反応した動きを押さえるように見回して大船碇は言った。

「それで、今日はいったい何の話がしたいと言うんだ。」

中沢が若衆を睨んで、大船碇に言った。

「まあ、簡単な話では無いので、一杯やりながら話そうぜ。」

「判った。おいみんなこの部屋から出て行け。そして酒の用意をしる。」

中沢が手で追い払うようにして若衆達に言った。

「よし、これで誰もいなくなった。話を聞かせて貰おうじゃないか。」

「そうさなあ。まあそう急ぎなさんな。酒でも入らなくちゃしらぶじゃ言えねえ事なんだ。」

大船碇禎治がせかす中沢を押さえて言った。

「ふん、どんな話しかしらねえが、ご大層なこつた。おい、酒はまだか。」

中沢がつぶやいた後、障子の外へ向けて大声を發した。酒が来て久し振りに酌み交わしたあと、

「実はな、金がいるんだ。まっ、使い道は野暮だから聞かねえてください。その金も纏まったもので欲しいんだ。」

大船碇禎治が言った。

「なんだと。おめえさん。借金の頼みに俺のところへ来たって話しか。」

中沢が少し腰を挙げて言った。

「まあまあ、そう言いなさんな。実はな、そろそろ俺も歳だし引退を考えたんだ。でもよう、後を継ぐ人間に思いあたらねえんだ。そこでふと考えたのがおめえさんだったのさ。今まで色々あったよなあ。昔からおめえさんとは喧嘩ばかりしてたよなあ。それが辞めようかと思つた時におめえの顔が出てくるなんざ。俺もやっぱり歳かなあ。しかも同じ時期に山協会の傘下に入るしよう。いつまで経つてもこうやって酒を酌み交わす事など出来やしねえと思つていたんだ。そう思つたら矢も楯もたまらなくなつて来てな。こうやっておめえさんの顔を見に来たつて寸法よ。」

大船碇禎治がしんみりとした口調で話した。

「と言うことは、おめえさんは自分のシマを俺に譲りたいと言うのか。」

中沢が外の若衆に聞こえないように声を落として言った。

「そうよ。話が判るじゃなえか。」

「幾ら欲しいんだ。」

「そうよなあ。10億も積んでくれれば文句はいわねえぜ。」

「10億。随分と安く見積もつたもんじゃねえか。そんなんじゃ若衆連中に手切れも出来ないんじゃあねえのか。」

中沢が言った。

「なに、構成員も含めて約2000。すべておめえさんにくれてやらあ。」

大船碇禎治は手に持った盃をグイと開けて中沢へと差し出した。

「よし、判つた。15億をやるう。おめえさんの退職金だ。」

中沢が大船碇から盃を受け取つて言った。

「これで戦争も終結だな。」

大船碇禎治が徳利を持って中沢の盃を満たした。

「そうよな。ところでこれからどうするんだ。」

中沢がグイと飲み干し、その盃を大船碇禎治に返しながら聞いた。
「ふふふ、まあそれは内緒だ。女でも連れて山脇会の目が届かないところへでも飛ばさ。」

「なんだ、もう決めているのか。そうか。おめえはいいよな。俺なんざ、ガキがウジャウジャいるからそのシマ分けに苦労しているところだ。そんなことはまあいい。ところで、金はいつ欲しいんだ。」

中沢が今までの心の中の鎧を外して言った。

「そうだな。今日明日と言つ訳にもいかないだろうから。俺の方から振り込み先を連絡するぜ。まあ外国だな。送金先は。」

大船碇禎治が考えながら言った。

「外国送金なんて俺んところではやったことないぜ。」

「まあそれは、俺んところのヤスをこつちへ送り込むからそれにやらせればいい。まずはそいつを俺との連絡役としよう。ここへ送り込む前に奴には言い含めておくから、最初にそいつから養ってやってくれ。奴は今、俺んところで代貸だ。こつちでもその程度で盃をくれてやってくれ。銀行や金関係では何でもよく判っている奴だ。そうそう奴は大学まででているからな。」

第二十三章 酒場

第二十三章 酒場

金曜日の夕方、香山と小野原は、ダルビーの町へと出掛けた。当初、香山が小野原に酒場へ行つて酒を飲んでみると必ず誰かが話し掛けてくるから、それを無料英語教師として考えれば英語力が見る間に付くと教えた。それが毎週の習慣となった小野原に今日は香山も参加した。週末の酒場は喧騒そのものだった。カウンターの前もテーブルも総て色んな職種の人々で埋められていた。すこし隙間を見付けカウンターへと進んだ二人がそれぞれの好みのビールを頼んだ。そのビールを受け取り何となく乾杯と言いグラスを合わせた二人に横で飲んでいた一人の農夫が聞いた。

「あんたら日本人か？」

60歳をとおに過ぎて、そろそろ衰えが訪れる頃合いの男だった。「そうだよ。」

香山が少し考えながら言った。実は香山は既に国籍を移しているのだから本質的にはオーストラリア人である。

「あんたは先週も見かけたが、こつちで何をしているんだ。」

酒に酔ったくさい息を小野原に吹きかけながらその男が聞いた。

「えっ、わたしはリタイアでこちらへと来ている。」

小野原勉が急に話し掛けられたので少しぎこちない言葉で言った。「リタイアした都会者がこんな所で面白くも無いだろう。毎日何しているんだ。」

酒臭いからみ口調でしつこく聞くので小野原が

「何を言ってるんだ。こんな良い所は無いぞ。空は綺麗だし、空気はうまい。土地は広くて、人は良い。」

と、褒め称えてやった。

「お前ら日本人は金持ちだから、町へ行った方が楽しいんじゃないか。」

何となく喧嘩調に言葉がなってきた。これはまずいと小野原は考え廻りを見回すと、二人の会話に興味を持っているのか廻りの総ての人々が見ていた。

「でもな、町には恐竜がいないからな。」

小野原が言葉を返した。

「なんだと、恐竜だ。わははは。こんな所で恐竜探しているだと。わははは。」

酔っぱらいのお爺さんも含めて廻りの人々が笑い出した。

「なんか見つけたのか。」

別の人間が聞いた。

「樹木の化石以外はまだ見つかっていない。でもこの香山さんなんかここで数年間掘り続けて居る人なんだぞ。」

と言つて香山を振り返った。しかしそこには香山の姿は無かった。そんな時、

「おーい、おーい。ミスターおの・・・」

と、呼ぶ声が聞こえた。見回すと5メートル程離れたところでジェイソン課長がビールのグラスを挙げて小野原を呼んでいた。小野原はここで話していたら殴り合いになるかも知れないと危惧を覚え、人混みをかき分けながらジェイソン課長の方へと進んだ。なんとそこには香山も来ていた。

「ははは、酔っぱらいにからまれていましたね。」

「何あんだ、香山さんも知っていたのですか。助けてくれると思っていたのに振り返ったら居ないから、先に逃げたかなと思いましたよ。」

小野原が口を尖らせて言った。

「ははは、いい英語の勉強でしょう。実は本当に逃げ出したのですよ。このジェイソン課長を見つけれましたからね。」

ジェイソン課長は制服警官も含めて数人で飲みに来ていた。

「制服で飲みに来るなんて日本じゃ考えられませんよ。」

小声で小野原が香山に言った。

「何言ってるんです。みんなの服を見てご覧なさい。制服姿じゃ無いのは我々ぐらいですよ。まあ農家の親父なんかは農機具メーカーに買ったシャツなんかですがね。どうですみんな胸にどこかの会社ネームが入っているでしょう。いわゆる新宿や新橋なんかの立ち飲み酒場に背広に会社のバッチを付けて飲み戯れている人間とどこも変わりませんよ。」

香山が小声で言った。

「そう言われてみたらそうですねえ。それにしても警察官の制服はまずいですよ。」

「でもね、通勤途中でもみんな制服ですから、家に帰る前に一杯やっていると言うのは何もやましい事はありませんからね。」

小野原には説明されても納得出来ない。

「この前はありがとう。御陰で昨日犯人を捕まえましたよ。」

ジェイソン課長が横から声をかけた。

「えっ、そうですねえ。それは早いですねえ。さすがジェイソン課長だ。おめでとう。」

小野原がグラスを挙げて嬉しそうに言った。

「でもな、ところがだ。まる2日もの間、否認を続けているんだ。誤認逮捕だとまずいのでねえ。」

ジェイソン課長の顔に少し暗い影がさした。

「その犯人は、どういった人物なのですか。」

廻りはすべて警察官なので声のトーンを下げる必要も無い。

「日本人だよ。被害者の息子。」

ジェイソン課長が追加のビールを注文しながら背中越しに言った。

「やっぱり、わたしもそんな気がしていたのですよ。」

香山が小野原にささやいた。

「そうですね。わたしも単純にかんがえていましたよ。でもそんな

に否認するとなればもう少し深く考えなければなりませんね。」

物思いに耽つて小野原が言った。

「やつ、こんな所に居た。俺の話はまだ終わっていないかつたんだぞ。」

さっきの酔っぱらい農夫が横から声をかけて来た。小野原を探して人混みをかき分けて来たようすだ。

その農夫は手にしていたビールジョッキを傾け一口飲んで言葉ををつないだ。

「もう1年も前の話だが、ムーニーハイウェイで日本人のレンタカーにぶつけられたんだ。」

酔っぱらったその人が言葉をそこで切った。小野原はそれで日本人を怨んでいたのかと推察した。

「それでな、わしの車は畑の横に停まっていたんじやよ。そこへフラフラ走ってきたそのレンタカーが後ろから突き当たってきてな、」

「おい、爺さん。それは何時頃の話だ。」

ジェイソン課長が気の毒に思つて言葉を挟んでくれた。

「なにさ、朝の4時頃だよ。」

「おい、爺さん。そんな早い時間にあんたは何をしていたんだ。」

「おまえさん、警察見たいな聞き方をするねえ。」

言葉と同時にジェイソン課長は内ポケットから警察手帳を取り出して酔っぱらいの顔面に突きつけた。

「ははは、なーんだポリか。なら仕方がねえや。」

その農夫は心持ち沈んだように言った。

「それでどうしたんだ。」

ジェイソン課長が話の先をつながした。

「へえ、それが面白い奴で。車のよこでシヨンベンをしていたわしが、見に行ったら。頭を押さえながら出てきて、わしの手に100ドル札で10枚を握らせるんだ。ビックリして何の金だと聞いたら修理代だと言ふんじや。まあ古いピックアップで1000ドル出せば買えるような車の修理代に1000ドルもくれる日本人は金持ち

だと思っただけじゃよ。その日に自分で修理したからただで出来たし、夜中の事だから、この近くに住んでいる日本人の家からどこか町の方へでも帰る人かなと思って、この人が住んでいると言うものだから聞いてみようと思っただ。」「

農夫がゆつくりと話したので小野原にも総て聞き取れた。

「それで、あんたはその日本人を見つけてどうしようというのだ。」「

ジェイソン課長がまだ尋問調に聞いた。

「へえ、そんなにたくさんのお金を貰う訳にはいかないの、半分でも返そうと思っただ。」「

農夫が答えた。

「おい、爺さん。そんな必要はない。全部もらつときな。」「

ジェイソン課長がその農夫の肩を叩きながら言った。

「待てよ。その車をレンタカーと言っただ。それはどうして判ったのだ。爺さん。」「

「へえ、ナンバープレートが黄色のニューサウスウェールズ州ので、車の横に赤い字で大きく、Harなんてかかって書いてあったからです。」「

「そうか、車の車種は判るかい。」「

「白のランドクルーザーでした。わしの一番欲しいくるまでです。」「

その爺さんが目を丸く輝かして言った。

「ははは、なるほどな。それでその男は一人だけで乗っていたのか。」「

「へえ、一人だけだっただと思ひます。」「

ジェイソン課長はうまくその爺さんを誘導して聞き出している。

「ところでだ。爺さん。その男の顔を覚えてるかい。」「
横から小野原が聞いた。

「そうだな、まあ見りや判るかも知れないが、そうそう目が・・・」

「爺さん。目がどうしたんだ。」「

爺さんのグラスが空になっただけを見て香山が注文して受け取ったグラスを渡してやった。

「おつ、すまんねえ。そうだ目だ。話しているときどうも変だったんだ。わしを見て話しているのに目は違う方を向いているんだ。今考えたら右目と左目が違う方向を向いていたなあ。だから目だけが印象に強いんだ。格好は普通の背広だった。でもネクタイはしてなかった。身体はわしより少し背が高かったなあ。」

「そこまで一気にしゃべってグラスのビールをゴクゴクと飲んだ。よし判った。爺さん、ちょっと付き合ってくれ。すぐ終わるから。終わったら、今日の酒代は警察でもってやるから。」

「ジェイソン課長に背をつかれ、ビックリしたような顔でジェイソン課長を見上げた爺さんが困惑した顔を覗かせてそのまま連れて行かれた。」

「まあ、この店の裏側が警察署だから、事のついでにその犯人と思われる人物の面通しに行っただけですよ。」

小野原が香山に言った。

「なあんだ、そうなんですか。わたしはてつきりあのお爺さんが悪さをして逮捕されたのかと思いましたよ。所でその面通しって何ですか。」

香山が聞いた。

「えっ、知らないんですか。」

「ええ、そんな言葉は日本語に無いでしょう。」

「それは知りませんが、証人が別の部屋からガラス越しに容疑者を見て、あれは犯人だとか、違うとか言うのを聞いた事ありませんか。」

小野原が呆れたような顔で言った。

「ああ、あれね。あれを面通しって言うのですか。」

「まあ、良いじゃないですか。すぐ終わるでしょうから、帰ってくるまで待つてみましょう。楽しくなってきましたね。」

小野原勉は本当に捜査を楽しんでいるように見えた。

「15分も経たない内に爺さんがバーへと帰ってきた。」

「あれ、爺さん。ジェイソン課長は？」

小野原が聞いた。

「後から来るって言ってたよ。あの人結構偉い人なんだね。知らなかった。」

警察の内部へ入ったのは始めてだったらしく爺さんが、ため息混じりに言った。

「さあさあ、ご苦労さん。爺さんこれ飲んで。」

香山が新しいグラスに入ったビールを手渡した。

「おっ、すまんね。」

受け取ったビールを爺さんは一息で飲み干した。

「やつ、凄い。爺さん飲める口だね。銘柄は何が良いんだ。」

香山が聞いた。

「わしはいつもブイ・ビーのラガーだ。あれが一番うまい。」

「よし、」と言って香山がカウンターの中で忙しそうに働いているウエイトレス婆さんに注文した。

「やれやれ、どうしようも無い馬鹿だよ。俺は。」

ジェイソン課長が帰って来てため息混じりに言った。

「結局、奴は本星じゃなかったんですね。」

小野原勉が聞いた。

「まあな。でもあと4日は調べてみるつもりだ。」

ジェイソン課長は落胆した肩を更に落として小声で言った。

「ジェイソン課長。ちよつと考えている事が有るんです。釈放する時間と日付を教えてくださいませんか。それからあとは我々が尾行してみますよ。」

小野原勉が少し考えてから小声でジェイソン課長に言った。

「ふーむ。犯人で無いと決まったら我々が行動する訳にはいきませんからなあ。いいでしょう。決まったら香山さんの携帯電話に連絡を入れます。」

ジェイソン課長は少し考えながら言葉を返した。

しばらくの雑談の内、二人は自宅までの帰路についた。

「日本に比べて飲酒運転には気楽な国ですねえ。香山さんは何杯飲みました？」

小野原が聞いた。

「えっ、数えていないなあ。10杯分ぐらいは金を出しましたけど、お爺さんに奢ったりしましたからね。それでも5、6杯は飲んでいきますかなあ。」

香山はハンドルを握った片手で数を数えながら言った。

「わたしはもう少し飲んだかな。でもあの店に来ていた人達も車で帰る人でしょう。あの前で飲酒運転の取締りをやったら一晩でノルマ達成でしょうな。」

小野原勉が言った。

「まっ、一番に小野原さんは逮捕でしょうな。ははは。それよりか警察官がそこで飲んでいるのですからまずはありっこないでしょうな。ところでさっき小野原さんがジェイソン課長に頼んでいたでしょう。あんな日にちを聞いてどうするんです。」

香山が聞いた。

「あああれね。ちょっととした考えがありましたね。今捕まっている人物を少し尾行してみようかなと考えているのです。まあ暇つぶしの遊びですよ。いつそのこと香山さんも同行しますか？」

小野原勉は軽く言葉を放った。

「なんと。小野原さんはやっぱり警察根性が抜けきってませんね。そんなことをしても何の役にもたちませんよ。経費もかかるし。まあ、わたしは止めときましょう。」

香山は気が進まないので断った。

「まあねえ。でもこれを解決してあげれば。もしダルビー界隈で飲酒で捕まったりした時に少しはお目こぼしをしてくれるかも知れないじゃないですか。ははは。まあ遊び、あそび。」

小野原は楽しそうに笑いながら言った。

第二十四章 逃避行

第二十四章 逃避行

大船碇禎治はジュネーブ空港へと降りた。ヨーロッパへは2度来たことはある。しかしスイスへは始めての旅だ。息子の亀井靖之が大船碇禎治本人のサインが無ければ口座の開設も出来ないし、入れた金も引き出せないと言うから仕方なく来ただけで、住むのはやはりオーストラリアのゴールドコーストにしたい。

既に息子の名義で自分用にとゴールドコーストで、少し北の外れにはなるが、サンクチュアリーコーブと言う名の大きな団地の一角でウオーターフロントの家を購入していると聞いている。そこは24時間警備体制が出来ており、2名の警備員が入り口で常時入場者をチェックしていると言う。いわば不要な人物は団地内には入れないシステムだ。大船碇禎治のような逃げている人間には最適な環境である。住宅のすぐ裏側には自分専用のクルーザーを係留出来るジエティーと呼ばれる桟橋もあり、必要なら30フィート程度のクルーザーも買っておくと靖之は言っていた。だから逃げてはいるが必要以上に心を狭めて生活する必要は無い。金を使つての楽しい人生を過ごせば良いのだ。よしクルーザーも乗るか。

「いらつしやい。元気そうだね親父。」

アライバルターミナルのゲートを出た所で亀井靖之が迎えた。

「まあ、オーストラリアへ行くよりか少し飛行機に乗る時間が長いと言っただけだから心配する事は無い。それよりかファーストクラスのがよかつたぜ。寝るのに今までのイスだと少しは傾斜が出来るけれど、今日のは全くベッドのように平になるんだ。だからぐっすり眠る事ができた。」

スイスへ入ったと言う安心感からか大船碇禎治ははしやぎ気味で言った。

スイス銀行の口座を大船碇禎治から電話で教えられたヤスは、早速その日の内にその口座へと15億円を送金した。受け取った資金を大船碇禎治は靖之と共に、ヨーロッパ各地の銀行に作った亀井靖之の口座へと分散させて送金した。5日間程の滞在でそれらの作業を終えた靖之はオーストラリアへ、大船碇禎治はイギリスへと旅立った。

「じゃ、ロンドンへ降り立ったら、俺が頼んである通訳が迎えに出ているから心配無い。そいつには親父の写真を渡してあるから、向こうから接触してくる事になっている。昨日も言ったとおりゴールドコーストでの再会を半年後と言うのは長すぎる。日本とオーストラリアの状況を俺が見て連絡をするから、それまではゆっくりとヨーロッパを楽しむこつたな。」

靖之が税関へと入る大船碇禎治に言った。

「おう、判った。お前も気をつけろよ。」

大船碇禎治は言葉も少なく飛行機へと消えた。その数時間後には靖之もシドニー行き英国航空機の中にいた。

「何とか段取りは出来上がった。あんな親父でも親父だからな。長くは無い寿命でも、生きられる限りは生きていられるようにはしてやりたい。それが俺のために苦労して金を残してくれた親父への孝行だ。金はベースだ。多ければ多いほどその基礎となる位置を高く出来る。そのベースが無い奴は地べたを這って生きる。ベースが高ければ、その位置から物事を考える事も出来るし、命令も出来る。上から見る事が出来るから仕事の範囲も広げる事が可能だ。そう言うて俺の為に金を集めてくれた。この15億を加えると既に俺の手中には50億円もの資金が出来た訳だ。これだけの金があれば大船碇組を再構築する事も出来る。しかし俺はそんなことに金を使わない。世界を相手に仕事をしたい。……」

靖之は眠りに就いた。

第二十五章 実行

第二十五章 実行

「靖之さん。親父が気づいたようすなんだ。」

夜中に征次の泣くような声の緊急電話でたたき起こされた亀井靖之だ。

「何だ。どうしたんだ。訳を話せ。そうゆっくりと。」

「うん、今朝、親父が銀行へ行くって言うんだ。俺と一緒に行って通訳しろって。金をまとめないで分散するつもりだったらしいんだ。でも俺としたら親父に銀行へ行かれたら最後だもんな。今日は客が来る予定が有るって断って事務所へ行つたんだ。そうしたら事務所の中には誰もいないんだよ。夜まで待ったけど本当に誰も帰ってこなかった。どうしたんだと弁護士の一人に電話をかけたら、引越した後だった。靖之さん。俺、どうしよう。親父の事も、事務所の事も何も出来ないよ。」

征次が電話の向こうで泣き声を交えて言った。

「よし判った。今どこに居るんだ。」

靖之の言葉に

「今？今はモーターウェイだよ。ブリスベンから帰っている。」
と征次が答えた。

「よし、それならロビーナまで走れ。そこで駅前の俺の新しい事務所へ来い。知ってるな？」

「はい、確か4階でしたね。」

「そうだ。今から行くから30分後に会おう。こんな時間だから、電気の点いているのは俺の事務所だけだと思うからすぐ判るだろう。」

「

靖之が時計を見ながら征次に言った。

「どうしたんだ。事務所に人がいないってのは。」

ちょうど30分後に事務所の前で会った二人はエレベーターで4階にあがり、靖之が自分のキーでドアを開けながら後ろの征次に聞いた。

「ええ、別に事務所に用事があつて行った訳では無いのですが、家にいる訳にもいかなかったので行つたのです。最初は昼飯にでも出掛けていたのかなと思つていたのですが、ちよつと昼寝をして4時頃コーヒーでも頼もうと自分の部屋から内線電話で遥香を呼んだんだ。その時に誰も出ないからどうしたのかと事務所へ出てみたら電気も点いて無くて、誰もいないんです。6時まで待つてたんですが誰も帰つて来ないので事務所を閉めてカジノへ行つたんです。勝てなかつたので10時にもう一度事務所に帰つてみたけどやっぱり誰もいない。忙しいときなんかはみんな居るんですが。どうしてだろうつて考えて吉川君に電話を試してみたらメッセージサービスで、この電話は使われていませんつていうアナウンスだけなんです。」

征次が応接セットの長椅子に座りながら言つた。

「その吉川君つて言うのは弁護士だね。他の弁護士の電話番号は知らないのか。」

靖之が聞いた。

「弁護士もみんな独身ですから、俺が買っているマンションに一緒に住んでいました。あつと、遥香だけは別に自分でアパートを借りていました。でも最近部屋が変わつたつて言つてたなあ。」

征次が答えた。

「ちえ、しょうがないなあ。それはお前に愛想を尽かして出ていったんだよ。携帯電話番号は判るんだろう。そつちへかけてみたのか。」

「いえ、携帯電話はプライベートもかかつてくるからとみんな教えてくれません。」

「参つたなあ。お前はどうしようもねえ奴だなあ。まあお前の弁護

士事務所は開店休業にするしかないな。ところで親父の方はどうな
った。」

靖之はポケットからウインフィールドを出し1本引き抜いて、う
まそうに火をつけて深く吸い込んだ煙を吐き出しながら言った。

「うん、今朝10時頃俺が起きたら親父が、今から銀行へ行くから
ついてこいって言ったんだ。何のために行くんだって聞いたら。一
箇所の銀行に大きな金を置いていたら目立つから、分散させるって
言うんだ。これはやばいと思ったから俺は今日客が事務所に来るか
ら行けないって断って飯も食わないで家を飛び出したんだ。もし一
人で銀行へ行っていたら全部の金を俺が引き出して、俺の口座に入
れている事も知られるし、カジノでの負けも判ってしまうし、陳に
払った金額や、靖之さんに投資している事も全部わかってしまう。
もうばれているかも知れないんだ。」

征次は言葉の最後の方では力を落として言った。

「そうか、お前は親父が居るから苦労しているんだな。まあ俺ん所
も同じようなもんだ。親父はいつかは先に死ぬ。いつその事、早め
に死んでくれた方がよいなんて考える事もあるよな。お前もそう思
った事は無いか？」

亀井靖之がしんみりと征次に言った。

「そりゃあ俺なんか毎日そう思っているよ。今日でも今、家に帰っ
た時に親父が死んだなんて聞かされたら飛び上がって喜ぶだろうな
あ。」

征次が言った。

「まあな。お前ならそうだろうよ。」

亀井靖之がしんみりと考え込んで言葉を吐いた。

第二十六章 毛髪

第二十六章 毛髪

その後ジェイソン課長は小野原勉などと酒を飲んだ時に聞いたレンタカーに対して調査をしていた。

「課長。レンタカーが割れました。」

数日後、捜査課の一人の刑事が書類と共にデスクの前に来て言った。

「そうか、その車を調べてみたのか。」

「いえ、1年も前の事ですから何も出ないかと考えまして領置しての捜査まではしておりません。」

その刑事はジェイソン課長の問いかけに答えた。

「どうしてそう言い切れるのだ。トランクの中だとか床の下とかに掃除もしない所もあるだろう。もしかしたら何かが出るかも知れないでは無いか。すぐに手続きをとって領置しろ。鑑識には1年前と言う事を徹底させて調べろ。」

事件が迷宮入りになりそうなを感じだしたジェイソン課長は少しでも糸口を辿ろうと焦っていた。

その頃、香山と小野原の亀井靖之に対する執拗な追跡尾行が展開されていた。

「小野原さん、毎日毎日こんな事を続けて居ても何にも意味が無いんじゃないですか。」

ある日香山が小野原勉の家で夕食を揃って食べている時に言った。「まあね。尾行なんてのは昔からの方法で、古いと言われるのですが、これが一番効果的なのですよ。でも今日尾行を始めたからすぐ

にその結果が得られるかと言えば、余程のタイミングで無ければ得られません。だから、忍耐力のいる仕事なんです。香山さんは始めての事だからそろそろつまらなくなって来たのでしょうか。今夜は僕だけで出掛けますから、香山さんはゆっくり休んでください。何かがあれば、携帯電話を鳴らしますから。」

その夜、出掛けた小野原も明け方にはつかれた身体をいたわるようにして、帰宅しベッドへと潜り込んだ。

「そろそろ、ダルビーへ帰ろうかと考えているのです。何か恐竜が呼んでいる気がするんです。」

香山が昼食時に小野原勉に言った。

「ははは、なるほど恐竜が呼んでいるんですか。さすが香山さんだ。じゃあわたしも今週で切り上げていつもの生活に戻るとしましょうかなあ。」

小野原勉も成果の無い遊びを続けるよりも、趣味の成果を見つける方に気持ちを向け替えた方がより楽しい生活になると思い直して言った。

「済みませんねえ。小野原さんの興味をうち砕くような事を言っ

て

香山が恐縮して言った。

「いえいえ、実際わたしの興味は捜査なんかより恐竜ですからね。じゃ、今夜は豪勢にどこかのホテルのレストランで夕食を摂りましょうかな。いかがです。」

小野原勉が言った。

「そうですね。ダルビーへ行ったらうまい物は食べませんからね。たまには散財しましょうかな。ははは。そうだ、わたしは古くから住んで居たのですが行った事のないサンクチュアリーコープのホテル。えーと、何と言う名前だったか忘れましたが、シーフードのうまいレストランがあるそうなんです。」

「そうですか、では今夜はシーフードをたらふく食って鋭気を養って、恐竜探索に備えますか。」

香山の提案に小野原勉が同意して言った。

その夜、5時になって二人はホテルでの食事のために正装して出掛けた。

「サンクチュアリーコーブってところは結構遠いんですね。知りませんでした。」

小野原勉が車の中で言った。

「そうなんです。昔、わたしが入国したときにはまだ無くて、数年後一部が完成したときにフランク・シナトラを呼んで野外コンサートを開いたところなんです。勿論、聞きに行きましたよ。凄い人数の人が熱狂したのを覚えています。その後日本の会社が買い取って販売していましたが、バブルで会社はつぶれてしまったそうです。でもそれからでも新しい所有会社が開発を続け、今ではシヨッピングセンターやマリーナ、それにゴルフコースを2つも持つ大きな団地になっていますよ。毎年ボートフェスティバルがそこで開催されていて、何度か見に言った事があります。」

小野原勉は香山の説明をうなずきながら聞いていたが、なかなか想像が出来ない。

「そのこの団地は入り口にゲートが有って、更にその前のロータリーに大きな警備員詰め所があるのです。何人かの警備員が24時間体制で見張って入場者の監視をしていますから最高の警備条件の団地なんですよ。だから結構有名な人が家が持っているそうです。」

確か日本の映画俳優なんかも買っていましたよ。」

香山の説明は続いていた。

「さあ、着きましたよ。この進入道路からが目的地です。」

香山が言ってハンドルを右に切った。真っ直ぐの道がゲートへと続いていた。ゲートを入ると言われた大きなロータリーが正面に有り、シヨッピングセンターなどへ行く車は左へと進む。そのまま真っ直ぐ行く道と、右へと行く道は住宅地へと続いている。それらの道には鉄製のゲートがあり、住人以外の進入を拒んでいるように小

野原には思われた。車は少し坂をのぼりホテルの駐車場へと入った。世界に冠たる名前のホテルだったので、小野原勉は高層ホテルのイメージを描いていたのだが何とそこはトロピカルスタイルに纏められた平屋建てのホテルだった。

「こんなタイプのホテルは初めてですよ。」

小野原勉が言った。

「わたしはゴムやフィージーなどで利用しますから違和感はありませんが、日本では土地が少ないから考えられませんか。」

香山は慣れた感じで小野原を先導しながらホテル内部をレストランへと進んだ。指定された席は大きな窓に面したテーブルだった。バイキングスタイルのレストランだ。窓から外を見ると煌々と灯りが灯された10面以上もあるテニスコートが一望出来る。色とりどりのミニスカートがはじけて楽しそうに踊っている。

「さて、まずは飲み物ですが、ちよつと豪華にワインを飲みますか。」

香山が聞いた。

「いいですねえ。香山さん所へ行くようになってからワインの味を覚えさせて貰いましたからねえ。」

香山はテーブルの横で黒色スーツに身を包み左手に真っ白なナプキンを垂らして待っているウェ이터にワインリストから白ワインを選び注文した。

「来週からの恐竜発見に期待して乾杯。」

二人はワイングラスを持ち上げてにこやかに乾杯した。

「さあ、料理を取りに行きましょう。食べ放題ですから料金分は食べないとね。」

香山が言って立ち上がったので小野原勉も続いた。

小野原が大きなエビをナイフで切り裂いているとき、香山がテーブルを指先で小さく叩いて信号を送って来るのに気がついた。指先で香山が後ろの席を指している。小野原がそろつと顔を廻して見た。

そこには今朝まで尾行をしていた亀井靖之が誰かと食事をしていた。「参ったなあ。忘れようとしている時に会うなんて。」

小さな声で小野原勉が香山に言った。

「まあ先方さんは我々の事を全く知らないのですから、しらん振りで食べましょよ。これうまいですよ。」

香山が言った。

「そうですね。」

小野原勉は言っただけでナイフとフォークを動かさなかった。しかし、何かが気になる。ふと立ち上がった

「香山さんトイレはどちらですか」

と聞いた。

「えっ、ああこの向こうですよ」

小野原は指さされた方へと歩き、背中を向けて食事をしている人物をちらつと横目で見てトイレへと向かった。

「香山さん。そろそろ行きましょうか。」

トイレから帰った小野原勉が席にも座らずに香山に言った。

「えっ、まだそんなに食べてませんよ。そうですね。」

香山が未練そうに皿を眺めて立ち上がった。

「どうしたんです。まだ払った金額分は食べてませんよ。」

駐車場で車のドアを開けながら香山が不満そうに小野原に言った。

「香山さん。ビックリしましたよ。幽霊を見たんです。」

小野原勉が小さな目を大きく見開いて言った。

「何ですって。幽霊。何を馬鹿な事を言ってるんです。どこで見たんです。」

香山が不審そうに言った。

車に乗っても考えを巡らせている小野原勉だった。

「おい靖之。お前が選んだこの団地は最高だぜ。こんなに足を伸ばせる所は俺には初めてだ。毎日毎日何かがおこらねえかとビクビク

おろおろする世界から離れて、こんなにのんびり出来る事は俺にはもうねえものだと思っていたぜ。」

大船碇禎治が亀井靖之に向かつて言った。

「まあ親父さんも苦労したからなあ。これからはゆつくりと魚釣りでもして楽しむこつた。明日クルーザーでも買いに行こうか。」

と靖之が言った。

「いいねえ。だが誰が運転するんだクルーザーなんて。」

「そんなの簡単だよ。免許を取りなよ。」

「馬鹿言っんじゃねえ。英語だろう。俺が出来る筈ねえ事を知っているくせに。」

大船碇禎治が言った。

「俺が取れるようにしてやるよ。日本語ならいいだろう。まっ、試験の時も横にいてやるから。」

「そうか、そんなことが出来るのか。やってみるか。それもいいが買い物に行くにも不便があるから通訳の女でも探しておいてくれるか。」

大船碇禎治が好色そうな顔をして言った。

「判っているよ、親父がヨーロッパを楽しんでなかなか、こつちへ来無かったから探していなかったんだ。まあ2、3日したら連れてくるよ。」

靖之が言った。

「お前、少し前に警察に引っ張られたんだってなあ。」

大船碇禎治が声をひそめて言った。

「えっ、誰に聞いたんだ。誰も知らない筈なんだが。」

靖之が焦って言った。

「まあそんなことは誰でもいいや。結局はどうなったんだ話を聞かせろ。」

「ああ、仕事には関係無い事なんだ。俺が以前に家を世話したり、大学を世話してやった馬鹿息子の相談に乗ってやっただけなんだ。だが、それも問題が無かつたんで警察はすぐ返してはくれたから親

父には何も言わなかったんだ。気にするなつて。」

靖之が最初の狼狽から立ち直つて言った。

「まあそれならいいけれど、ところでなんだあの日本人は、恐竜とかなんとか話していたなあ。」

大船碇禎治が話を变えた。

「変なやつらだなあ。こんな所へ恐竜を探しに来ていゝなんて。暇な日本人が居るもんだ。まあ俺達には縁の無い人種だぜ。」

靖之も言葉を返した。

「そうだな。恐竜では儲けにもならないだろうし。まあ典型的な小金持ちの日本人だろう。それにしても飯も食わないで出ていったぜ。」

「

「親父さん。気にする事なんか無いぜ。忘れろつて。それよりか明日は昼過ぎに来るからな。クルーザーだよ。」

「おつ、そうだ。大きいのか？」

「俺も乗りたいたいから、スポーツタイプのでっかいのがいいなあ。」

「よしよし、まあお前に任せるぜ。」

「なにい。出たか。」

ジェイソン課長がイスから飛び上がった。

「はい、後部シートの後ろ、予備タイヤ収納ケースの付け根に一本だけ掃除に漏れた毛髪が被害者の毛髪と一致しました。」

担当刑事が息を切らせてジェイソン課長の部屋へと飛び込んで来て言った。

「よし、そのレンタカーを借りだした人間を徹底的に調べろ。ただし、本人には気づかれないようにな。」

ジェイソン課長の声と共にその刑事はまたもや風のように走り去った。

「ふふふ、見てろよ。今度は逃がさないぞ。」

ジェイソン課長がつばやいた。

「何故だ。何故なんだ。どうして死んだ筈の人間があそこに居るのだ。あの白骨死体は別人のものか。」

あれから2日間、小野原勉は考え続けた。

翌日、香山の提案でダルビーへと帰り、本来の目的へと行動を移す話になり、小野原勉はもやもやする心を抑えて香山の車へと同乗したものだ。乗したものだ。乗したものだ。

「そうだ忘れていた。顔だ。」

助手席で小野原勉が叫んだ。

「どっ、どうしたんです。」

香山がビククリしてくわえていたタバコを取り落としそうになつて慌てて言った。

「あつ、済みません。思い出したのです。ずーと考えていた事がやつと霧が晴れました。」

小野原勉が言った。

「なんなのですか。ビククリするじゃないですか。何をおもいだしたのです。」

正常に戻った気持ちで車のハンドルを持ち直し、香山が聞いた。

「顔、顔ですよ。白骨死体の顔がつぶされていたでしょう。あれを思い出したのですよ。」

小野原がせき込んで言った。

「あれは当初、身許を隠すためにやった事だと考えたのですが、身許が割れた時点でみんなが忘れていたのですよ。そろそろダルビーに着くでしょう。ちよつと警察に立ち寄ってくれませんか。」

「ええ、良いですよ。でも指も無かつたし、ワイシャツの洗濯ネームからも殺された人物は特定出来たのでしょうか。」

香山が聞いた。

「そうですよ。でも生きていたんです。殺された筈の人間が。だからあれは身代わりの人間の死体だったんです。」

小野原勉が説明したところで、車はダルビー警察署の前に着いた。「へー、そうだったんですか。言ってくれないから小野原さんが病気にでもなったかなと心配しましたよ。」

香山が言いながら警察署のドアを押しかけたところで中から飛び出してきた刑事と鉢合わせをした。

「ソリー」と言葉を残してその刑事はパトカーに飛び乗って走り去った。

「痛いなあ、なんだあいつ。」

香山が頭を押さえながら立ち上がってつぶやいた。

「ジェイソン課長に会いたいのですが。」

振り返ると既に小野原勉が受付で話をしていた。

二人がジェイソン課長の部屋へと通された時に、ジェイソン課長がつぶやいているのを耳にした。

「おう、小野原さんに香山さん。何か良いことでもありましたかな。」

ジェイソン課長がさしのべた手を握って、小野原勉が言った。

「何か良い事があつた様子ですね。」

逆に小野原勉が聞いた。

「そうなんだ。今さつき鑑識からの連絡で死体の毛髪と、レンタカーの中から発見された毛髪が一致したんだ。」

ジェイソン課長が言った。

「えっ、そうなんですか。それは良かった。良かった。」

小野原勉がジェイソン課長の手を握り踊るように感激して言った。

「どうしたんです。小野原さん」

ジェイソン課長がいぶかるように聞いた。

「我々も発見しましたよ。被害者はあの人物じゃ有りません。」

小野原勉が言った。

「えっ、ど、どういう事ですか。」

今度はジェイソン課長の驚く番だった。

「実は数日前にこの香山さんと、あるレストランで食事をしたのです。その横の席に今まで死んだ人物だと考えていた人物が食事をしていたのです。我々が犯人だと考えて追求したあの亀井靖之と共にね。」

小野原勉が説明した。

「えっ、どうも貴方が言っている事がわかりませんね。殺された大船碇禎治が生きていると言う事ですか。」

ジェイソン課長が聞いた。

「そうですね。その人物が生きて堂々とレストランで食事をしていましたよ。」

「なんと、、、そうすれば我々は何を追いかけていたのでしょうか。」
ジェイソン課長がガツクリとイスに腰を落とした。

「まあ、そうガツクリしないで下さい。心配ありません。そのレンタカーの借り主を捕まえてください。それでこの事件は解決ですよ。まずは大船碇禎治が本当に生きているのかを調べてください。」

小野原勉に言われてしばらく、机を見つめていたジェイソン課長がはたと立ち上がってドアを開け、

「おい、イミグレ事務所に電話を入れる。大船碇禎治が入国しているか調べる。」

と捜査員室に残っていた刑事に命じた。

「小野原さん、確かにそれは大船碇禎治でしたか。」

「ええ、確かです。」

横から香山が言った。

「そうですね、あなた、香山さんも確認しているのですか。」

ジェイソン課長がこんどはゆっくりとイスに腰を降ろした。

「課長。5日前にイギリスから入国していました。観光ビザです。」

先の刑事がドアを開けて叫んだ。

「やっぱり。」

ジェイソン課長は次の命令を待っているその刑事を追い払うように手を振って追い出し

「小野原さん、貴方はどうお考えですか。」
と聞いた。

「何を落ち込んでいるのです。事件は解決しましたよ。そのレンタカーを借りた人間ですよ。まあ重要容疑者として引っ張ってきて吐かせれば簡単に判りますよ。そうそう、この香山さんは治安判事です。ですから必要な逮捕令状の発給のサインをしてくれますよ。」

小野原勉は言って香山にウインクをした。

数日後、香山の山荘の広いテラスで寝椅子に身体をまかせて香山と小野原がビールを飲んでいたところにジェイソン課長がパトカーを運転して来て言った。

「その節はお世話になりました。御陰で100パーセント解決しました。」

「それはおめでとございます。いかがですか、ちょっとビールでも飲みませんか。」

小野原勉がジェイソン課長と握手を交わしながら言った。

「おっ、いいアイデアですな。ここに座ってもよろしいかな。」
「どうぞどうぞ。」

香山がイスの上をかたづけ、ジェイソン課長を招いた。

「いやあ、助かりましたよ。実際、小野原さんから聞かされなかつたら、未だに死体と犯人とが結びつかなくて迷宮入りするところでした。」

香山がビールを手渡したところで、ジェイソン課長の回想録が始まった。

「実はあれからすぐゴールドコースト市警へと連絡して容疑者を拘束したのです。そこへわたしが出向き取り調べをしたのですが、捕まったことが嬉しかったようにしゃべりだしたのですよ。こっちがビックリした程でした。何の容疑で拘束されているかも話さない内

からあれは自分の親父だと言うんですからねえ。反対に真犯人がいてそれをかばっているのかと考えた程でしたよ。」

「へえ、よっぽど、心の底で罪の意識があったのでしょね。」

香山が言葉をはさんだ。

「そうですね。そうとしか考えられない事ですよ。」

ジェイソン課長もうなずいて回想録を続けた。

「担当刑事が彼の周辺事情を聞き込みましたら、かなり前から事務所も営業をしております。それにも関わらず金回りが凄いです。我々から見て考えられないような金額をカジノで遊んでいたのですからなあ。母親の経営するレストランは大して大もつけをしている風にも見えないので、銀行関係を調べてみると30歳程の男が手に出来るような金額では無い30億円もの預金を持っていたりで、追求したら親父の金を取り込んでいたんですな。まっ、これが発覚しないようにと殺してしまつた訳です。」

「なるほどねえ。うっかりと大金持ちにもなれませんね。そう考えればわたしなんか命拾いをしたようなものですなあ。ははは。」

香山が小野原に向かって言った。

「所でジェイソン課長。あの死体が身につけていた衣服はどうなつたのですか。」

小野原勉がジェイソン課長に向かって聞いた。

「あああれね。あれに関してもしゃべりましたよ。やはり我々が目を付けていた亀井靖之が提供したものでした。実際殺しのシナリオを考えたのも亀井靖之でした。熊谷征次はそれを忠実に実行しただけで、しかもその実行途中で交通事故を起こし、1000ドルを相手に掴ませた段階でそれに関しては終わっていたと考えた事が、命取りになつたわけで馬鹿な奴ですよ。」

「それじゃ、小指の先が無かつたでしょう。あれはどうなんです。」

「あれに関しては、やはり実行は征次でしたが、亀井から貰つた携帯用の葉巻の先切りギロチンが有るでしょうそれで一気に切り落としたようです。勿論、証拠物件として確保はしております。」

小野原勉の問いにジェイソン課長が答えた。

「葉巻の先切りギロチンつてのはどんな物なのですか？」

香山が聞いた。

「楕円形の先に斜めに歯がついたものを二枚重ね合わせて歯の反対側に指が入る程の穴があいており、人差し指と親指で挟み込んで真ん中の歯を噛み合わせて葉巻の先を切ると言うプラスチックで出来た道具ですよ。普段は手に入る程度のケースに収まっています。」

ジェイソン課長が手のひらに絵を描いて教えてくれた。

「へえそんな物で指が切断できるのですか。」

「ええ実験はしていませんが、本人が言うには体重を乗せて押し切ったそうです。いわゆる大船碇禎治に見せかける為だったようです。頭を殴って殺した後、指を切断してその後、背広やワイシャツを着替えさせたようですな。殺害の第一現場は征次の弁護士事務所だったようです。小野原さんが言ったように野球のバットで横殴りにしたようです。そのご、土地の売買で土地勘があった亀井が道案内をしてダルビーの河川底に遺棄したものです。勿論亀井も殺人示唆と死体遺棄幫助罪で逮捕しました。」

ジェイソン課長が帰ったのち、

「ところで、どの時点で小野原さんは征次が殺した事に気がついたのですか。」

香山が聞いた。

「まず、最初に弁護士に会った時点です。わたしの前職を知った段階で急に態度を変えた。これは何か我々に知られては困ると言う事をしているなと感が働いた。でも実際はしようとしていた時期だったのですが。それに親父が行方不明になっているのを知っていながら届け出もしなかった。親父名義の預金を総て自分名義に書き換えしていた。まあそんなことを繋いで行けば、わたしで無くても誰でも判りますよ。そうそう、ついこの前ブラキオサウルスを発見した時、石につまずきましたよね。あれと同じ事でしたよ。こんどはレストランと言う発掘場所で大船碇禎治と言う石につまずいたのですよ。」

それがきつかけで犯人を発見できた訳ですからね。」

小野原勉が答え、ふと考えて、

「香山さん、少し前までは女房はいらないけれど子供は欲しいなんて考えた事もありましたが、今回の事件を振り返ってみたら、やはり一人暮らしはいいものですねえ。」

小野原勉が言ってビールをグイと飲み干した。

第二十七章 エピローグ

第二十七章 プロローグ

大船碇禎治は困惑していた。多くの金は銀行に有るのだが総て息子の靖之の名義になっている。銀行へは行ったこともない。しかもビザの期限が近づいている。

靖之逮捕のニュースで通訳の女が適当に置いてあつた500万円程を持ち去つて来なくなつた。通訳の女と言つても靖之が探してきた程だから肉感的で良い女だつた。40を越えた歳だつたが、テニスで鍛えたその身体は見目には20歳代にしか見えない。ベッドでのテクニクは狂おしい程だつた。惜しい女だつたが仕方がない。持ち逃げされた金も手切れ金をやつたと思えば腹もたたない。

しかし手持ちの現金は金庫に残していた1000万円程しかない。やむなく大船碇禎治は日本へと帰る事にした。日本へ帰ればそこそ逃避するだけの人生が待ちかまえている筈だ。言葉さえ通じるなら何とかなるだろう。

「おい、大船碇の。長い旅行だつたな。」

成田で出向かえたのは中沢会の会長、中沢だつた。

帰国前に電話でヤスを呼び出し、日本での住みかなど色々頼んだのが裏目に出たのを大船碇禎治は悟つた。今のヤスは俺の身内では無く、中沢の身内となつていたので。それを今頃になつて気づくとは、大船碇禎治はくちびるを噛んだ。

ストーリー作者からのお願い

この小説に出てくる人物、会社名、その他現存社会に類似する名称が有りましても総て、架空のものです。ご了承下さい。

素読していただいた方から、エムパツク社3人の取締役がヨーロッパへ逃げたきりになっている。悪をのさばらせるのはいけないと指摘されました。ごもっともです。作者もそう思います。そこで作者は考えました。今回の小説はオーストラリアが舞台でしたが、次作はイギリス版で書きます。その段階で彼等3人を登場させますので、次作「英国版恐竜探索殺人事件」を楽しみにお待ち下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898c/>

恐竜探索殺人事件 オーストラリア編

2010年10月8日14時52分発行